

平成25(2013)年度

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡跡
遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺遺
在在在在在在在在在在在在在在在在在在在
遺在合家在角在古在木城在
山所所所所所所所所所所所所
吉中本・正正所横古山所
井手町神見井桂田谷仁山樋
大山東天桂岩内下会乙乙山福東橋曳青里鍋大

2014

鳥取市教育委員会

序

この報告書は、開発事業に伴い、国庫補助金及び県補助金を受けて、平成24年度から平成25年度に実施した鳥取市内遺跡の試掘調査の記録です。

鳥取市内の平野部や丘陵上には数多くの遺跡が存在しています。これらの遺跡は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していかなければならない市民の貴重な財産です。

近年は、各種開発事業が計画・実施され、特に一般国道9号（鳥取西道路）建設事業に伴う発掘調査が増加しています。文化財保護を推し進めている私共といたしましては、こうした開発と文化財の共存を図るべく関係諸機関と協議を重ね、円滑に文化財行政を進めているところです。

この調査にあたっては、鳥取県教育委員会事務局文化財課、鳥取県埋蔵文化財センターをはじめ、関係各位の格別なご指導・ご協力を仰ぎながら、土地所有者や作業員の方々の熱意により、ようやく調査を終了することができました。ここに深く感謝を申し上げる次第であります。

なお、この報告書は不十分なところも多くありますが、私たちの郷土の理解に役立てていただくと共に、今後の調査研究の一助となれば幸いです。

平成26年3月

鳥取市教育委員会

教育長 木下法広

例　　言

1. 本書は平成24年度から平成25年度に国・県補助金を得て、鳥取市教育委員会が実施した発掘調査の記録である。
2. 平成24年度に実施した調査は山手所在遺跡、天神山遺跡、桂見所在遺跡、岩吉遺跡、会下・郡家遺跡、乙亥正所在遺跡、山手古墳群、福井所在遺跡、東桂見遺跡である。
3. 平成25年度に実施した調査は大井所在遺跡、東町所在遺跡、天神山遺跡、岩吉遺跡、内海中所在遺跡、下坂本清合遺跡、乙亥正人角遺跡、山手古墳群、橋本古墳、曳田所在遺跡、青谷横木遺跡、單仁古墳群、鍋山城跡、大柄所在遺跡である。
4. 天神山遺跡のトレンチ番号は平成24年度から通し番号を使用している。山手古墳群のトレンチ番号は平成24年度から通し番号を使用している。
5. 本書における遺構図はすべて磁北を示し、レベルは基本的に海拔標高である。
6. 発掘調査によって作成された記録類及び出土遺物は鳥取市教育委員会に保管されている。
7. 発掘調査の体制は以下のとおりである。

調査主体　鳥取市教育委員会

事務局　鳥取市教育委員会事務局文化財課

調査担当　谷岡陽一　前出　均　野崎欽五　谷口恭子　神谷伊鈴

8. 発掘調査から本書の作成にあたっては、多くの方々からご指導・ご助言並びにご協力をいただいた。明記して深謝いたします。(敬称略、順不同)

中原　計　西尾孝昌　星見清晴　鳥取県埋蔵文化財センター　鳥取県教育委員会事務局文化財課
(財)　鳥取県教育文化財団

本文目次

序

例言

第1章 発掘調査の経緯と経過	1
第2章 調査の結果	3
第1節 大井所在遺跡	3
第2節 山手所在遺跡	5
第3節 東町所在遺跡	6
第4節 天神山遺跡	9
第5節 桂見所在遺跡	15
第6節 岩吉遺跡	19
第7節 内海中所在遺跡	27
第8節 下坂本清合遺跡	28
第9節 会下・郡家遺跡	33
第10節 乙亥正所在遺跡	34
第11節 乙亥正大角遺跡	38
第12節 山手古墳群	42
第13節 福井所在遺跡	46
第14節 東桂見遺跡	54
第15節 橋本古墳	56
第16節 叟田所在遺跡	58
第17節 青谷横木遺跡	59
第18節 里仁古墳群	67
第19節 鍋山城跡	75
第20節 大柄所在遺跡	77

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	調査遺跡位置図	2
第2図	大井所在遺跡 調査トレンチ位置図	3
第3図	大井所在遺跡 第1トレンチ実測図	4
第4図	山手所在遺跡 調査トレンチ位置図	4
第5図	山手所在遺跡 第1トレンチ実測図	5
第6図	山手所在遺跡 第1トレンチ出土遺物実測図	6
第7図	東町所在遺跡 調査トレンチ位置図	7
第8図	東町所在遺跡 第1トレンチ実測図	8
第9図	東町所在遺跡 第1トレンチ出土遺物実測図	8
第10図	天神山遺跡 調査トレンチ位置図	9
第11図	天神山遺跡 第1・第2・第3・第4トレンチ実測図	11
第12図	天神山遺跡 第1・第2・第3・第4トレンチ出土遺物実測図	12
第13図	天神山遺跡 第6トレンチ出土遺物実測図	13
第14図	天神山遺跡 第5・第6・第7・第8・第9トレンチ実測図	14
第15図	桂見所在遺跡 調査トレンチ位置図	15
第16図	桂見所在遺跡 第1・第2・第3トレンチ実測図	16
第17図	桂見所在遺跡 第4・第5トレンチ実測図	17
第18図	桂見所在遺跡 第1・第2・第3・第4・第5トレンチ出土遺物実測図	18
第19図	岩吉遺跡 調査トレンチ位置図	19
第20図	岩吉遺跡 第1トレンチ実測図	20
第21図	岩吉遺跡 第2・第3トレンチ実測図	21
第22図	岩吉遺跡 第1トレンチ出土遺物実測図	22
第23図	岩吉遺跡 第2トレンチ出土遺物実測図	22
第24図	岩吉遺跡 第4トレンチ出土遺物実測図	23
第25図	岩吉遺跡 第4・第5トレンチ実測図	24
第26図	岩吉遺跡 第6・第7トレンチ実測図	25
第27図	内海中所在遺跡 調査トレンチ位置図	27
第28図	内海中所在遺跡 第1・第2トレンチ実測図	28
第29図	下坂本清合遺跡 調査トレンチ位置図	29
第30図	下坂本清合遺跡 第11・第12トレンチ実測図	30
第31図	下坂本清合遺跡 第13トレンチ実測図	31
第32図	下坂本清合遺跡 第12トレンチ出土遺物実測図	32
第33図	下坂本清合遺跡 第13トレンチ出土遺物実測図	32
第34図	会下・郡家遺跡 調査トレンチ位置図	33
第35図	会下・郡家遺跡 第1トレンチ実測図	34
第36図	乙亥正所在遺跡 調査トレンチ位置図	35
第37図	乙亥正所在遺跡 第1・第2トレンチ実測図	36
第38図	乙亥正所在遺跡 第3・第4トレンチ実測図	37
第39図	乙亥正人角遺跡 調査トレンチ位置図	38

第40図	乙亥正大角遺跡 第1トレンチ実測図	39
第41図	乙亥正大角遺跡 第2トレンチ実測図	39
第42図	乙亥正大角遺跡 第1・第4トレンチ実測図	40
第43図	乙亥正大角遺跡 第3・第4トレンチ出土遺物実測図	41
第44図	山手古墳群 調査トレンチ位置図	42
第45図	山手古墳群 第1・第2トレンチ実測図	43
第46図	山手古墳群 第3トレンチ実測図	45
第47図	山手古墳群 第4トレンチ実測図	45
第48図	山手古墳群 第5トレンチ実測図	45
第49図	福井所在遺跡 調査トレンチ位置図	46
第50図	福井所在遺跡 第1トレンチ実測図	49
第51図	福井所在遺跡 第2トレンチ実測図	49
第52図	福井所在遺跡 第3トレンチ実測図	51
第53図	福井所在遺跡 第4トレンチ実測図	51
第54図	福井所在遺跡 第5トレンチ実測図	52
第55図	福井所在遺跡 第6トレンチ実測図	52
第56図	福井所在遺跡 出土遺物実測図	53
第57図	東桂見遺跡 調査トレンチ位置図	55
第58図	東桂見遺跡 第1トレンチ実測図	55
第59図	橋本古墳 調査トレンチ位置図	56
第60図	橋本古墳 第1トレンチ実測図	57
第61図	曳田所在遺跡 調査トレンチ位置図	58
第62図	曳田所在遺跡 第1トレンチ実測図	58
第63図	青谷横木遺跡 調査トレンチ位置図	59
第64図	青谷横木遺跡 第1トレンチ実測図	60
第65図	青谷横木遺跡 第2トレンチ実測図	61
第66図	青谷横木遺跡 第3トレンチ実測図	63
第67図	青谷横木遺跡 出土遺物（柱根）実測図	64
第68図	青谷横木遺跡 第4トレンチ実測図	65
第69図	青谷横木遺跡 出土遺物実測図	66
第70図	里仁古墳群 調査トレンチ位置図	67
第71図	里仁古墳群 第1トレンチ実測図	70
第72図	里仁古墳群 第2トレンチ実測図	70
第73図	里仁古墳群 第3トレンチ実測図	70
第74図	里仁古墳群 第4トレンチ実測図	71
第75図	里仁古墳群 第5トレンチ実測図	71
第76図	里仁古墳群 第6トレンチ実測図	71
第77図	里仁古墳群 出土遺物実測図	72
第78図	里仁古墳群 第7トレンチ実測図	74
第79図	里仁古墳群 第8トレンチ実測図	74
第80図	鍋山城跡 調査トレンチ位置図	75
第81図	鍋山城跡 出土遺物実測図	76

第82図 鍋山城跡 第1トレンチ実測図	77
第83図 鍋山城跡 第2トレンチ実測図	77
第84図 大枡所在遺跡 調査トレンチ位置図	78
第85図 大枡所在遺跡 第1トレンチ実測図	78

図版目次

図版1

- 大井所在遺跡 調査地遠景(北東から)
大井所在遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況(南から)
大井所在遺跡 第1トレンチ南壁断面(北から)
山手所在遺跡 調査地遠景(北から)
山手所在遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況(南東から)
山手所在遺跡 第1トレンチ旧地表下掘り下げ状況(北東から)
山手所在遺跡 第1トレンチ北西壁断面(南東から)
東町所在遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況(南から)

図版2

- 東町所在遺跡 第1トレンチSK-01検出状況(南西から)
天神山遺跡 第1トレンチ溝状遺構検出状況(北西から)
天神山遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況(北東から)
天神山遺跡 第2トレンチ掘り下げ状況(北西から)
天神山遺跡 第3トレンチ掘り下げ状況(南東から)
天神山遺跡 第4トレンチ掘り下げ状況(北西から)
天神山遺跡 第5トレンチ掘り下げ状況(南東から)
天神山遺跡 第6トレンチ掘り下げ状況(東から)

図版3

- 天神山遺跡 第7トレンチ掘り下げ状況(北から)
天神山遺跡 第8トレンチ掘り下げ状況(東から)
天神山遺跡 第9トレンチ掘り下げ状況(北から)
桂見所在遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況(南西から)
桂見所在遺跡 第2トレンチ掘り下げ状況(北西から)
桂見所在遺跡 第3トレンチ掘り下げ状況(北西から)
桂見所在遺跡 第3トレンチ集石検出状況(北西から)
桂見所在遺跡 第4トレンチ掘り下げ状況(北西から)

図版4

- 桂見所在遺跡 第5トレンチ掘り下げ状況(北西から)

- 岩吉遺跡 第1トレンチ調査地近景(北東から)
岩吉遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況(北から)
岩吉遺跡 第1トレンチ遺物出土状況(北から)
岩吉遺跡 第1トレンチ南壁断面(北から)
岩吉遺跡 第2トレンチ遺構検出状況(東から)
岩吉遺跡 第2トレンチSD-01検出状況(南西から)
岩吉遺跡 第2トレンチSD-02遺物出土状況(南から)

図版5

- 岩吉遺跡 第2トレンチSD-02検出状況(南西から)
岩吉遺跡 第2トレンチSK-01検出状況(東から)
岩吉遺跡 第2トレンチ掘り下げ状況(東から)
岩吉遺跡 第3トレンチ掘り下げ状況(西から)
岩吉遺跡 第4トレンチ木器溜り検出状況(北から)
岩吉遺跡 第4トレンチ木製品出土状況(北から)
岩吉遺跡 第4トレンチ木器溜り北壁断面(南から)
岩吉遺跡 第4トレンチ掘り下げ状況(西から)

図版6

- 岩吉遺跡 第5トレンチ掘り下げ状況(東から)
岩吉遺跡 第6トレンチ掘り下げ状況(西から)
岩吉遺跡 第7トレンチ掘り下げ状況(西から)
内海中所在遺跡 調査地遠景(西から)
内海中所在遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況(北西から)
内海中所在遺跡 第1トレンチ北東壁断面(西から)
内海中所在遺跡 第2トレンチ掘り下げ状況(北東から)
内海中所在遺跡 第2トレンチ南東壁断面(北から)

図版7

- 下坂本清合遺跡 調査地遠景(北東から)
下坂本清合遺跡 第11トレンチ掘り下げ状況(東から)
下坂本清合遺跡 第11トレンチ畔状遺構検出状況(南から)
下坂本清合遺跡 第11トレンチ西壁断面(東から)
下坂本清合遺跡 第12トレンチ掘り下げ状況(東から)
下坂本清合遺跡 第12トレンチ北壁断面(南東から)
下坂本清合遺跡 第13トレンチ掘り下げ状況(北西から)

から)

下坂本清合遺跡 第13トレンチ南西壁断面(東から)

図版8

下坂本清合遺跡 第13トレンチ土器出土状況(北から)

会下・郡家跡 調査地遠景(北東から)

会下・郡家跡 第1トレンチ掘り下げ状況(東から)

会下・郡家跡 第1トレンチ南壁断面(北から)

乙亥正所在遺跡 調査地遠景(北東から)

乙亥正所在遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況(東から)

乙亥正所在遺跡 第1トレンチ西壁断面(東から)

乙亥正所在遺跡 第2トレンチ掘り下げ状況(東から)

図版9

乙亥正所在遺跡 第2トレンチ西壁断面(東から)

乙亥正所在遺跡 第2トレンチ北壁断面(南西から)

乙亥正所在遺跡 第3トレンチ掘り下げ状況(東から)

乙亥正所在遺跡 第3トレンチ西壁断面(東から)

乙亥正所在遺跡 第3トレンチ北壁断面(南西から)

乙亥正所在遺跡 第4トレンチ掘り下げ状況(西から)

乙亥正所在遺跡 第4トレンチ南壁断面(北から)

乙亥正大角遺跡 調査地遠景(西から)

図版10

乙亥正大角遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況(東から)

乙亥正大角遺跡 第1トレンチ西壁断面(東から)

乙亥正大角遺跡 第1トレンチ北壁断面(南から)

乙亥正大角遺跡 第2トレンチ掘り下げ状況(東から)

乙亥正大角遺跡 第2トレンチ西壁断面(東から)

乙亥正大角遺跡 第2トレンチ北壁断面(南から)

乙亥正大角遺跡 第3トレンチ掘り下げ状況(南から)

乙亥正大角遺跡 第3トレンチ集石検出状況(西から)

図版11

乙亥正大角遺跡 第4トレンチ掘り下げ状況(東から)

ら)

乙亥正大角遺跡 第4トレンチピット検出状況(南から)

山手古墳群 調査地遠景(西から)

山手古墳群 第1トレンチ掘り下げ状況(北から)

山手古墳群 第1トレンチ西壁断面(北東から)

山手古墳群 第2トレンチ掘り下げ状況(北から)

山手古墳群 第2トレンチ西壁断面(北東から)

山手古墳群 第3トレンチ掘り下げ状況(南西から)

図版12

山手古墳群 第3トレンチ北壁断面(南から)

山手古墳群 第3トレンチ遺構検出状況(南から)

山手古墳群 第3トレンチ墓葬検出状況(南から)

山手古墳群 第4トレンチ掘り下げ状況(南西から)

山手古墳群 第4トレンチ南東壁断面(北西から)

山手古墳群 第4トレンチ土坑(SK01)検出状況(南東から)

山手古墳群 第5トレンチ掘り下げ状況(南から)

山手古墳群 第5トレンチ東壁断面(西から)

図版13

山手古墳群 第5トレンチ周溝検出状況(西から)

福井所在遺跡 調査地遠景(南東から)

福井所在遺跡 調査地遠景(北西から)

福井所在遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況(北西から)

福井所在遺跡 第1トレンチ北東壁断面(南西から)

福井所在遺跡 第2トレンチ掘り下げ状況(北西から)

福井所在遺跡 第2トレンチ北東壁断面(南西から)

福井所在遺跡 第2トレンチ遺物出土状況(南東から)

図版14

福井所在遺跡 第2トレンチ遺物出土状況(南西から)

福井所在遺跡 第3トレンチ掘り下げ状況(北から)

福井所在遺跡 第3トレンチ西壁断面(東から)

福井所在遺跡 第4トレンチ掘り下げ状況(北西から)

福井所在遺跡 第4トレンチ南西壁断面(北東から)

福井所在遺跡 第5トレンチ掘り下げ状況(北西から)

福井所在遺跡 第5トレンチ北東壁断面(南北から)
福井所在遺跡 第6トレンチ掘り下げ状況(北西から)

図版15

福井所在遺跡 第6トレンチ南西壁断面(北東から)
東桂見遺跡 調査地遠景(北東から)
東桂見遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況(南北から)
東桂見遺跡 第1トレンチ南東壁断面(北西から)
橋本古墳 調査地遠景(北から)
橋本古墳 第1トレンチ掘り下げ状況(東から)
橋本古墳 第1トレンチ南壁断面(北東から)
曳田所在遺跡 調査地遠景(南東から)

図版16

曳田所在遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況(北から)
曳田所在遺跡 第1トレンチ北壁断面(南から)
青谷横木遺跡 調査地遠景(東から)
青谷横木遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況(南東から)
青谷横木遺跡 第1トレンチ北東壁断面(南北から)
青谷横木遺跡 第2トレンチ掘り下げ状況(北から)
青谷横木遺跡 第2トレンチ北壁断面(南から)
青谷横木遺跡 第2トレンチ西壁断面(東から)
青谷横木遺跡 第2トレンチ深掘り状況(北から)

図版17

青谷横木遺跡 第3トレンチ掘り下げ状況(西から)
青谷横木遺跡 第3トレンチ北壁断面(南から)
青谷横木遺跡 第3トレンチ乱石積基壇断面(南から)
青谷横木遺跡 第3トレンチ乱石積基壇断面(北から)
青谷横木遺跡 第3トレンチ乱石積基壇断面と掘立柱(南西から)
青谷横木遺跡 第3トレンチ乱石積基壇断面と掘立柱(北東から)
青谷横木遺跡 第3トレンチ掘立柱検出状況(南から)
青谷横木遺跡 第3トレンチ掘立柱No.1検出状況(南から)

図版18

青谷横木遺跡 第3トレンチ掘立柱No.2検出状況(南西から)

青谷横木遺跡 第3トレンチ掘立柱No.3検出状況(北から)

青谷横木遺跡 第3トレンチ検出状況(南から)

青谷横木遺跡 第3トレンチシェロの縦検出状況(南から)

青谷横木遺跡 第4トレンチ掘り下げ状況(北西から)

青谷横木遺跡 第4トレンチ深掘り状況(南北から)
青谷横木遺跡 第4トレンチ北東壁断面(南北から)

図版19

里仁古墳群 調査地遠景(南東から)
里仁古墳群 第1トレンチ掘り下げ状況(南北から)
里仁古墳群 第1トレンチ北壁断面(南東から)
里仁古墳群 第1トレンチ周溝断面(南東から)
里仁古墳群 第2トレンチ掘り下げ状況(西から)
里仁古墳群 第2トレンチ北壁断面(南から)
里仁古墳群 第3トレンチ掘り下げ状況(西から)
里仁古墳群 第3トレンチ北壁断面(南から)

図版20

里仁古墳群 第3トレンチ出土遺物検出状況(北から)
里仁古墳群 第3トレンチ出土遺物検出状況(北から)
里仁古墳群 第4トレンチ掘り下げ状況(南から)
里仁古墳群 第4トレンチ東壁断面(西から)
里仁古墳群 第5トレンチ掘り下げ状況(西から)
里仁古墳群 第5トレンチ北壁断面(南から)
里仁古墳群 第5トレンチ東壁断面と主体部(西から)
里仁古墳群 第5トレンチ周溝検出状況(南から)

図版21

里仁古墳群 第5トレンチ主体部検出状況(西から)
里仁古墳群 第5トレンチ葺石検出状況(東から)
里仁古墳群 第5トレンチ出土遺物検出状況(西から)
里仁古墳群 第6トレンチ掘り下げ状況(北東から)
里仁古墳群 第6トレンチ南東壁断面(北西から)
里仁古墳群 第6トレンチ南西壁断面と主体部(北東から)
里仁古墳群 第7トレンチ掘り下げ状況(北東から)
里仁古墳群 第7トレンチ南東壁断面(北西から)

図版22

- 里仁古墳群 第8トレンチ掘り下げ状況(南西から)
里仁古墳群 第8トレンチ南東壁断面(北西から)
鍋山城跡 調査地遠景(南東から)
鍋山城跡 第1トレンチ掘り下げ状況(南東から)
鍋山城跡 第1トレンチ北東壁断面(南西から)
鍋山城跡 第1トレンチ掘り検出状況(南東から)
鍋山城跡 第2トレンチ掘り下げ状況(南東から)
鍋山城跡 第2トレンチ北東壁断面(南西から)

図版23

- 鍋山城跡 第3トレンチ掘り下げ状況(西から)
鍋山城跡 第3トレンチ北壁断面(南西から)
大柄所在遺跡 調査地遠景(南東から)
大柄所在遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況(北西から)
大柄所在遺跡 第1トレンチ北東壁断面(南西から)

図版24

- 山手所在遺跡 出土遺物
東町所在遺跡 出土遺物
天神山遺跡 出土遺物(1)

図版25

- 天神山遺跡 出土遺物(2)

図版26

- 桂見所在遺跡 出土遺物

図版27

- 岩吉遺跡 出土遺物(1)

図版28

- 岩吉遺跡 出土遺物(2)
下坂本清合遺跡 出土遺物(1)

図版29

- 下坂本清合遺跡 出土遺物(2)

図版30

- 乙亥正大角遺跡 出土遺物
福井所在遺跡 第1トレンチ出土遺物
福井所在遺跡 第2トレンチ出土遺物(1)
福井所在遺跡 第2トレンチ出土遺物(2)

図版31

- 福井所在遺跡 第2トレンチ出土遺物(3)

図版32

- 福井所在遺跡 第2トレンチ出土遺物(4)
福井所在遺跡 第3トレンチ出土遺物
福井所在遺跡 第6トレンチ出土遺物
青谷横木遺跡 第2トレンチ出土遺物
青谷横木遺跡 第3トレンチ出土遺物

図版33

- 青谷横木遺跡 第4トレンチ出土遺物
青谷横木遺跡 第3トレンチ柱根(No.3)
里仁古墳群 第3トレンチ出土遺物(1)
里仁古墳群 第3トレンチ出土遺物(2)
里仁古墳群 第5トレンチ出土遺物
里仁古墳群 第7トレンチ出土遺物

図版34

- 鍋山城跡 第3トレンチ出土遺物

第1章 発掘調査の経緯と経過

鳥取市は鳥取県東部に位置し、面積765.66km²、人口19万3千人余りを擁する県庁所在地である。平成16年11月に周辺8町村との大合併が成立し、面積、人口ともに大幅な増加となった。その結果、鳥取市域の遺跡数についても倍増の4,800ヶ所以上となった。市の西城で現在進められている鳥取西道路整備事業は、遺跡密集地である湖山池南岸からさらに青谷町へと計画・建設されており、計画路線内における試掘調査によって新たな遺跡の発見が相次いでいる。

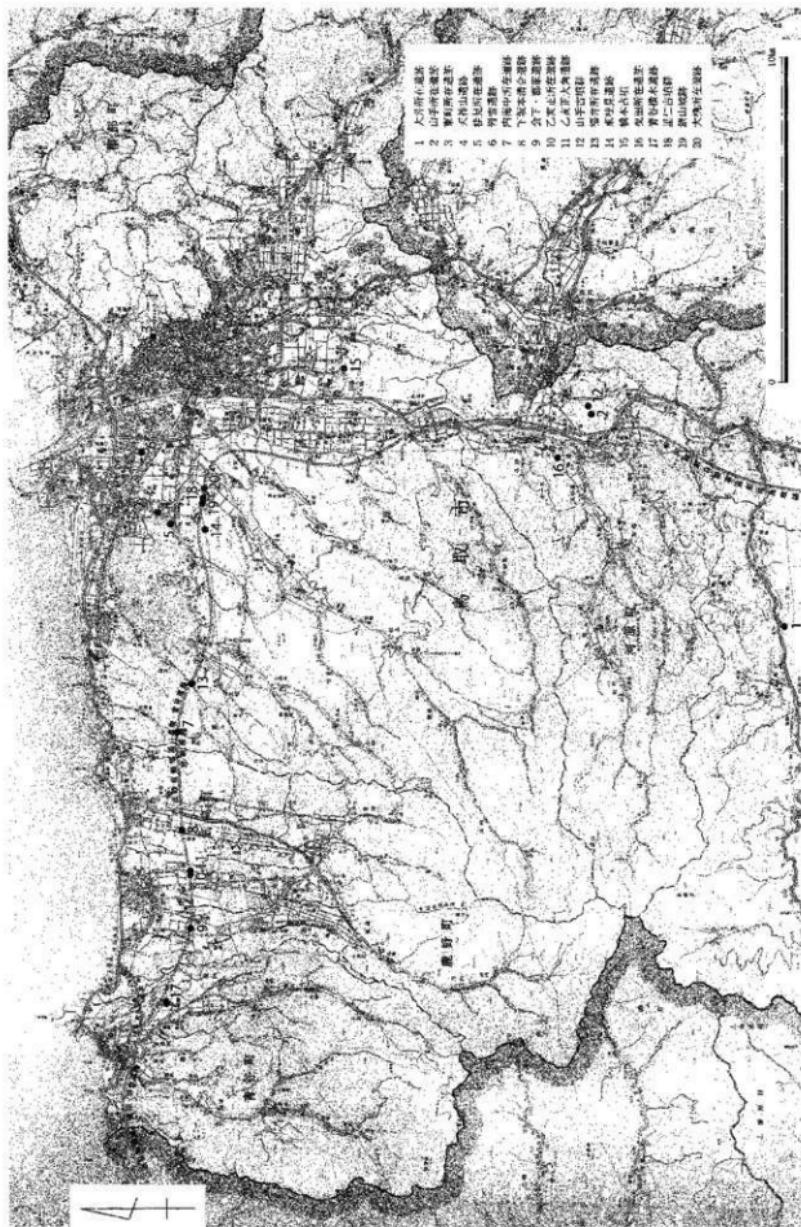
今回の調査遺跡は、鳥取西道路整備事業に伴って実施した内海中所在遺跡、下坂本清合遺跡、乙亥正所在遺跡、乙亥正大角遺跡、福井所在遺跡、青谷横木遺跡、里仁古墳群、鍋山城跡、大柄所在遺跡、建物建設事業に伴う岩吉遺跡、学校整備に伴う東町所在遺跡、可燃物処理施設計画に伴う山手所在遺跡、山手古墳群、下水道関連の天神山遺跡、桂見所在遺跡、水道関連事業に伴う会下・郡家遺跡、携帯電話基地局整備に伴う大井所在遺跡、東柱見遺跡、送電線鉄塔整備に伴う曳田所在遺跡、急傾斜整備に伴う橋本古墳である。

試掘調査はトレーナーによる造構・遺物の包含状況の確認に主眼をおいて実施した。調査に伴う掘削は、基本的に人力で行ったが、青谷横木遺跡、下坂本清合遺跡、乙亥正所在遺跡、福井所在遺跡、岩吉遺跡、東町所在遺跡、山手所在遺跡、天神山遺跡、桂見所在遺跡については電機を用いて表土を除去し、その後人力による振り下ろし作業を行った。

整理作業は主に各現場調査終了後に行い、本格的な報告書作成作業は平成25年12月に着手し、平成26年2月に終了した。本報告の調査面積は1,098.95m²である。各調査遺跡のトレーナー(Tr)数、調査面積、現地調査期間は次のとおりである。

遺跡名	Tr数	調査面積	現地調査期間		
1 大井所在遺跡	1	12.00	20131002		
2 山手所在遺跡	1	85.00	20130304～20130319		
3 東町所在遺跡	1	9.79	20130702～20130716		
4 天神山遺跡	9	16.89	20130311～20130319	20130404～20130508	
5 桂見所在遺跡	5	11.86	20121128～20121206		
6 岩吉遺跡	7	190.25	20121116～20121128	20130509～20130729	
7 内海中所在遺跡	2	19.60	20131029～20131108		
8 下坂本清合遺跡	3	71.20	20121003～20121016	20131017～20131022	
9 会下・郡家遺跡	1	12.00	20121018～20121024		
10 乙亥正所在遺跡	4	95.84	20120904～20121002		
11 乙亥正大角遺跡	4	66.20	20120921～20121002 20131001～20131002	20130812～20130906 20131007～20131015	
12 山手古墳群	5	44.32	20130304～20130319	20130508～20130520	
13 福井所在遺跡	6	127.50	20120822～20121113		
14 東柱見遺跡	1	12.00	20121127～20121130		
15 橋本古墳	1	22.00	20130422～20130502		
16 曳田所在遺跡	1	16.00	20130618～20130624		
17 青谷横木遺跡	4	204.50	20130701～20130812		
18 里仁古墳群	8	47.00	20130808～20131028		
19 鍋山城跡	3	23.00	20131021～20131121		
20 大柄所在遺跡	1	12.00	20131106～20131121		

第1圖 調查地點位置圖



第2章 調査の結果

第1節 大井所在遺跡

佐治町森坪集落から南東へ約600mに位置する。周辺には、古墳時代後期～奈良・平安時代の集落遺跡である大井型坂遺跡、中世集落遺跡の大井家ノ下モ遺跡、金銅原遺跡などが立地し、丘陵上には大井1～3号墳、葛谷1～4号墳などの古墳が築かれている。大井3号墳、葛谷4号墳は古墳時代後期の横穴式石室を内部主体とする円墳で、大井3号墳からは直刀、鉄鎌、刀子、耳環、菅玉、小玉、切子玉などの副葬品が出土している。また、佐治川中流域のこの一帯には、葛谷、古市上山根、貝尻などの遺跡が知られており、両岸の山麓を中心に多くの遺跡が分布する地域となっている。

今回の調査は通信施設整備に伴って実施したもので、事業が計画されている水田に1本のトレンチを設定し確認調査を行なった。

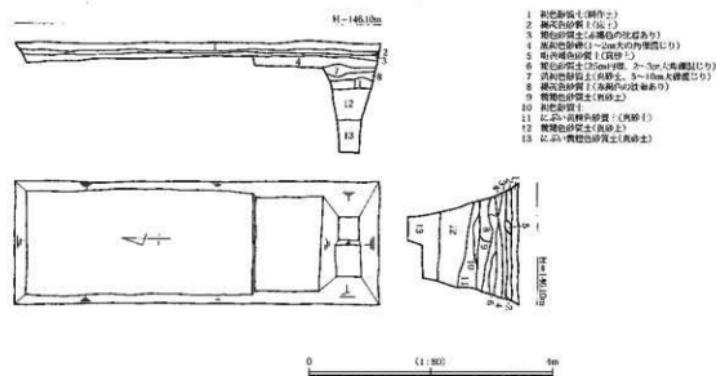


第2図 大井所在遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(Tr-1)【第2・3図 図版1】

事業計画地内の中央部に設定した2.0m×6.0mのトレンチである。床上(第2層)下層の第3層及び第8層には現代の陶器片が含まれており、第11層の上位層がは場整備に伴う土層とみられる。11層以下は、黄橙色や黄褐色の均一な真砂土が堆積し、ボーリング調査結果では地表下3.5m前後まで砂礫層の堆積が確認されている。

遺構は検出されなかった。遺物は第3および第8層から陶器片3点が出土した。



第3図 大井所在遺跡 第1トレンチ実測図

小結

周辺遺跡の立地状況や調査前の地形観察から遺跡の存在が予想されたものの遺構は認められず、遺物も現代の陶器片のみにとどまった。調査の結果、事業計画地内に遺跡は存在しないものと考えられるが、周辺山麓に多くの遺跡が立地している地域であることから、隣接地における遺跡の存在の可能性は高く、開発にあたっては注意を要する地域といえる。

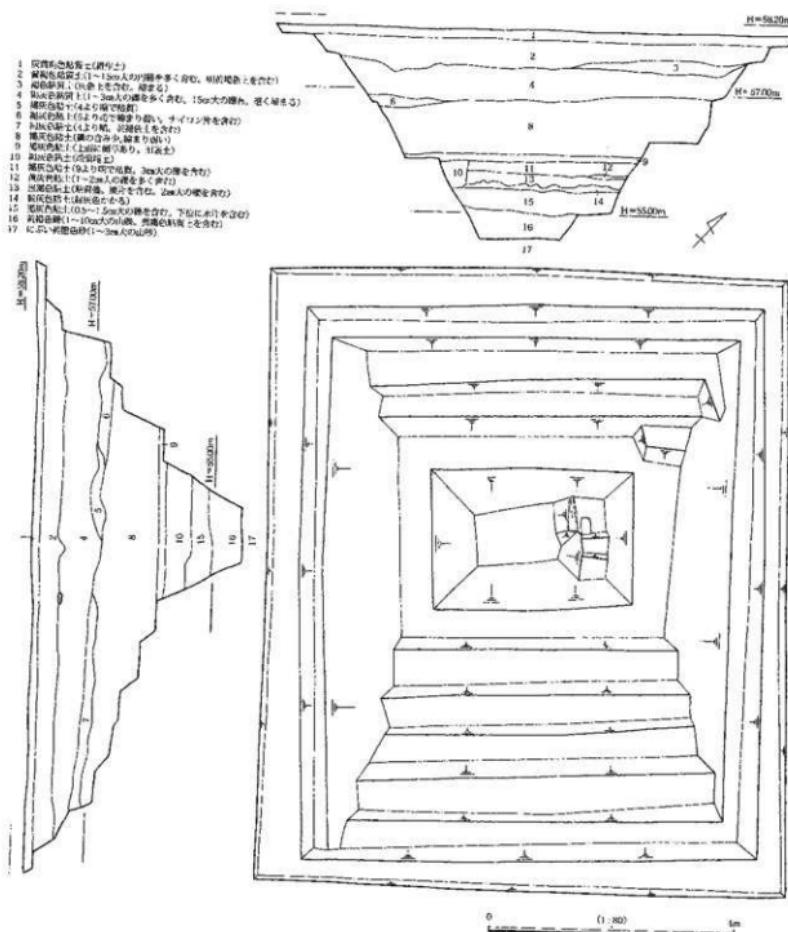


第4図 山手所在遺跡 調査トレンチ位置図

第2節 山手所在遺跡

山手所在遺跡は鳥取市河原町山手に所在する。千代川中流域の右岸丘陵のうち、山手集落から南西へ細長く入り組む狭小な谷の中で最も西側の谷筋に展開する。谷奥には溜池が営まれその下方には隣場整備された段状の水田が連続する。水田北側丘陵裾では平成14年度試掘により須恵器片数点が出土している。また、溜池の南東丘陵上には山手古墳群南支群として円墳6基が確認されており須恵器の出土が知られている。

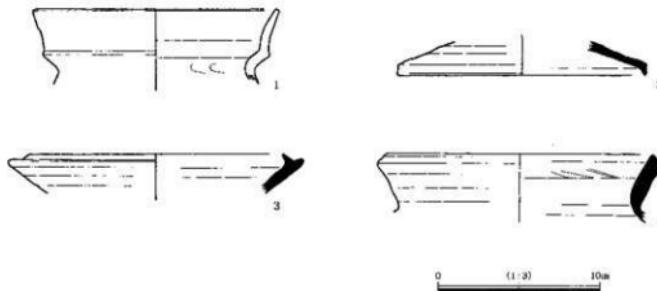
今回の調査は可燃物処理施設整備事業に伴い実施したもので、谷奥の溜池から100m離れた標高58mの水田にT1を設定した。



第5図 山手所在遺跡 第1トレンチ実測図

第1トレンチ(1-1) [第4・5・6図 図版1]

溜池から100m離れた水田に位置し、地形的には谷筋中央部にあたる箇所に谷の横断方向に長軸をとる10×8.5m規模のトレンチである。当初は8×3mの規模で設定し掘り下げを行ったが、更なる掘り下げの必要が生じ拡張を行った。耕作土下15cm弱で礫が多く含む厚さ50cmの第2層黄褐色粘質土が広がり、以下、標高55.95mの第9層上面の旧地表面まで厚さ1.9mの客土である。客土中には若干の遺物を含み、弥生時代終末～古墳時代前期の壺複合口縁部片(第6図1)を含め須恵器高台部片、かえりの消失した杯蓋片(第6図2)、須恵器壺口縁部(第6図4)などコンテナ約1/4程度の容量である。標高56mの第9層上面、は場整備前の旧地表面には倒草が一面に検出された。旧表土下は、第10層褐色灰色粘土(暗渠堆土)、第11層褐色灰色粘土、第12層褐色灰色粘土を挿んで、第13層黒褐色粘土である。第13層上面で精査を行ったが遺構は検出されなかった。その下位は薄くシミ状に広がる緑灰色かかった第14層黄褐色粘土である。第15層褐色灰色粘土と第16層の境界には木片や板を挿む。第11～15層中には僅かながら土師器細片、須恵器細片を含み、瓦質鍋片が1点出土している。第16層黒褐色礫は山石を多く含む多礫層で、第17層にぶい黄橙色砂は湧水が多量にあり砂状であるが所謂山上とみられる。第16、17層ともに遺物は見られなかった。耕作土より7世紀初めの須恵器杯身片(第6図3)が出土している。



第6図 山手所在遺跡 第1トレンチ出土遺物実測図

小結

山手所在遺跡は、今回の調査で遺構の検出は見られなかったが、谷の埋め立て土中に弥生時代終末～古墳時代前期、奈良・平安時代の遺物を含むほか、旧地表面以下に瓦質鍋片や磨滅した土師器・須恵器細片を含む。南東丘陵に分布する山手古墳群や丘陵裾など周辺は遺跡が内包されている可能性もあり、谷部についても今後十分に注意を払っていく必要がある。

第3節 東町所在遺跡

調査地は、鳥取市立北中学校校地内に位置している。鳥取平野の北東側、標高263mの久松山に築かれた鳥取城の西側にあたり、江戸期の絵図によれば永く武家屋敷であったことがわかる。近代には明治43年に鳥取県立商業学校が落成して以来、現在まで学校用地として変遷を重ねてきた。これまで発掘調査の対象となつたことはなかった。

今回の調査は鳥取市立北中学校改修工事に伴って行った試掘調査である。久松地区公民館側校門近くに建てられた同窓会館「北辰館」東側にトレンチを設定した。現在の標高は4mほどである。



第7図 東町所在遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(Tr-1)【第7・8・9図 図版1・2】

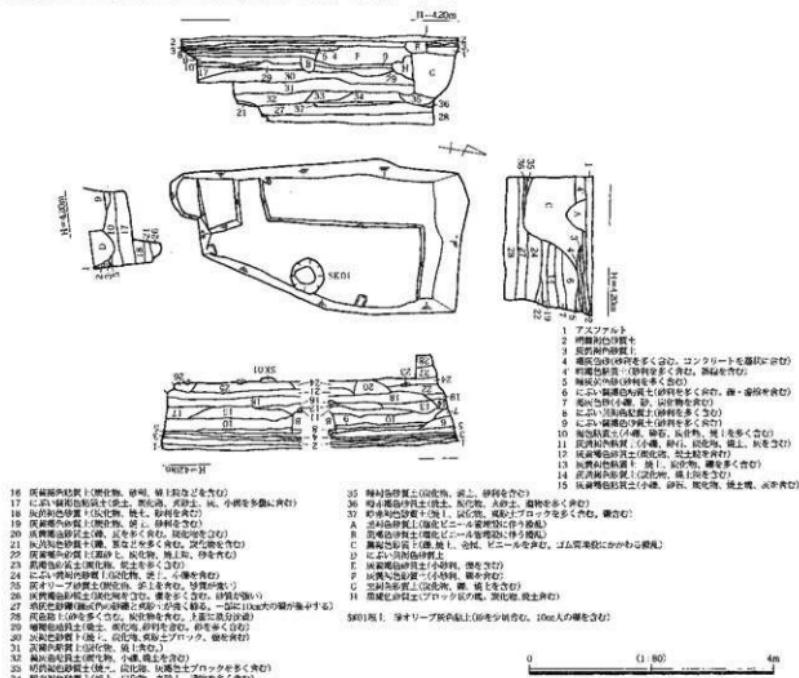
舗装部分を避けて未舗装部分にトレンチを設定した。そのため台形に近い五角形を呈するトレンチとなった。トレンチの規模は東辺4.2m・西辺1.4m・南辺4.4m・北辺2.3mである。

表土の除去を行ったところ、現地表下20cmおよび現地表下60cm付近で塩化ビニール管が埋設されていた。またトレンチ北側の北壁と西壁のコーナー付近は、現地表下1.1m付近にケーブル様のゴム管が埋設されているなど全体に擾乱を受けていた。

明治時代以降学校用地として使用していたためか、地表から約30cmの深さまでは明黄褐色砂質土や灰黃褐色砂質土、褐灰色砂、暗灰黄色砂が薄く堆積しているきわめて現在に近い時期の整地層と考えられる。下部では玉砂利が多く含む。6層・7層・A～H層は近現代の擾乱である。8層・9層は砂利を含む整地層である。さらに下層では焼上や炭化物を大量に包含する層が検出されているが、ブロック状に堆積し、焼土層または焼土面としては検出されなかった。10層は小砾、碎石、炭化物、焼土を多く含む層ではほぼトレンチ全体で検出された。しまりも強い整地層である。29層も同時期の整地層と考えられる。11層～17・30層は灰黃褐色土であるが砂質の強弱や色調、焼土・炭化物などの量の多寡などによって分層できたが、同時期の整地層と考えられる。18・19層は灰黃褐色の砂質層でトレンチ東側に見られる。31層は灰褐色粘土質であるが砂質が強い。トレンチ西側に見られる。18・19層と比較すると31層は遺物や炭化物などが少ない。両者は上面のレベルがほぼ同じであり、同時期の整地層と考えられる。20～26・32～35層はさまざまな特徴を持つ上層の集合で、焼上・炭化物・真砂土などが多量に含まれる層が見られる。また、こぶし大から20cm大の砾や瓦片などが多く含まれている。瓦片には赤瓦もみられる。陶磁器類の出土も他の層に比較して多い。これらの層は火事後の整理であるかのような様相を示している。27層は真砂土や緑色凝灰岩の鉆石のようなものを敷き詰めて硬く整地された層である。大勢としては真砂土・砂砾・真砂土と層状に堆積するが、一部混在や上下の逆転がみられる。遺物はほとんど含まれない。28層は粘土層で、砂を多く含む。上面は鉄分の沈殿が見られる。

遺構は、27層上面で土坑が検出された。トレント東壁に接して、中央よりやや南側に位置している。平面形は南北55cm×東西55cm強のほぼ円形、断面形は最深部で確認面から17cmを測る浅い碗形を呈している。埋土は1層で、第28層に似た暗オリーブ灰色粘土であった。

遺物は、瓦が多く、ほかに土器・陶磁器類やキセルなどの金属器、ガラスなどが各層から出土している。1は、第25層から出土した完形に近い陶器上瓶蓋である。ツマミが亀形で尾部を欠損する。鳥取城城跡SD22から出土した19世紀中葉の資料と同型である。



第4節 天神山遺跡

天神山遺跡は、鳥取平野西端に位置する「湖山池」東側の標高25mを測る独立丘陵「天神山」に主郭を置く天神山城とその周辺一帯に当たる。天神山城は、15世紀後半から16世紀前半に因幡守護山名氏が因幡守護所としたもので、天神山の周囲にも関連する遺構が存在することが知られている。湖山池周辺には多くの遺跡が存在することが知られ、縄文時代から中世の遺跡が多数調査されている。

今回の調査は、公共下水道整備事業に伴い実施したもので、湖山南町3丁目地内に位置する。平成24年度の調査地は国史跡布勢古墳が位置する「卯山」丘陵の北側裾部に第1～5トレンチの5箇所、平成25年度の調査地は県立鳥取県風高校授校地に沿って設けられた新川鳥農通り内に第6～9トレンチの4箇所を設定した。トレンチの平面形は、若干の差異はあるがいずれも1辺約1.5mのほぼ正方形である。



第10図 天神山遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(Tr-1)【第10・11・12図 図版2】

調査対象地のうち東に位置している。現在は、この付近から東及び北に向かって徐々に標高が下がっている。

道路舗装にかかるアスファルトおよび碎石を多量に含む客土を除去した後、客土と考えられる褐色粘質土を除去する過程で、トレンチ北側から上水道と思われる塩化ビニール管が検出された。客土層の下には黄褐色砂質土と灰褐色砂質土が互層をなし、標高2.2m付近(第10層)、1.9m付近(第13層)、第

14・15層)で遺構が検出された。土坑または溝状遺構と考えられる。遺構壇上中からは中世陶器などが出土した。さらに掘り下げたところ、第16層が中世の土師器片、陶磁器片、木製品などを含む遺物包含層であることが判明した。さらに標高1.7m付近および標高1.5m付近で溝状の遺構を検出したが、調査範囲が狭小なため詳細は不明であった。最下層は黒色粘土層で、木製品、流木などが出た。

遺物は、第16層から時期不明の土器小片、第20層から中世後期の土師器皿片、第21層から板状木製品、第23層から須恵器片が出土した。遺構壇土からは、中世後期の土師器皿片(第13層)、備前焼口縁部片(第14層・第15層)、板状木製品、箸状木製品(第17層)、土師器皿口縁部片と板状木製品、竹片(第18層)などが出土している。さらに第19層からは、連弁紋を持つ青磁碗高台部、土師器皿口縁部片・底部片、曲げ物片、板状木製品、凹凸を削りだした用途不明の板状木製品、形代、箸状木製品など、もっとも多量に遺物が出土した。このほか竹片、杭の可能性がある樹皮を残し一部炭化した広葉樹の枝や小枝も出土している。また上水道敷設時の埋土中などから、青磁短頸壺片、陶器片、土師器皿口縁部片が出土した。第12図1は、第13層から出土した土師器皿である。

第2トレンチ(Tr-2) [第10・11・12図 図版2]

第1トレンチから西へ直線距離で約75m離れた地点に位置している。第1トレンチより若干標高が高い。

道路舗装にかかわるアスファルトおよび碎石を多量に含む客土を除去し、旧表土と思われる灰褐色粘質土(第3層)を検出した。さらにその下から第8層までは客土である。標高3m付近から土器小片を少量含む黄橙色・褐灰色の砂質土もしくは砂が約60cmの厚さで互層をなしている(第9層～第15層)。標高2.3m付近から遺物包含層である黒褐色粘質土層(第16層)が検出され、土師器皿や青磁が出土した。さらに遺物を多く含む第17層に至ると湯水がみられ、第18層は自然貝層と考えられる。砂質土の第19層、粘質土の第20層からは再び中世の土器類が検出された。

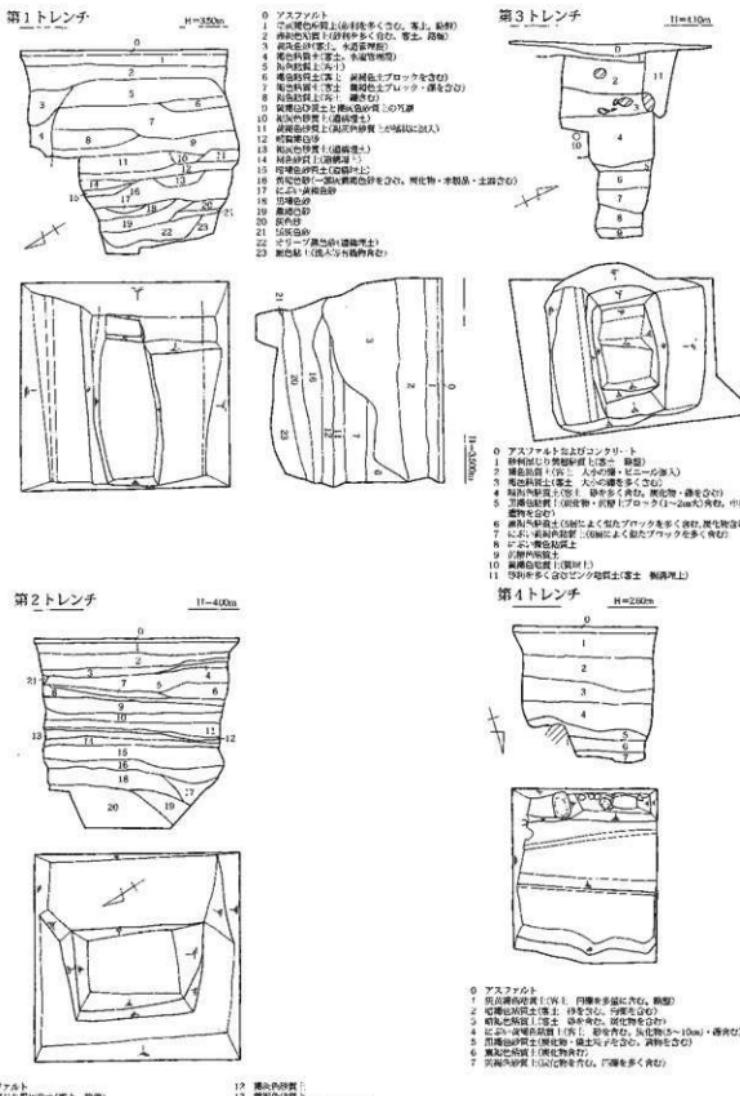
遺構は検出されなかった。遺物は、第15層から青磁碗片、須恵器片、土師器小片、備前焼の底部、体部、耳部各1点を含む陶器片と炭化物片が出土した。第16層からは土師器皿片、須恵器片、青磁碗片、白磁高台部片、備前焼を含む陶器片が出土した。貝層を挟んだ第19～20層から土師器片、須恵器片、須恵質の陶器片、弥生土器の可能性がある土器片が出土したが、いずれも小片である。ほかに管状土錐が1点出土した。第12図2は、第15層出土の青磁碗口縁部である。3は、第16層出土の白磁底部である。底部は高台を含め無釉である。4は、第16層出土のすり鉢で、須恵質である。5は第20層から出土した管状土錐である。重さ4.2g。

第3トレンチ(Tr-3) [第10・11・12図 図版2]

第2トレンチから西へ直線距離で約100m離れた十字路西側に位置している。南側斜面の道路を登ると国史跡布勢古墳に至る。

道路舗装にかかわるアスファルトおよび碎石を多量に含む客土を除去した後、客土と考えられる褐色粘質土を除去する過程で、トレンチ南側から塩化ビニール製の管が検出された。確認のため一時作業を中断したが、性格不明のため除去できず、北側のみを掘り下げることとした。しかし、トレンチの北側に位置する側溝の裏込めの崩落も懸念されたため、トレンチ中央部のみを掘り下げた。標高2.7m付近で土師器皿片や須恵器片などを包含する黒褐色粘質土(第5層)を検出した。碧玉製と考えられる剥片も出土している。第6層には少量遺物を包含するが、第7層以下は無遺物層であった。検出できた最下層は黄橙色粘質土である。

遺構は検出されなかった。遺物は、第5層から年代不詳の土器小片、須恵器片、土師器皿片、土鍋口縁部片、石片3点が出土した。うち1点は碧玉製の剥片である。第12図6は第5層出土の土師器皿である。口縁部の内外に数箇所にススが付着する。7は第5層出土の土鍋である。



- 0 アズミカルト
1 ソスフリクト
2 前成土(草木)、水溶性粘土質土
3 前成土(草木)、水溶性粘土質土
4 前成土(草木)、水溶性粘土質土
5 前成土(草木)、水溶性粘土質土
6 前成土(草木)、水溶性粘土質土
7 前成土(草木)、水溶性粘土質土
8 前成土(草木)、水溶性粘土質土
9 前成土(草木)、水溶性粘土質土
10 前成土(草木)、水溶性粘土質土
11 前成土(草木)、水溶性粘土質土
12 前成土(草木)、水溶性粘土質土
13 前成土(草木)、水溶性粘土質土
14 前成土(草木)、水溶性粘土質土
15 前成土(草木)、水溶性粘土質土
16 前成土(草木)、水溶性粘土質土
17 前成土(草木)、水溶性粘土質土
18 前成土(草木)、水溶性粘土質土
19 前成土(草木)、水溶性粘土質土
20 前成土(草木)、水溶性粘土質土
21 前成土(草木)、水溶性粘土質土
22 前成土(草木)、水溶性粘土質土
23 前成土(草木)、水溶性粘土質土

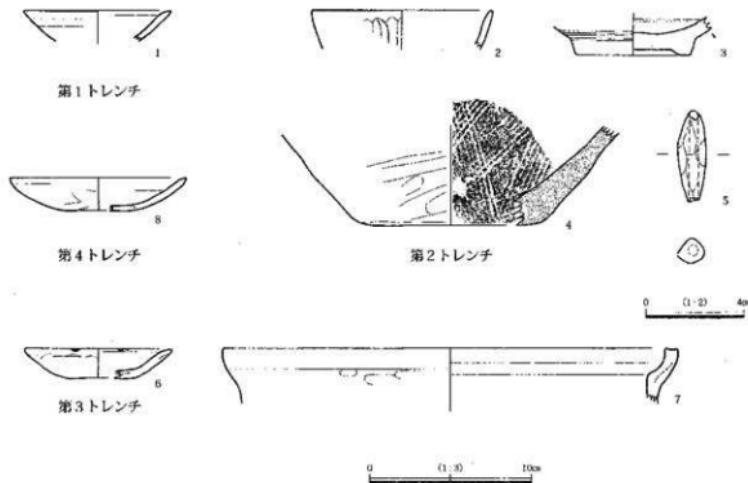
第11図 天神山遺跡 第1・第2・第3・第4トレーニング実測図

第4トレンチ(Tr-4) [第10・11・12図 図版2]

第3トレンチから西へ直線距離で約80mはなれた三叉路交差点に位置する。第3トレンチよりかなり標高を減じている。さらに西へ35m向かうと県道鳥取空港・布勢線に至る。

道路舗装にかかるアスファルトおよび碎石を多量に含む客土を除去した後、客土と考えられる褐色粘質土を除去する過程で、トレンチ北側現地表下45cm付近から第3トレンチより細い塩化ビニール製の管が検出された。性格不明のため除去できず、南側を掘り下げたところ、現地表下90cm付近から第3トレンチで検出した塩化ビニール製の管と同様の管が検出された。やむを得ずトレンチ南辺に沿って約50cmの幅で掘り下げたところ、標高1.3m付近で土器片を含む遺物包含層を検出した(第5層)。さらに炭化物を含む黒褐色粘質土、円碟を多量に含み湧水がみられる黄褐色砂質土を検出したが、遺物の出土はなかった。

遺物は第5層から赤彩された土器器坏片、土器器皿片が出土した。第12図8は第5層出土の土器器皿である。口縁端部はススにより黒色を呈し、その下部に内外面ともタール状の炭化物が付着している。



第12図 天神山遺跡 第1・第2・第3・第4トレンチ出土遺物実測図

第5トレンチ(Tr-5) [第10・14図 図版2]

第1トレンチの南東側5mに位置している。

基本的な層序関係は第1トレンチと同じである。アスファルト及び碎石層を除去すると、トレンチ北東側と並行する水道管の堆土である4層が厚く堆積する。その下は地山由来とみられる、橙色系の砂層と、褐色系の土層とが10cmの厚さで互層状に堆積する。それぞれの層がある時期の生活面ともみられるが明確な遺構は確認できなかった。標高2.0m付近の第18層では土器器片や木片を確認した。明確な遺構が確認できたのは標高1.9m付近である。第21層を肩部とした北西方向への落ち込みは溝状遺構とみられ、調査区内を横断している。第19・20層はその埋土であり、後者には多量の炭や焼土塊が含まれていた。第21層以下は土質が粘質土へと変わった。

遺物は第19層に土器器皿片、第24層で塗りの椀片を2片確認したが、何れも小片であったため図化は出来なかった。

第6トレンチ(T-6) [第10・13・14図 国版2]

第6トレンチは昭和47年に県立鳥取農業高校(現県立鳥取緑風高校)建設に伴って行われた発掘調査地点の東南東約60mに位置する。

道路舗装にかかわるアスファルトおよび碎石を多量に含む客土と、同じく客土と考えられる黒褐色粘質土を除去し、自然堆積層と考えられる黒色粘土層(第5層)を検出した。さらに掘り下げたところ、標高-0.2m付近の黒褐色粘土層(第8層)から土師器皿が出土した。以下標高-1m付近まで少量ではあるが各層から土師器皿片や青磁碗片などの土器・陶磁器類、漆椀片や曲げ物底部などの木製品などが出土した。遺構は検出されなかった。第13図9は、土師器皿である。

第7トレンチ(T-7) [第10・14図 国版3]

第7トレンチは、第6トレンチから北に約60m、新川鳥農通りが東に折れるコーナー部分に位置する。

道路舗装にかかわるアスファルトおよび碎石層を除去し、さらにビニールやビンが含まれる黒褐色粘質土を除去して自然堆積層と考えられるオリーブ黒色粘土層(第4層)を検出した。円環や摩滅した土師器小片を少量包含していた。以下粘土層を標高-1.5m付近まで掘り下げたが、遺構は検出されなかった。遺物は第4層上部から摩滅した土師器小片が出土したほか、土鍋片や白磁碗片なども出土しているが、近世以降の磁器が併存している。

第8トレンチ(T-8) [第10・14図 国版3]

第8トレンチは、第7トレンチから約44m東に位置する。

道路舗装にかかわるアスファルトおよび碎石を多く含む黄褐色粘質土層を除去し、さらに黄褐色と灰色の2層の砂層、オリーブ黄色砂質土層を除去して灰色粘土層を検出した。さらに掘り進めたところ、その下から土管を使用した暗渠が検出された。以下粘土層を掘り下げたが、標高1.3m付近で自然堆積の砂層を検出した。遺構・遺物は検出されなかった。

第9トレンチ(T-9) [第10・14図 国版3]

第9トレンチは、第8トレンチから約28m東に位置する。

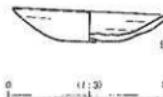
道路舗装にかかわるアスファルトおよび碎石を多く含む黄褐色粘質土層を除去し、さらに黄褐色と灰色の2層の砂層を除去したところ、碎石を主体とする暗灰色粘質土層を検出した。その下からは小礫が混じるよく固められた黄灰色砂質土層が検出され、その状況から近年の整地層と判断された。以下は粘土層が続き、標高-0.7m付近で砂層が検出された。層中に粘土が層状に見られたためさらに掘り進めたところ、黒味を帯びた砂層が検出された。遺構・遺物は検出されなかった。

小結

今回の調査は、公共下水道整備事業に伴い実施したもので、9ヶ所のトレンチを設定した。

調査の結果、卯山の北側裾部に位置する第1~5トレンチでは、主に中世後期の土器・陶磁器・木製品などが出土した。一部遺構も検出されている。このことから、この一帯にも大神山城が機能していた時代の人々の活動の痕跡が何らかの形で残されていると考えられる。今後も開発行為等に対する注意を十分に払わなければいけない地域である。

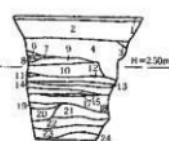
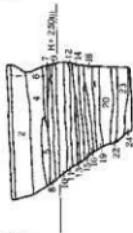
低地に位置する第6~9トレンチでは、第6トレンチから中世後期の遺物が若干出土した。遺構の存在は認められなかった。この第6トレンチは、いくつかの絵図に記された「するが原敷」の内堀と推定されている部分の東側境界付近に位置していると考えられ、関連を持つ可能性がある。また第7トレンチでは少量の遺物が出土したが、第8・第9トレンチでは遺構・遺物とともに確認されなかった。しかしいずれも大神山に近く、関連する遺構が周辺に埋もれている可能性は十分に推測できよう。



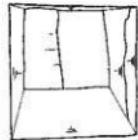
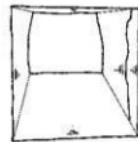
第13図 天神山遺跡
第6トレンチ出土遺物実測図

第5トレンチ

- 0 アスファルト
- 1 灰褐色砂土
- 2 黄褐色砂土
- 3 黄褐色砂質土
- 4 にじみ青色砂土(小量作成)
- 5 にじみ青色砂土
- 6 黄褐色砂土
- 7 黄褐色土(灰褐色土がノック板に残る)
- 8 にじみ青色砂質土
- 9 黄褐色土
- 10 灰褐色砂土
- 11 黄褐色土
- 12 黄褐色砂土
- 13 黄褐色砂質土
- 14 灰褐色土
- 15 黄褐色砂土(下部に若干の灰褐色土)
- 16 变色褐色砂土
- 17 灰褐色土
- 18 灰褐色土
- 19 灰褐色土(灰褐色)
- 20 灰褐色土(灰褐色土、灰土・灰土塊を多く含む)
- 21 灰褐色砂土
- 22 灰褐色砂土
- 23 灰褐色砂質土(小量品を含む)
- 24 灰褐色土

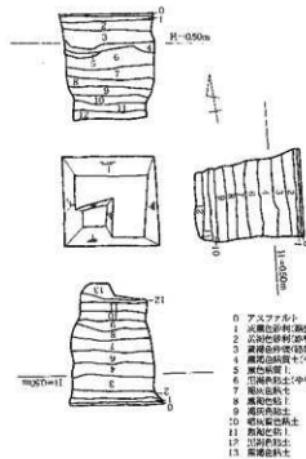


$H=2.50m$



$H=2.50m$

第6トレンチ



- 0 アスファルト
- 1 灰褐色砂土
- 2 灰褐色砂質土(小量作成)
- 3 黄褐色砂土
- 4 灰褐色砂質土(小量作成)
- 5 黄褐色砂土
- 6 灰褐色砂土(土中含鉛質)
- 7 灰褐色砂土
- 8 黄褐色砂土
- 9 黄褐色砂土
- 10 黄褐色砂土
- 11 黄褐色砂土
- 12 黄褐色砂土
- 13 黄褐色砂土

第7トレンチ

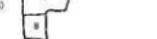
- 0 アスファルト
- 1 灰褐色砂土(透徹砂)
- 2 灰褐色土
- 3 变色褐色砂土(小量作成。オニール、ガラスビーズ等を含む)
- 4 变色褐色砂土(灰褐色、少量の上耕り土含む、一部透徹)
- 5 海岸砂(0.5-1.5cmの大粒の灰褐色) [ブロック含む]
- 6 变色褐色砂土(1mmの灰褐色オーブル含む) [ブロック含む]
- 7 变色褐色砂土(小量の有機質、植物遺体含む)
- 8 变色褐色土



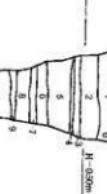
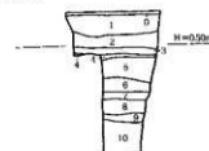
$H=0.60m$



$H=0.60m$

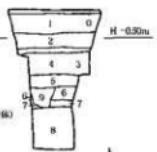
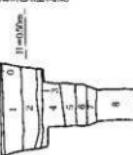


$H=0.60m$



第8トレンチ

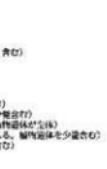
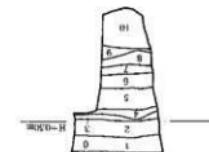
- 0 アスファルト
- 1 变色褐色砂土(石子多く含む)
- 2 变色褐色砂土(小量含む)
- 3 灰褐色土
- 4 オリーブ色砂質土(葉を含む)
- 5 灰褐色土
- 6 灰褐色土
- 7 灰褐色土
- 8 变色褐色砂土(灰褐色の有機質、植物遺体が歩留)
- 9 变色褐色砂土(透徹)



$H=0.50m$



$H=0.50m$



- 0 アスファルト
- 1 变色褐色砂土(石子、空石多く含む)
- 2 灰褐色砂土
- 3 变色褐色砂土
- 4 变色褐色砂土(石子多く含む)
- 5 灰褐色砂土
- 6 灰褐色砂土(有機物多く含む)
- 7 变色褐色土(灰褐色土) [有機物多く含む]
- 8 变色褐色土(灰褐色土) [有機物多く含む]
- 9 オリーブ色砂質土(植物遺体を少量含む)

0 (1:80)
4m

第14図 天神山遺跡 第5・第6・第7・第8・第9トレンチ実測図

第5節 桂見所在遺跡

桂見所在遺跡は湖山池南東岸に位置する。湖山池周辺には、桂見遺跡をはじめ縄文時代前期から弥生時代、古墳時代、古代、中・近世の遺跡が多く形成されており、近辺には国史跡である前方後円墳の布勢古墳や戦国期の城館遺跡である県指定史跡天神山城跡が所在する。また、布勢山下口古神社の位置する丘陵の南西裾部の微高地上には縄文～中世遺跡である帆城遺跡が所在する。

今回の調査は下水道の整備事業に伴い実施したもので、県道鳥取空港・布勢線と県道鳥取・鹿野・倉吉線の交差する北西側に立地する桂見地内の住宅地の市道に5箇所のトレンチを設定した。



第15図 桂見所在遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(Tr-1)【第15・16・18図 図版3】

第1トレンチは、今回調査対象地のうちもっとも南に位置する。道なりに南へ向かえば約50mで県道湖山停車場布勢線に到る。南側は緩斜面となっている。トレンチの規模は1.5m四方である。

現地表はアスファルト舗装されており、厚さ約20cmは舗装工事に伴うアスファルトと客土である。

また第2層～第8層は客土もしくは耕作等にかかる土層と見られ、炭化物を含み、弥生時代中期から近世にいたる土器小片や管状土錐などが混在した状態で少量出土した。摩滅したものが多い。

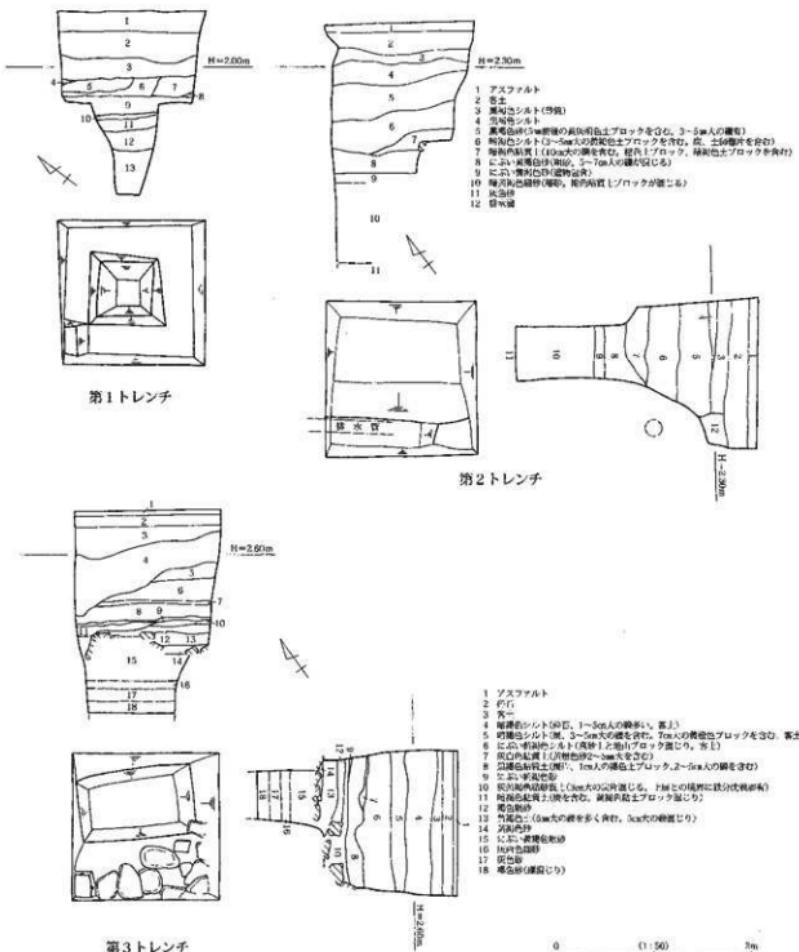
第9層は黒味を帯びた砂質土で、第10層以下は砂層と粘土層が互層となる。第10層に到達した時点でおびただしい湧水を見た。第9層、第10層～第11層上面、第12層から土器片が出土しているが、いずれも摩滅している。遺構は検出されなかった。

第18図1は手づくねの上器皿で、第11層上面から出土した。2は青磁底部で、第9層から出土した。胎土は橙色を呈する陶器質で淡い緑灰色の施釉である。

第2トレンチ(Tr-2)【第15・16・18図 図版3】

第1トレンチから北側へ約55mの交差点に1.5×1.6mのトレンチを設定した。標高2.4m付近までは客土に覆われ、標高2.4mで第3層(黒褐色シルト)を掘り込んで現代の排水管が埋設されている。第5

層(黒褐色砂)には陶器類、土師器、ナイロン等が含まれる。第8、9層(にぶい黄褐色砂)中には、土師器、瓦質土器、陶器体部、須恵器等が含まれる。第10層(暗黄褐色細砂)からは回転台土師器底部、瓦質土器、須恵器壺口鉢、青磁等が出土しており、中世期の要素を持つ。第18図3は第8層の出土遺物を図化したもので、京都系土師器皿である。口径9.6cmを測り、にぶい橙色を呈す。手づくね成形で口縁部は仕上げのヨコナデを施し、一部煤痕を残す。灯明具の転用が考えられる。構造は確認されなかつた。



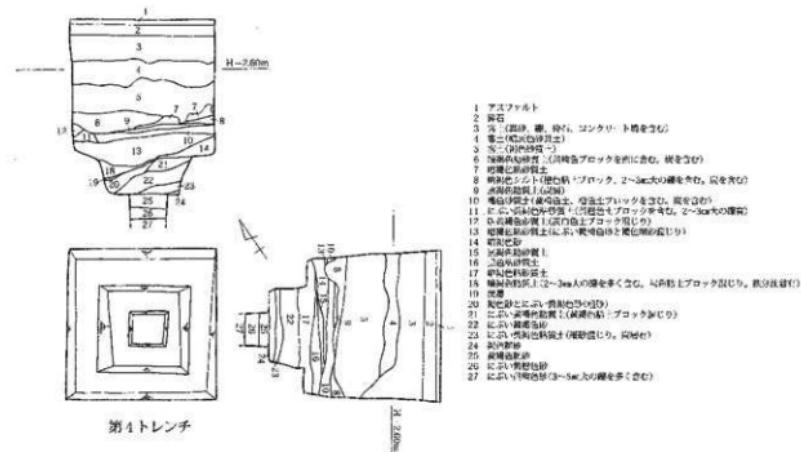
第16図 桂見所在遺跡 第1・第2・第3トレンチ実測図

第3トレンチ(Tr-3) (第15・16・18図 図版3)

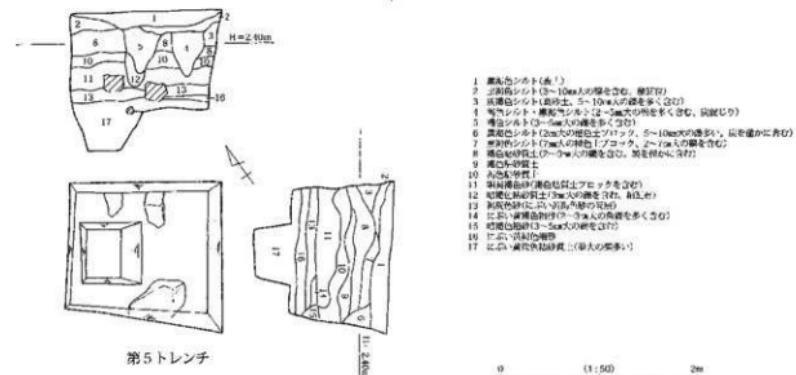
第2トレンチから北東へ約30mの交差点に 1.5×1.5 mのトレンチを設定した。標高2.1m付近までは客土に覆われる。第8層(黒褐色粘質土)上面で小ピットを検出した。第9～第13層(炭を含む黄褐色砂、褐色粘質土)は叩き締められた層序で整地層と考えられ、第12、13層中には土師器皿、陶磁器等を含む。第13層上面で20～40cm大の集石を検出、その下層には拳大の礫が隙間なく充填される。北西隅から南西隅に50cm大の並列する石組みを検出、石法面は南西側に揃えられる。この石組みを境界に下層の様相は変わる。石組みの下層は砂層が続き、第15層(にぶい黄褐色粗砂)からは須忠器、磨滅した土師器、青・白磁が出土。第16層(灰白色細砂)から土師器、瓦質土器鍋、束縛系須恵器鉢、越前甕(第18図4)等が出土しており、中世の様相をもつ。

第4トレンチ(Tr-4) (第15・17・18図 図版3)

第3トレンチから北東へ約100mの交差点に 1.5×1.5 mのトレンチを設置した。標高2.20～2.00m付近までは真砂土、疊、碎石、コンクリート塊等を含む厚さ80cmの客土で覆われる。



第4トレンチ



第17図 桂見所在遺跡 第4・第5トレンチ実測図

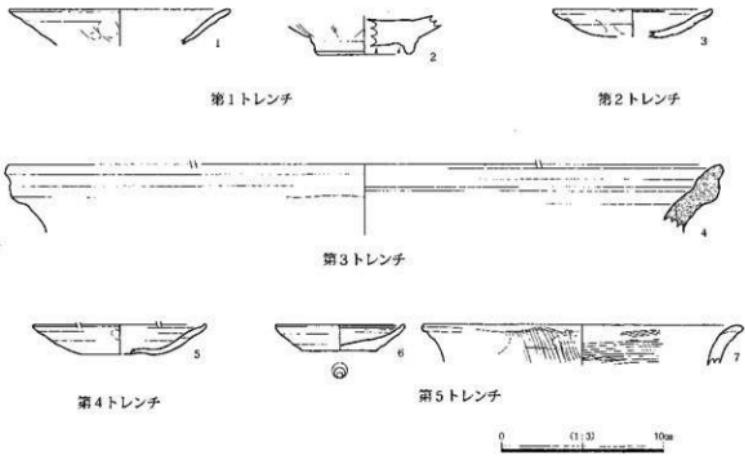
第8層(暗褐色シルト)、第9層(黒褐色粘質土)、第10層(褐色砂質土)は炭を含み、叩き占められており、整地された層序と考えられる。標高1.9m前後の第13層(暗褐色粘砂質土)までは土師器皿、陶器体部、青磁、古銀等が出土、上面で備前壺を検出した。第16、17層では陶器擂鉢、陶器体部片が出土し、中世後期の様相を示す。第18層(暗褐色粘質土)から第23層(にぶい黄褐色粘質土)までは北西へ傾斜をもつが、その性格は確認できなかった。第24層下は砂層が続く。標高1.0mまでの掘り下げを行い、第26層(にぶい黄橙色砂)中で土師器片、漆器片が出上したが、遺構は検出されなかった。第18図5の土師器皿は第25層下の砂層中出土遺物を図化したものである。手づくね成形で器厚は薄く、浅黄橙色を呈し、口縁端部は内側に摘まむ。

第5トレンチ(1T-5) [第15・17・18図 図版4]

第2トレンチから東へ約30mに1.5×1.6mのトレンチを設定した。現地表から約20cmの表土下でP1～P7を検出、第7層(黒褐色シルト)を掘り込んだビット中で土師器皿(第18図6)を検出した。第8層、第9層は褐色粘砂質土の安定した層序で、須恵器、瓦質土器、土師器等が出土、第18図7の土師器甕は、掘り下げ中の出土遺物を図化した。第11層(明黄褐色砂)除去面で25～60cm大の石群を検出、第17層(にぶい黄橙色粘砂質土)上面に設置されたものと思われる。第13層(褐灰色砂)では土師器片1、以下の砂層中では磨滅した土師器、繩文片を検出した。標高1.8m以下は地山と考えられる。

小結

調査地は現在市道として利用されており、地表下1m前後の客土で覆われている。中世期の遺物包含層、或いは遺構面は砂質土を基本層序とし、第1トレンチから第4トレンチへ徐々に高まる様相がみられる。また、第2トレンチから第4トレンチの北西壁断面では西側に位置する湖山池方向に傾斜を見せる層序を確認し、元地形を保っていると考えられる第5トレンチでは更に比高差をもち、その下層は安定している。第3トレンチの石列は北西から南西にかけて据えられ、北東側には拳大の石で充填、整地されている事から、これらは護岸に伴う遺構の可能性も考えられる。また、第5トレンチの東側に所在する机城遺跡は、古絵図(「御留場図」)に描かれる寺院等に關連する遺構である可能性を指摘している。安定した層序と地山に設置された石群、位置的な様相から等もこれらに關連、或いは付随する遺構の痕跡である可能性も含めて、今後、近辺の開発等には十分な注意が必要である。

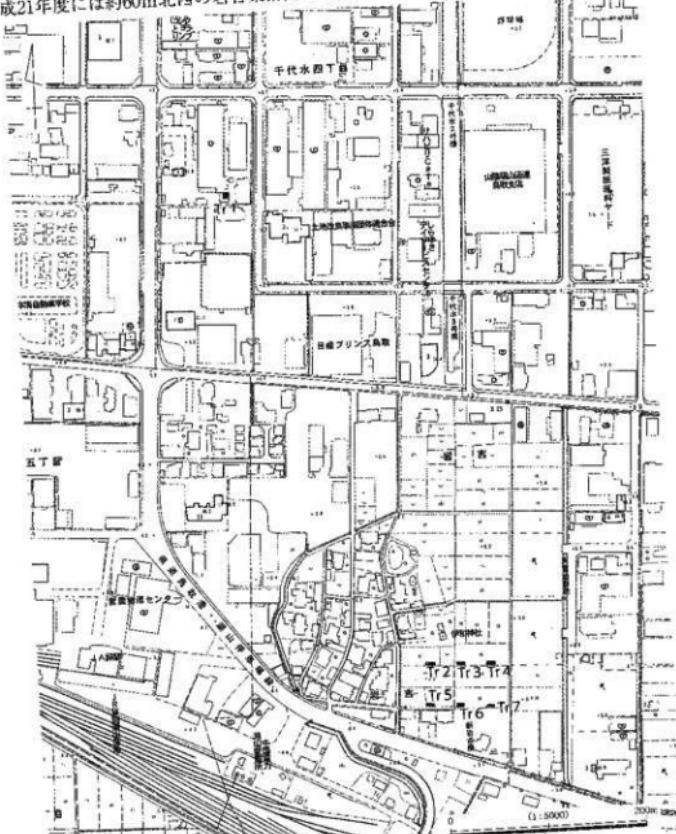


第18図 桂見所在遺跡 第1・第2・第3・第4・第5トレンチ出土遺物実測図

第6節 岩吉遺跡

岩吉遺跡は、南北1.2km東西0.8km前後にも及ぶと考えられている広大な遺跡で、千代川左岸に広がる鳥取平野西側部分のほぼ中央に位置している。遺跡の中心部分と考えられている現在の岩吉集落や伊和神社境内を除けば、往時は一帯に水田が広がっていたとのことであるが、現在は今回の調査地付近に若千残っているに過ぎず、大きな変貌を遂げている。

今回の発掘調査は、第1トレチは大型店舗建設計画、第2~7トレチは宅地開発計画に伴って既行なった試掘調査である。第1トレチは岩吉遺跡の最北西端付近に位置する工業団地内に設定した。往調査で遺跡の範囲として確認されている付近であり、東へ約250mでは平成2年度の調査で古墳期の溝状遺構が検出されている。第2~7トレチは岩吉集落の東の伊和神社に南接する地点に設定した。調査時は休耕田であった。各トレチは、道路敷設予定地の道路交差部分(三叉路)に設置した。調査地付近を南北に走る用水路を挟んで東西の標高を比べると、伊和神社が位置する西側が若干高くなっている。平成21年度には約60m北西の岩吉集落内で試掘調査が行われ、平安時代の土坑と古墳時代中期



第19図 岩吉遺跡 調査トレチ位置図

の遺物包含層が検出されている。

第1トレンチ(Tr-1) [第19・20・22図 図版4]

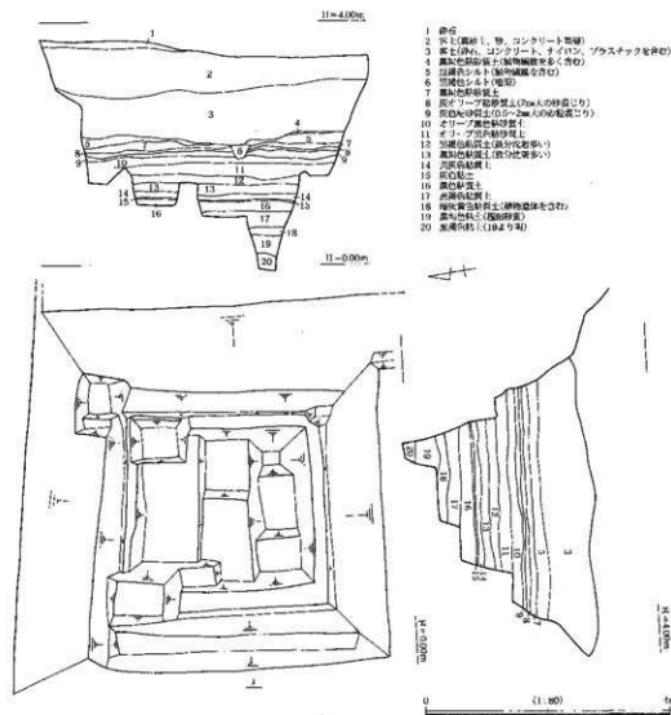
第1トレンチは、現在旧工場跡地となり、建築物の基礎等で搅乱されていることを考え、影響の少ないと思われる敷地内の南端部に10×10mのトレンチを設定した。

標高3.7~2.2m付近までは砂と碎石、近・現代の建物基礎等による客土で覆われている。客土を除去した標高2.1m付近で、北東端に5.4×5mで掘り下げを行った。第4・5層は植物繊維を多く含む黒褐色土層で、陶器類、ナイロン、釉瓦等を含む近・現代土坑を検出、第7層からは暗渠が掘り込まれる。標高2.8~2.6mの第10層(オリーブ黒色粘土質土)では壺(第22図1)、甕口縁部、低脚杯脚部などを含み、多くが磨滅を受けた細片の土器片である。第11層(オリーブ黒色粘土質土)からは遺構は検出されなかつたが、良好な状態で甕口縁部(第22図2)、有段高窓(第22図3)、器台など古墳前期の遺物が出土している。以下は、黒褐色粘土質土と黒色粘土質土の比較的安定した層序が続き、標高0.0m付近までの掘り下げを行ったが遺構、遺物は確認されなかつた。

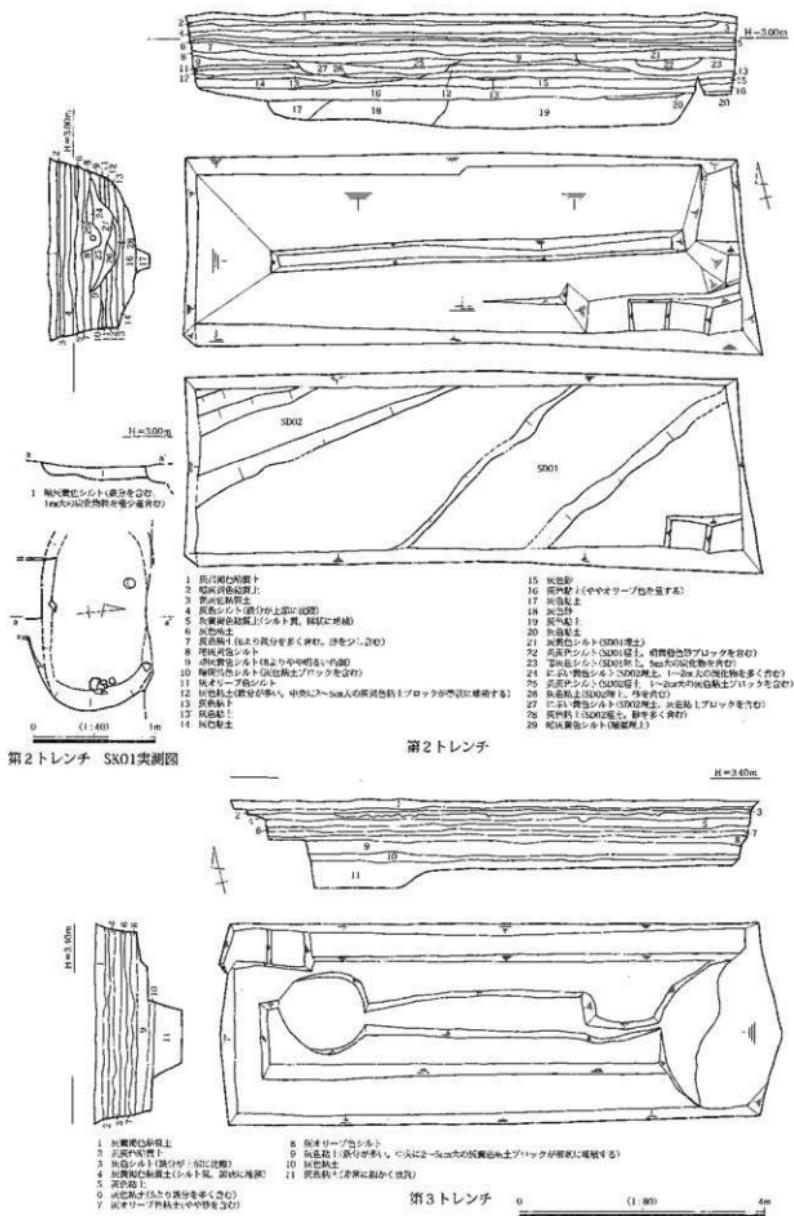
第2トレンチ(Tr-2) [第19・21・23図 図版4・5]

第2トレンチは、最も伊和神社に近いトレンチで、伊和神社南側25m付近に設置した。トレンチの規模は南北3.1m×東西9.1mである。

表土の除去を行ったところ、トレンチ中央付近で東西方向に延びる土管による暗渠が検出された。は

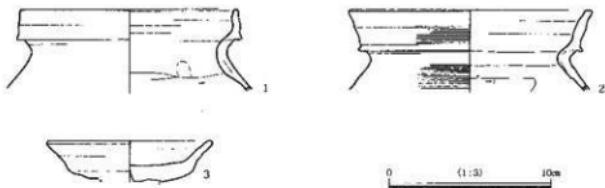


第20図 岩吉遺跡 第1トレンチ実測図

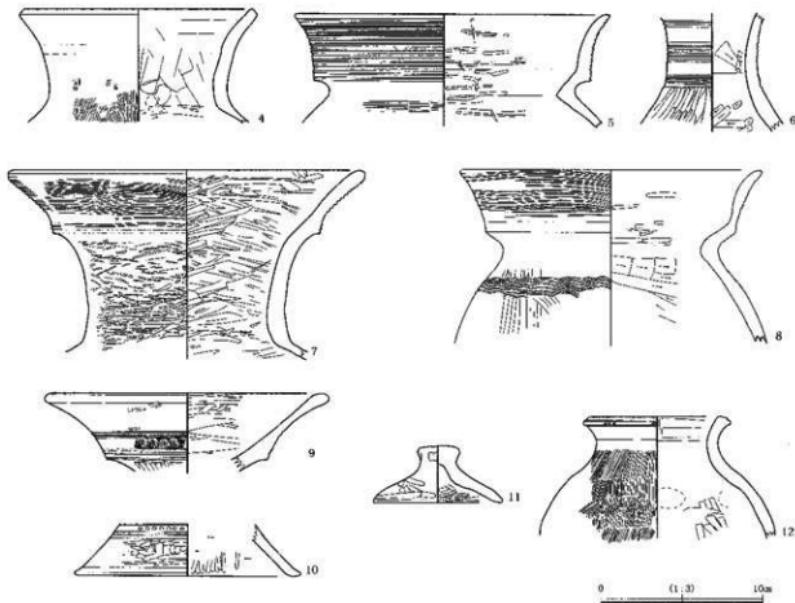


は同じ標高で遺物が散見されたため、精査したところ、第8層上面で土坑(SK01)を検出した。北側を暗渠で、西側と中央部を土層確認のためのサブトレレンチによって一部消失してしまった。平面形は東西1.5m前後、南北1m弱の小判形に近い楕円形である。検出面からの深さは10cmを測る。壁際から弥生時代後期の土器が複数出土した。さらに滑状造構2条を検出した。SD01はSK01と同じ第8層上面、SD02は第9層上面で検出された。SD01の規模は、幅約1.8mを測り、検出された長さは約3.8mである。南側がやや低くなっている。SD02の規模は、幅約1.3mを測り、検出された長さは約3.3mである。西側がやや低くなっている。両造構とも弥生時代後期の土器を主に出土している。

これ以下の層からは遺物の出土もなく、粘土層と砂層が瓦層となる。遺物は、弥生土器以外には古墳時代から中世の土器小片が少量出土した。第23図4は、SK01出土。単口縁の壺である。5・6は、SD01出土。5は壺、6は器台筒部である。6は赤色塗彩されている。7~11は、SD02出土。7は壺口縁部で、丁寧にミガキが施されている。8は壺で、口縁部や肩部に炭化物が付着している。9は沈線とスタンプ文が施された器台受け部、10は沈線と刺突が施された器台脚部である。いずれも丁寧なミガキ



第22図 岩吉遺跡 第1トレレンチ出土遺物実測図



第23図 岩吉遺跡 第2トレレンチ出土遺物実測図

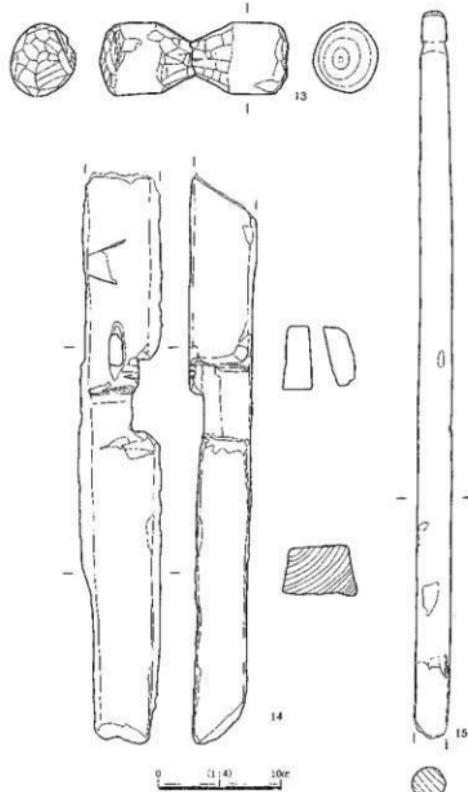
が施されている。11は蓋である。12は遺構外出土。壺の上半で、口唇部に凹線とキザミが巡る。肩部付近にヘラ状工具の刺突が2段巡らされている。

第3トレンチ(Tr-3) [第19・21図 図版5]

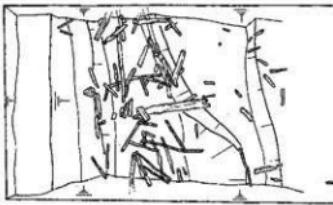
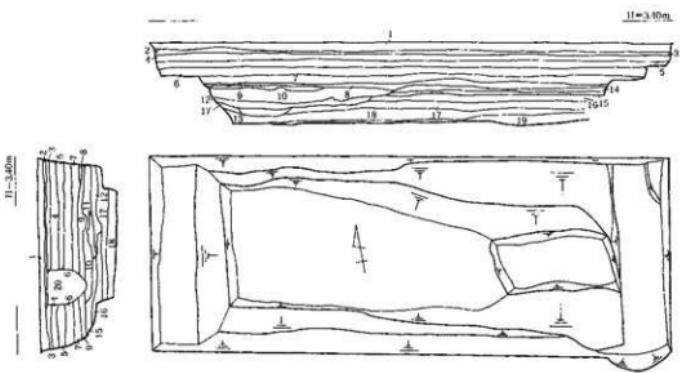
第3トレンチは、第2トレンチの約22m東に設置した。トレンチの規模は南北3.2m×東西8.7mである。表土の除去を行ったところ、トレンチ南北中央付近、西壁から約3.8mの地点から東へ延びる土管による暗渠が検出された。除去後に精査したが遺構は確認されなかった。遺物は弥生時代後期七器・土師器・須恵器の小片が少量出土しているが、特にまとまりは見られなかった。第4層以下からは遺物は出土せず、約1.4m掘り下げたところで灰色の砂層に到達したため掘下げを終了した。なお、トレンチ東側は崩落のために記録できなかったが、現表土下約2mで灰色の砂層に至った。

第4トレンチ(Tr-4) [第19・24・25図 図版5]

第4トレンチは、第3トレンチの約22m東に設置した。トレンチの規模は南北3.2m×東西8.5mである。表土の除去を行ったところ、トレンチ中央付近で東西に延びる土管による暗渠が検出された。暗渠除去後、約10cm掘り下げたところ、トレンチ西側部分から風化の著しい凝灰岩のような大きさ5cm程度の灰黄色土ブロックを多く含むオリーブ黒色粘土層が検出され、木が縦位や横位の状態で検出された。木器だまりの様相を示し、縦位のものは先端を杭状に加工しているものが多いが、直立するものはあまりなく斜位の状態で検出されている。横位のものもそれぞれが関連付けられるような状態ではない。深さ30~50cmほどの浅い河道中に杭が打ち込まれ、周辺に材や流木が集積したような状態である。土師器小片が少數出土しているが、古墳時代前期後葉~中期と考えられる。この河道の基盤層をさらに掘り下げ、現地表下1.3mで砂層に至った時点で全体の掘り下げを終了した。なお、トレンチ北壁西から2.5mの地点で第7層以下の土層サンプルを柱状に採取した。遺物は、ほとんどが木製品であった。第24図13は、木鉤である。14は、角材でホゾ穴と相欠きを持つ部材である。ホゾ穴内にホゾの一部が残っていた。トレンチ外に長く残る状態で埋没していたため、切断して取り上げた。15は、有頭状の加工を持つ材である。

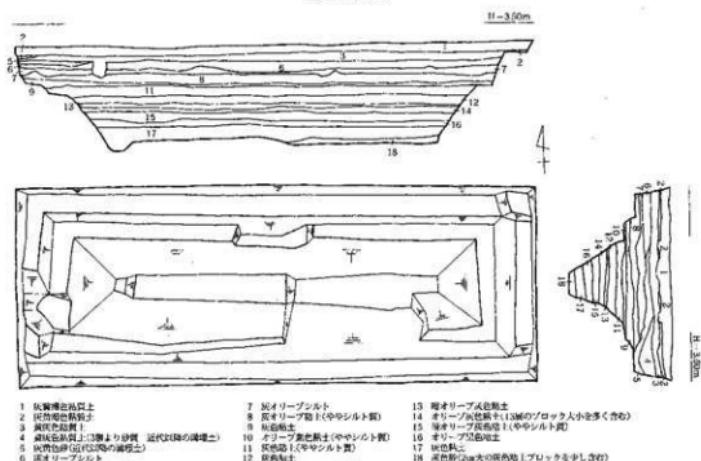


第24図 岩吉遺跡 第4トレンチ出土遺物実測図



- 1 黄褐色粘土
2 淡黄色粘土
3 黑灰色粘土
4 灰色粘土(ヤシルト質)
5 黄褐色土
6 淡黄色粘土(シルト質、砂利付)
7 黄色粘土
8 黄色粘土
9 黄色粘土
10 オリーブ色粘土(砂利付)アーチをかけ、表面剥離多く含む
11 オリーブ色粘土(砂利付)アーチをかけ、表面剥離多く含む
12 オリーブ色粘土(シルト質、砂利付)表面剥離多く含む
13 黄褐色粘土(シルト質、砂利多く含む、本層がより被下層)
14 淡黄色粘土(沙を含む)
15 オリーブ色粘土
16 オリーブ色粘土
17 黄色粘土
18 黄色粘土
19 黄色土
20 黄色粘土(赤褐色)

第4トレンチ

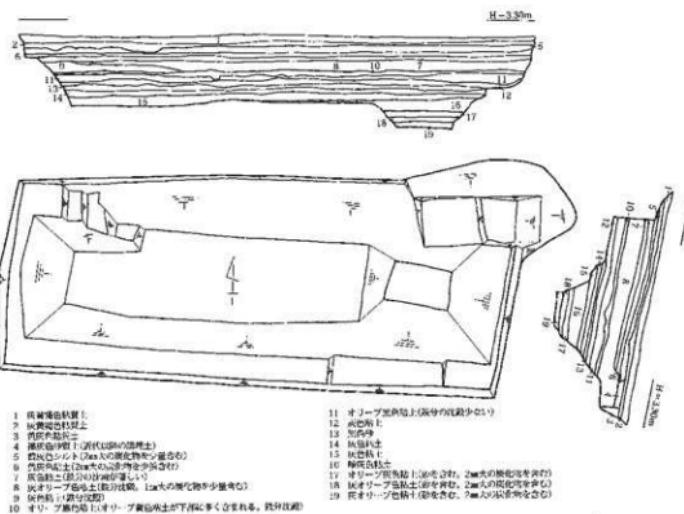


第5トレンチ

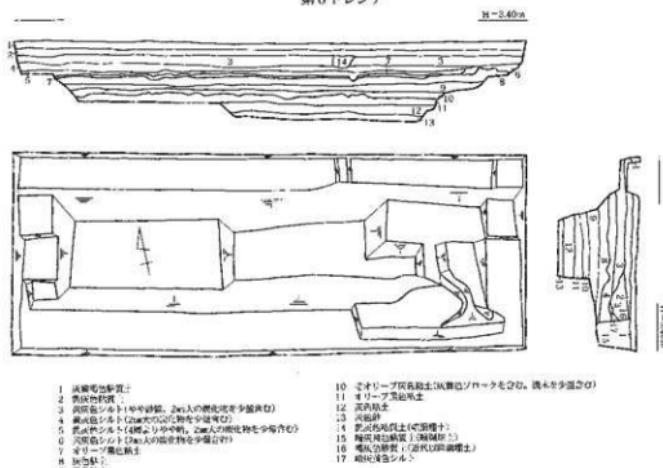
第25図 岩吉遺跡 第4・第5トレンチ実測図

第5トレンチ(Tr-5) [第19・25図 図版6]

第5トレンチは、第2トレンチの約38m南に設置した。トレンチの規模は南北3.2m×東西8.5mである。現表土下約50cm、トレンチ南西コーナー付近から東に向かって延びる溝状の落ち込みを2条重複した



第6トレンチ



第7トレンチ

第26図 岩吉遺跡 第6・第7トレンチ実測図

状態で検出した。砂質土または砂からなる埋土を掘り下げたところ、中近世の陶磁器・土器や古墳時代から古代の須恵器、時期不明の管状土錐などに混じって埋土下層から板ガラス片が出土した。また杭状に立って出土した木材も角材・丸太材いずれも新しいものと判断されたため、近代以降のものと判断した。掘り進めたところ、土器小片数点が出土し、現表土から約1.2m下(第12層)で弥生土器片が1点出土したが、他に出土遺物はなく、遺構も検出されたかった。以下、現地表下約1.5mで砂層に至っても遺物は出土せず、遺構も検出されなかった。

トレンチ北壁東から2.1mの地点で第8層以下の土層サンプルを柱状に採取した。

第6トレンチ(T-6) [第19・26図 図版6]

第6トレンチは、第5トレンチの約22m東に設置した。トレンチの規模は南北3.2m×東西8.1mである。

現地表下約20cmに掘り込み面を持つ溝状の落ち込みをトレンチ南壁に沿って検出したが、埋土の様相から近世以降の溝と近現代の暗渠と判明した。さらに掘り下げたところ、トレンチ中央付近南寄りの現地表下約50~60cmの粘土層中から、板を縦割りして細い棒状に加工したものが杭状にはば直立して8本検出された。相互の距離などの配置に計画性は見られない。木はいずれも割り材で一部に先端を粗く削った加工痕がみられた。土器の供伴はなく時期は不明である。またこれらの頭部とほぼ同じ高さで厚さ5mmに満たない薄板状の材の集中が見られた。検出層では砥石が出土している。これ以下の層は無遺物層で、現地表下約1.1mでトレンチ全体に広がる砂層を検出した。一部砂層の下の粘土層も掘り下げたが、遺物は出土しなかった。

第7トレンチ(T-7) [第19・26図 図版6]

第7トレンチは第6トレンチの約22m東に設定した。トレンチの規模は南北3.2m×東西8.4mである。

現地表下約20cmに掘り込み面を持つ溝状の落ち込みをトレンチ南壁に沿って検出したが、切り合いの確認によってより古い落ち込みから近世以降の遺物の出土が見られることから、近世以降の溝と近現代の暗渠と判明した。さらに掘り下げたところ、現表上約80cmで第4トレンチの木製造物を多く含む層に近似した層をトレンチ西側部分で検出した。精査したが、土器小片数点と流木と考えられる枝状の自然木が数点出土したのみで、遺構と判断するには至らなかった。この層より上の層で土師器・須恵器が散見されたが、まとまりはなく、遺構は検出されなかった。無遺物層の粘土層を挟んで現地表下約1.2mで砂層に至る。

小結

岩吉遺跡は、数次に及ぶ調査で弥生時代から古代にかけての多くの遺構・遺物が検出され、千代川西岸の鳥取平野における重要な遺跡に位置付けられている。

第1トレンチにおいては、明確な遺構は確認されなかったが、古墳前期の遺物包含層を確認することが出来た。遺跡の広がりと遺構の可能性を考え、今後、開発事業等充分な配慮が必要と考える。

第2~第7トレンチにおいては、最も伊和神社に近い第2トレンチで弥生時代後期の土坑や溝状遺構が検出され、東側の第4トレンチでは木製品を多数出土した古墳時代前期の自然河道が検出された。不明な点も多いが、一帯に弥生時代から古代・中世にわたる遺構・遺物が埋もれていますことは明らかである。今後も注意が必要である。

第7節 内海中所在遺跡

県道白兎・御熊線の東丘陵に立地し、御熊集落の北東約500mに位置する。周辺における遺跡の立地は希薄で、内海中寺ノ谷遺跡や縄文時代～古代の遺物散布地がわずかに知られている。内海中寺ノ谷遺跡は内海中集落の南西約100mに位置し、丘陵裾の微高地を中心に立地する遺跡である。同遺跡についてはは場整備に伴って発掘調査が行われ、掘立柱建物、横列などの遺構とともに製塩土器や青・白磁などの遺物が出土し、奈良～室町時代の集落遺跡の存在が明らかとなった。また、遺物散布地もは場整備事業の際に確認され、東丘陵裾部に広がっていることがわかってきていている。散布地から出土した遺物の中には縄文前期に遡る土器も含まれている。

今回の調査は、道路整備に伴い実施したものである。調査対象地は谷間を段状に削平し耕作地として改変した痕跡が残る山林で、段上の平坦部2箇所についてトレンチを設定した。



第27図 内海中所在遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(T-1)【第27・28図 図版6】

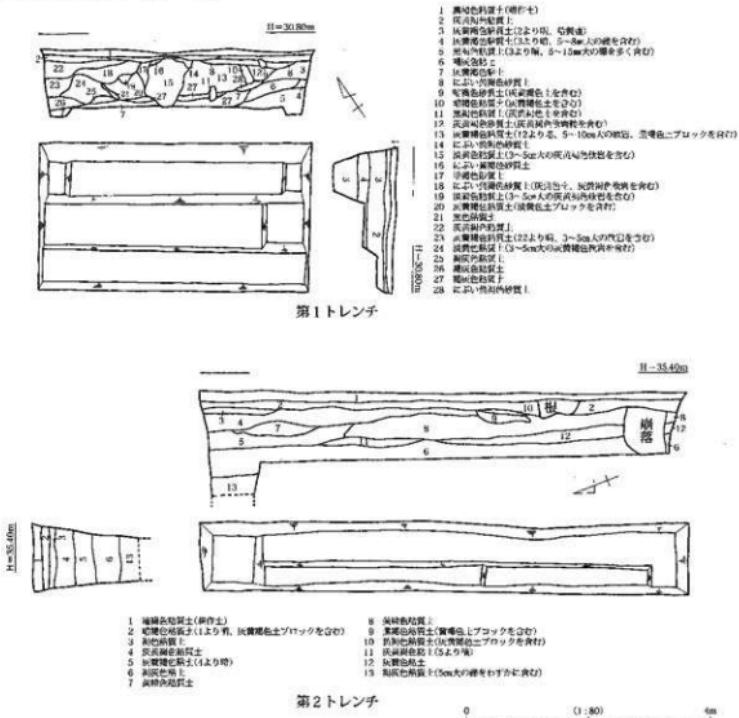
谷の先端部に設定した2.4×4.5mのトレンチで、地表面の標高は30.2m前後を測る。耕作土下層の第2層は床土で、その下位に堆積する第3～7層が造成前の基盤層と考えられる。基盤層は平野側に傾斜し、その上位に堆積する第8～24層が耕作地造成時の客土と思われる。

客土内および第3～7層からの遺物は認められず、遺構も検出されなかった。

第2トレンチ(T-2)【第27・28図 図版6】

谷中央部の平坦部に設定した1.1×8.0mのトレンチである。第1トレンチより4.6mあまり高位に位置し、標高34.8m前後を測る。耕作土下層の第2～4層および第7～10層が耕作地造成に伴う客土で、その下層に堆積する粘土層が基盤層になるものと思われる。

遺構、遺物は検出されなかった。



小結

谷部の平坦部に2本のトレンチを設定した。調査地は耕作地造成に伴う改変が行われているが、各トレンチの客土内や造成前の堆積層に遺物は認められず、遺構も検出されなかった。遺跡は存在しないものと考えられる。

第8節 下坂本清合遺跡

下坂本清合遺跡は、鳥取市気高町下坂本に所在する。宍木・瑞穂谷の西側丘陵裾に営まれる下坂本集落の東縁辺部から平野中央を北流する河内川の西岸域から丘陵裾に展開する遺跡である。鳥取県教育文化財団の平成25年度調査で鎌倉時代の掘立柱建物や水田や丘跡、河川が見つかっている。妙行寺の北東丘陵裾に展開する下坂本遺跡では古墳時代後期の土器が多数出土したとされ、下坂本集落背後の丘陵上には38基からなる下坂本古墳群が分布している。また、河内川を挟んで対岸に広がる常松菖蒲遺跡、常松大谷遺跡では弥生時代の流路や水田などが調査されている。

今回の調査は、鳥取西道路整備計画に伴い2011年度Tr1~10の調査に引き継ぎ実施したもので、武宮神社の南西500mの丘陵東縁辺部、南北に延びる集落旧道東側の標高7.74mの水田部にTr11、旧道西側の標高8.05mの水田部にTr12、標高10mの丘陵裾民家跡地にTr13を設定した。

第11トレンチ(Tr.11)【第29・30図 図版7】

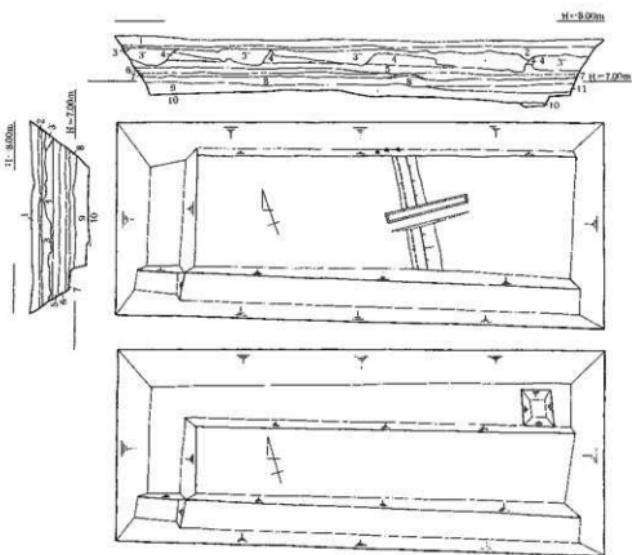
県道矢印鹿野線と西側の旧道間の水田部に在り東西方に長軸をもつ $3.2 \times 8.0\text{m}$ の規模のトレンチである。地表面下15cm前後でナイロン片を含む第2層、さらに第3～3^o層はほ場整備時あるいは以前の搅乱とみられ第4層を掘り込み一部第5層に達する。第4層褐灰色シルト中には須恵器や土師器細片、弥生後期壺口縁部片2点、木片など複数期の遺物が含まれる。第5層暗灰黄色シルトでは出土量は少ないが陶器片と木片が出土している。以下、第6層暗灰黄色粘土、第7層黒褐色粘土と続き、第7層中でトレンチを南北に横断する高さ5cm、幅40cm程度の畔状の高まりを検出した。また、位置的には畔状構の西側にあたるが、下層の第9層中でトレンチ北壁沿いに薄板状の立杭3本を確認している。第8層黄灰色シルト下は水を含むと崩壊する第9層黄灰色砂、さらによく締まった第10層黄灰色砂礫と続く。第9層はトレンチ西側で標高6.98m、西側では6.80mを測り、東西6.8mでおよそ18cmの高低差が認められ、下層の砂礫層でも同様であった。遺物は上述以外に重機掘取り時に層序不明ながら田下駄とみられるぼぞ穴のある板片が出土している。

第12トレンチ(Tr.12)【第29・30・32図 図版7】

Tr.11の50m西側、旧道をはさんで山裾水田部に在り、東西方向に長軸をもつ $3.0 \times 7.2\text{m}$ の規模のトレンチである。20cm弱の耕作土下は第2層褐灰色シルトをはさんで水田床土の第3層明黄褐色シルト、さらに第3^o層褐灰色シルト下の第4層褐灰色粘質土中に瓦質土器、土師器、須恵器、陶器、弥生土器片と30点程の遺物を出土しており、このうち瓦質羽釜I.I縁部片(第32図1)と近世天目茶碗片(第32図2)

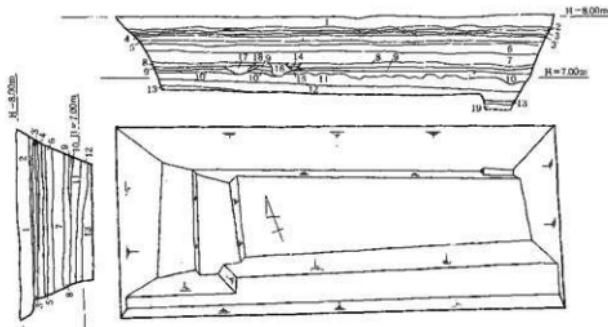


第29図 下坂本清合遺跡 調査トレンチ位置図



- 1 灰色粘土 (褐色土)
2 灰色粘土シート (褐色土)
3 灰色粘土シート (褐色土の塊)
4 灰色粘土シート (褐色土の塊を含む)
5 にじみ、褐色粘土シート (褐色土の塊を多く含む)
6 にじみ、褐色粘土シート (褐色土の塊を多く含む)
7 褐色粘土シート (褐色土の塊を含む)
8 褐色粘土シート (褐色土の塊を含む)
9 褐色粘土シート (褐色土の塊を含む)
10 褐色粘土シート (褐色土の塊を含む)
11 褐色粘土シート (褐色土の塊を含む)
- 12 灰色粘土 (5より薄で堅い)
13 灰色粘土 (5より薄で堅い)
14 灰色粘土 (5より薄い)
15 灰色粘土 (5より薄い)
16 灰色粘土 (5より薄い)
17 灰色粘土 (5より薄い)
18 灰色粘土 (5より薄い)
19 灰色粘土 (5より薄い)

第11トレンチ



- 1 黄褐色粘土質土 (耕作土)
2 耕作土シート (耕作土)
3 耕作土シート (耕作土の塊)
4 耕作土シート (耕作土の塊を含む)
5 耕作土シート (耕作土の塊)
6 褐色粘土 (褐色土の塊を含む)
7 褐色粘土 (より粘り強い褐色土の塊を含む、シート状)
- 8 褐色粘土 (より粘り強い褐色土の塊を含む)
9 褐色粘土 (より粘り強い褐色土の塊を含む)
10 黑褐色粘土 (耕作土の塊を含む、シート状)
- 11 黑褐色沙 (1m以下の均一な砂、粘土を含まない)
12 黑褐色粘土 (耕作土、砂泥を含む、わずかにシート層に)
13 黑褐色粘土 (耕作土の塊を含む)
14 黑褐色粘土 (耕作土の塊)
- 15 黑褐色粘土 (耕作土を含む、土粒子含む)
16 黑褐色粘土 (1m前後の塊を多く含む)
17 黑褐色粘土 (耕作土の塊を含む、シート状)
- 18 黑褐色粘土 (耕作土の塊を多く含む)
19 黑褐色粘土 (0.5~3mの大の塊)
20 黑褐色粘土 (0.5~3mの大の塊)、砂礫、よく発達する

第12トレンチ

0 (1:80) 4m

第30図 下坂本清合遺跡 第11・第12トレンチ実測図

を図化した。第7層黄灰色粘土中にも土師器、須恵器片が出土しており、僅かに律令期赤彩画片が含まれている。トレンチ北壁前際の第8層黄灰色粘土上面と第9層黄灰色粘土上面で深さ12~21cmのピット状の遺構を検出しており、炭片を含む埋土が中心となる。第10層黒褐色粘土中では古墳時代中期頃の土師器片を検出している。第13層黄灰色砂はTr11第9層と対応する水を含むと崩壊する軟弱砂層でその下のよく縮まった第19層黄灰色砂礫はピンボールによる確認である。第13層はトレンチ西側で標高6.87m、西側では6.50mを測り、東西5.8mでおよそ37cm、南北方向では西壁より1.8m間に14cmの高低差が認められた。遺物はTr11の遺物量に比べ倍以上、コンテナ約1/3程度の出土量があり、中には出土層不明ながら弥生時代後期壺口縁部片や底部片が含まれる。

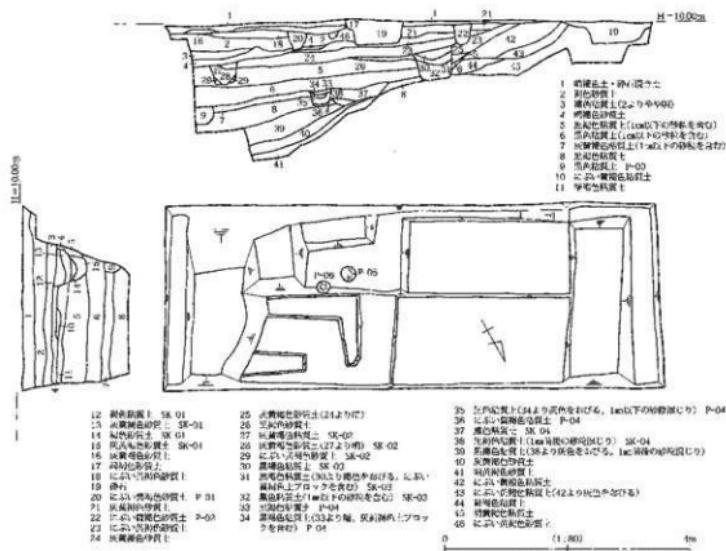
第13トレンチ(Tr-13)【第29・31・33図 図版7・8】

第12トレンチから北約20mの丘陵裾に位置し、旧宅地跡に設定した3.0×8.0mのトレンチである。

第1層は宅地造成上で、トレンチの丘陵よりでは第1層下で黄橙色や黄褐色の粘土質(第42~44層)が堆積し、その下層に地山と思われる明黄褐色土(第15層)が認められる。地山は東側平野部へと下っていき、その上位堆積層から多くの遺構、遺物が検出された。

遺構は、第2、21層上面からピット4(P-01、02、05、06)、第4、5、26層上面から土坑状遺構3基(SK-01、02、03)、第7、8層上面からピット2(P-03、04)、土坑1基(SK-04)が検出された。各遺構の時期は、包含層遺物からP-01、02、05、06は古墳時代中期~後期、SK-01、02、03は古墳時代前期、P-03、04、SK-04が弥生時代後期と推測される。

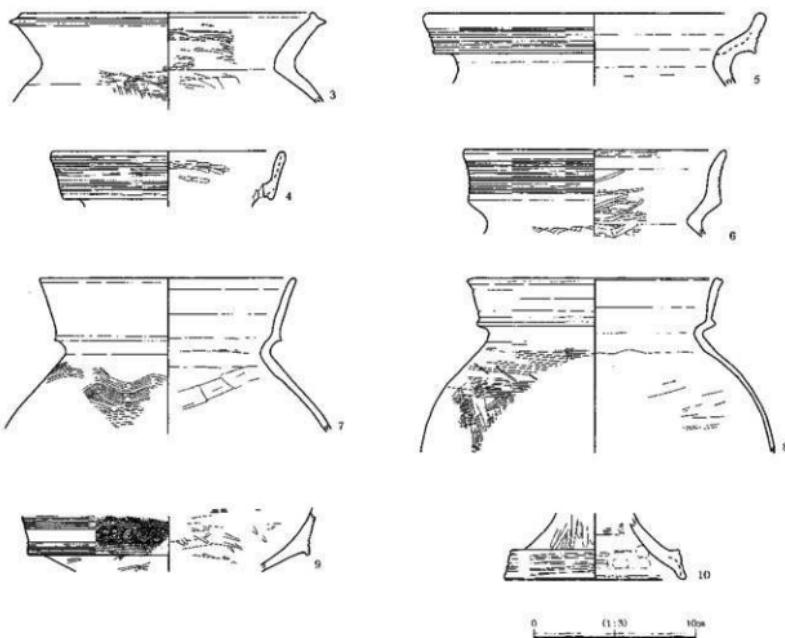
遺物はいずれも包含層遺物で、第2層から須恵器、土師器壺、高杯、第23、24層から土師器壺(第33図7、8)、第5~6層から土師器壺、弥生土器壺(3)、壺(4、5、6)、器台(9、10)、第7、8層から弥生土器の壺などが出土した。第2層は古墳時代中期~後期、第23、24層は古墳時代前期、第5、6層は弥生時代後期~古墳時代前期、第7、8層は弥生時代後期の遺物包含層と考えられる。出土量はコンテナ1箱分を数える。



第31図 下坂本清合遺跡 第13トレンチ実測図



第32図 下坂本清合遺跡 第12トレンチ出土遺物実測図



第33図 下坂本清合遺跡 第13トレンチ出土遺物実測図

小結

下坂本清合遺跡は河内川左岸にあって、県道東側では鎌倉時代の遺構、県道西側のTr11では東側へ緩やかに下る地形を確認するとともに、砂礫層(第10層)・黄灰色砂(第9層)の上面に堆積した黄灰色シルトを基盤として時期不明ながら標高7.14mで南北方向の畔状遺構を検出している。さらに西側のTr12ではTr11同様に砂礫層・黄灰色砂の上面に黒褐色粘土がやや厚めに堆積しており、上層に古墳時代中期頃の遺物包含層、奈良・平安期の可能性がある遺構面2面および遺物包含層、中世とみられる遺構包含層が確認された。Tr12からわずか15m西側の丘陵裾に設定したTr13では、上層は削平を受けるものの弥生時代後期～古墳時代後期の遺物とともに同時期の遺構が検出されている。特に弥生時代後期～古墳時代前期の遺物はまとまった出土量があり、丘陵裾部に集落が内包されている可能性が大きい。このように下坂本清合遺跡は丘陵裾を中心に河内川へといたる平野部一帯に広く展開する遺跡であることが明らかとなった。

第9節 会下・郡家遺跡

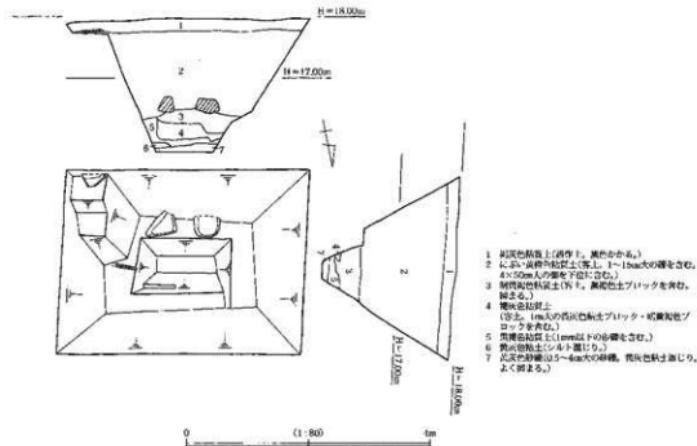
会下・郡家遺跡は鳥取市気高町会下、郡家に所在し、曉蓬集落から北東方向へ舌状に延びる段丘上に展開する。これまで昭和56年の圃場整備に伴う調査を皮切りに複数の発掘調査が行われ、弥生時代中期から室町時代の建物跡や木棺墓などが明らかとなっている。特に弥生時代においては大規模な独立柱持柱建物や堅穴住居などから拠点的な集落が存在していたとみられ、平安時代には大型掘立柱建物の建替え状況から公的施設の存在が指摘されている。調査地は舌状微高地の西側、会下集落から200m程南東の圃場整備された標高18mの水田地帯に在り、現在はカキ、イチジク、ミカンなどの果樹栽培に利用されている。農道を隔てた東側は急激に小高くなることから本来調査地は谷部であった可能性があり、ともすれば圃場整備によるかなりの客土が予想される。



第34図 会下・郡家遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(Tr-1) [第34・35図 国版8]

農道脇5mの果樹園内に設定した東西方向に長軸をもつ3×4m規模のトレンチである。地表面下20cm弱で客土であるにぶい黄褐色粘質土(第2層)が広がり、厚さは1.4m余りに及ぶ。大小の角礫を含み、花崗岩系の丘陵地からの掘削土が直接埋められたとみられる。第2層の下位には人力では移動不能の岩礫が検出され、流れ込み状の多量の湧水がみられる。第2層下には圃場整備以前の地表とみられる褐色粘質土(第5層)が広がり、一部にこれらの地表土が混じり込んだ搅乱層(第3・4層)が認められた。第5層中では圃場整備以前のものと思われる立杭2本を検出した。第5層下には灰色粘土(第6層)が厚さ8cm程度認められ、さらにその下層はよく締まった黄灰色砂礫(第7層)である。遺物は、客土の第2層中から、上部器、須恵器、陶器それぞれ細片の計3点とビニール片、ガラス片が出土している。なお、Tr-1から100m余り北側でTr-1調査当時に調査中であった鳥取西道路建設に伴う埋蔵文化財調査地においても、本トレンチの第2層、第5層、第6層、第7層とそれぞれ対応する層が確認されており、第5層対応層(山ガ士)から複数期の遺物が出土しているとの教示を受けたが、Tr-1では第5層からの出土遺物はみられなかった。



第35図 会下・郡家遺跡 第1トレンチ実測図

小結

Tr1は予想通りは場整備により埋さ1.6~2mの客土がなされ、ほ場整備前の地表面は標高16.3mと段丘標高22mとは5m以上の比高差が認められる。旧表土以下、粘土層、締まった黄灰色砂礫層を確認するも本来は舌状の段丘から北西谷部へ急激に下る傾斜地であったと考えられる。遺物は僅かに客土中に細片が含まれる程度であるが、段丘上は拠点的な集落が営まれることなどから、谷部についても一応の注視は必要と思われる。

第10節 乙亥正所在遺跡

乙亥正所在遺跡はJR浜村駅より南へ1.2km、気高町と鹿野町との境界平野部、鳥取市鹿野町乙亥正に所在する。平野中央を流れる浜村川は調査地手前150mで東寄りへ流路を変え、樅掛集落際で東丘陵沿いを北流する。乙亥正近辺の平野部で遺跡は確認されていないが、西側の丘陵裾に営まれる重山集落後背の丘陵斜面には平成24年度試掘により土坑と弥生時代後期土器、古墳時代後期土器が検出された乙亥正屋敷遺跡が、その丘陵上には30基余りからなる重山古墳群が展開する。今回の調査は鳥取西道路整備計画に伴い実施したもので、Tr1~4は乙亥正の平野部を横断するように配置し、平野のはば中央、標高6.38mの水田にTr1、その70m東の標高6.15mにTr2、浜村川右岸の標高5.98mにTr3、さらに70m東の標高5.58mにTr4を設定した。

第1トレンチ(Tr1) (第36・37図 図版8)

東西方向に長軸をもつ3.5×7.3mの規模をもつトレンチである。耕作土下20cm弱で厚さ45cmの疊層(第2~4層)が広がる。第2層上面から土管の暗渠坑が深さ35cmに及び埋設される。疊層は大きさや色調、粘土の混じり方から第2~4層に分かれ、1~10cm大の円疊層である第2層灰黄色疊層はトレンチ西側へかけて厚さ20cm程度が認められ、その下位はさらに疊の大きな第3層灰色疊層が、その下層は粒度は小さく粘土が混じる第4層灰色疊層が広がる。これら疊層の下位は1mm前後の均一な第5層灰色砂で水分を含むと崩落する軟弱層である。厚さ5cmの第6層灰色粘土を挟んで標高5.58mで円疊を含む締まった砂疊層の第7層灰色疊層が広がる。遺物は出土しなかった。



第36図 乙亥正所在遺跡 調査トレンチ位置図

第2トレンチ(Tr-2) [第36・37図 図版8・9]

東西方向に長軸をもつ $3.2 \times 7.4\text{m}$ の規模をもつトレンチである。耕作土下 $20 \sim 30\text{cm}$ 弱は、礫を僅かに含むシルト第2～7層が厚さ $30 \sim 40\text{cm}$ 程度広がる。第2層上面から竹の暗渠坑が深さ 50cm に及び埋設される。厚さ 5cm 程度の第11層黄灰色粘土を挟んで第8層暗灰黄色砂、以下第9・10層は黄灰色砂礫となる。Tr11の第7層に対応するとみられる第9層黄灰色砂礫はトレンチ東側で上面標高 5.56m 、西側で 5.38m と約 6m 間で 18cm の傾斜が認められる。また第10層は円礫を含むよく締まった砂礫層である。遺物は出土しなかった。

第3トレンチ(Tr-3) [第36・38図 図版9]

東西方向に長軸をもつ $3.1 \times 7.5\text{m}$ の規模のトレンチである。Tr 3の南側に広がる水田は数十cmの段をとってやや小高くなる。耕作土下 15cm 程度で第2層を挟んで水田底土の第3層となる。以下、褐色あるいは黄褐色の沈着のあるシルト第4～9層が 40cm 弱堆積する。以下、瓦質鍋口縁部を含む第10層を除いたところ、第15、17層上面でトレンチ南壁沿いに溝状造構を検出した。深さ 21cm 、溝幅は南壁以南へ広がるため不明である。埋土上層で須恵器片、埋土中より木片を検出している。以下、トレンチ北側で灰色砂を筋状に含む第17層灰黄褐色シルト、第18層褐灰色砂、第19層灰褐色砂、砂礫を含む砂及び砂礫である第20～22層がみられ、以下、黒色かかる第23層褐灰色粘土が厚さ約 50cm 程度と安定的に堆積する。その下層は標高 4.32m で地山(基盤層)と考えられる第24層にぶい黄橙色粘土である。遺物は前述以外に第5層上面付近から土器網片1点が出土している。

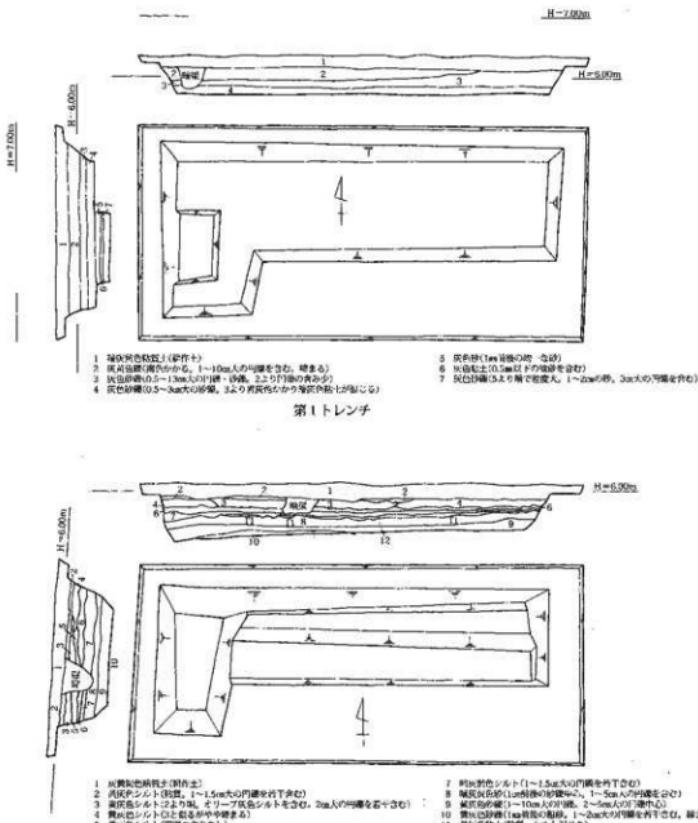
第4トレンチ(Tr-4) [第36・37図 図版9]

東西方向に長軸をもつ $3.2 \times 7.3\text{m}$ の規模のトレンチである。耕作土下 15cm 程度で第2層を挟んで第3層褐灰色粘土上面から角礫で囲まれた暗渠坑が埋設され深さ 30cm に及ぶ。以下、黄灰色の粘土およびシルト層である第4～6層が堆積し、特に第4層は 20cm 弱の厚さがあり瓦質土器片、上師器杯口縁部片、木片を含む。第6層は土師器系切り底の土師器底部、木片を含む。以下、灰白色かかる第7層灰色砂を挟み、黒褐色かかる第8層黄灰色粘土、第9層黒褐色粘土が厚さ 30cm に及ぶ。以下、標高 4.58m で基盤層とみられる灰白色粘土第10～12層を標高 3.48m 地点まで確認した。遺物は第4～6、8層で検出

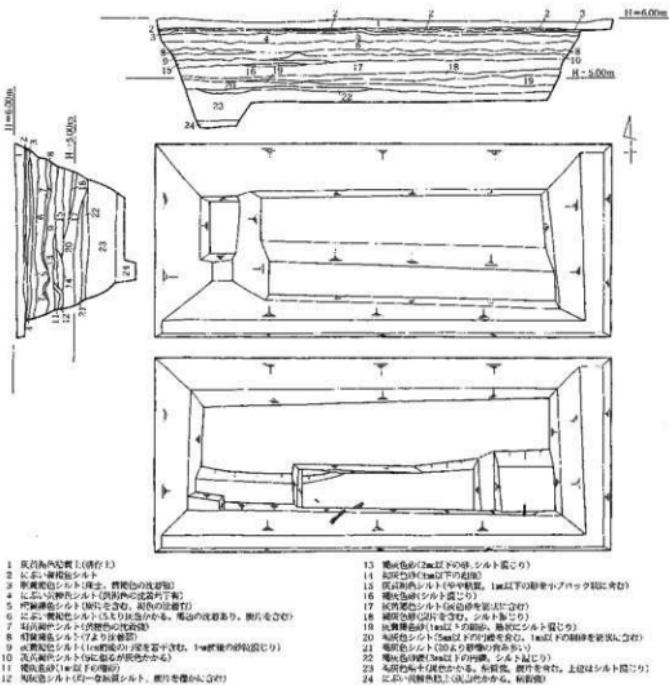
し、第8層では箸状などの僅かな木片である。

小結

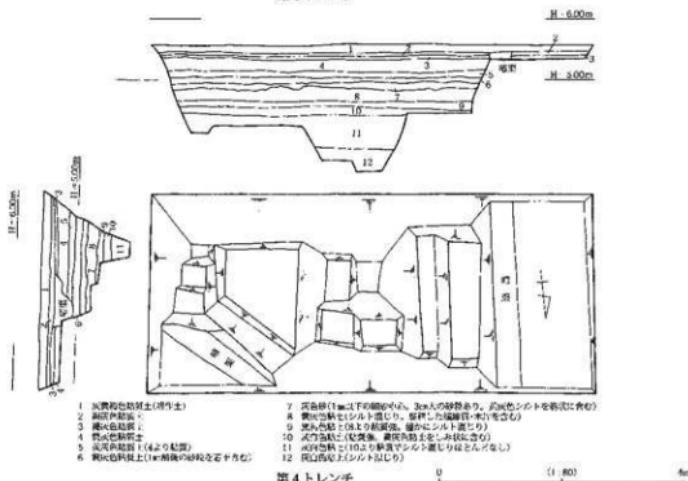
浜村川左岸のTr1とTr2はともに良く似た河原状の堆積が認められ、Tr2で浜村川へ向けて標高を下げる地形が確認された。浜村川を隔てて右岸に位置するTr3、4では円螺層は認められず、Tr3では標高4.32mの灰白色粘土基盤層上に厚く黒褐色粘土が堆積、さらに砂、シルト層が堆積し、標高5.4m第10層は中世の遺物包含層である。さらにその上層で溝状の落ち込みが確認されている。Tr4は標高4.58mで灰白色粘土基盤を確認し、上層の黒褐色粘土層はTr3に比べ薄い堆積であるがその上各層は遺物を含み、標高4.9~5.3mで中世の遺物包含層である。Tr3、4の南側一帯は岡井集落から続く小高くなつた水田であり、その地形の縁辺にTr3、4は位置する。これらのことから、乙亥正地区は浜村川右岸の岡井集落周辺の微高地に遺跡が内包されている可能性が十分にあると考えられる。



第37図 乙亥正所在遺跡 第1・第2トレーニチ実測図



第3トレンチ



第38図 乙亥正所在遺跡 第3・第4トレンチ実測図

第11節 乙亥正大角遺跡

乙亥正大角遺跡はJR浜村駅より南へ1.2km、気高町と鹿野町との境界平野部、鳥取市鹿野町乙亥正に所在する。平野中央を流れる浜村川は調査地手前150mで東寄りへ流路を変え、梶掛集落際で東丘陵沿いを北流する。乙亥正近辺の平野部で遺跡は確認されていないが、浜村川西岸の丘陵裾に弥生時代後期、古墳時代後期の乙亥正屋敷廻遺跡、丘陵上には重山古墳群が展開する。浜村川左岸では岡井集落後背の丘陵上に岡木古墳群、梶掛集落の北丘陵裾に須恵器が出土した梶掛遺跡が分布する。今回の調査は鳥取西道路整備計画に伴い実施したもので、調査Tr1~4は岡井集落北端に広がる丘陵斜面および裾部と集落から続くやや小高い水田に設定した。



第39図 乙亥正大角遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(Tr-1) [第39・40図 図版10]

丘陵西側に段状に開削された平坦面に傾斜に対し平行に長軸を設定した2.0×8.0mのトレンチである。10cm弱の耕作土下は、トレンチ東側の斜面高位から西側低位へ向けた堆積が認められ0.5~5cm大の礫を含む粘質土である。第2、3層は黒褐色粘質土、第5層にびい黄褐色粘質土を挟んで再び黒褐色かかる第7層灰黄褐色粘質土、以下、第10層明黄褐色粘質土となる。トレンチ東側ではさらに細かく分かれ、標高6.74mで岩盤である第13層にびい黄橙色粘質土を確認した。遺物は出土していない。

第2トレンチ(Tr-2) [第39・41図 図版10]

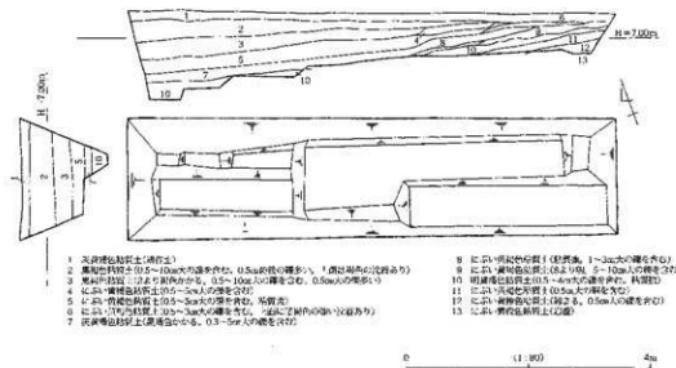
第4トレンチの西約30mの水田部に設定した3.0×7.4mのトレンチである。標高は5.7m前後を測る。地表から20cm前後が耕作土と床土で、その下層は比較的安定した層序が認められる。基盤層は地表下68~78cmに堆積している均一な灰黄褐色粘土層(第10層)とみられ、その下層に灰黄褐色の粘土層(第11、12層)がつづく。第11、12層はいずれも均一な堆積層で、第12層は強粘質の粘土が厚さ80cm以上にわたって堆積している。

遺物は、第7層から器台と思われる土師器片が1点出土した。第4、7、9、10層の上面を精査したが遺構は検出されなかった。

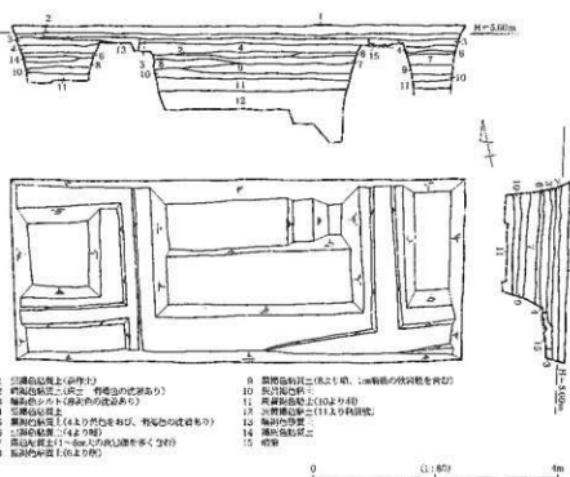
第3トレンチ(T-3) [第39・42・43図 図版10]

第3トレンチは、丘陵中腹よりやや下った斜面を削平して作り出した平坦部に位置する。標高は約14.4mを測る。トレンチの規模は南北7m×東西2mである。

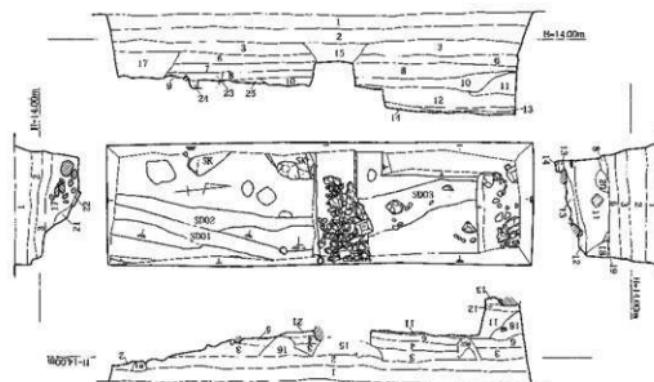
表土は厚さ約20cmの耕作上で、第2層も厚さ約20cmの耕作の影響を受けた土壤である。第3層は土器片を含み、遺物包含層である。トレンチ中央付近で、集石が上面から検出された。集石中から五輪塔火輪部分が出土している。第4～6層も遺物包含層である。トレンチ南部分で、疊を多く含む土坑が第6層上面から検出された。土坑中の疊には五輪塔火輪部分が含まれている。第7層・第8層は混入する疊の多寡・大小によって分層できた。共に遺物包含層である。土坑がトレンチ南部分で第8層上面から検出されている。第10層は上層とは異なり、黒色を帯びた層で、遺物を多く含む。詳細は不明だが、溝状



第40図 乙亥正大角遺跡 第1トレンチ実測図

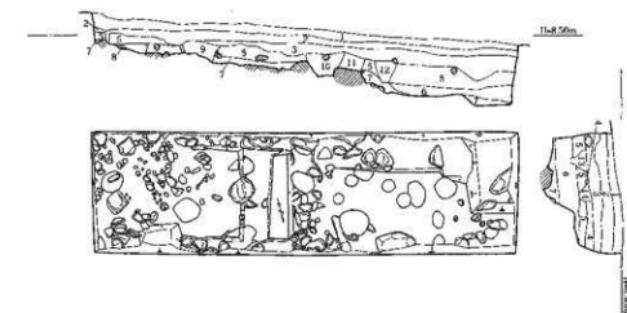


第41図 乙亥正大角遺跡 第2トレンチ実測図



- 1 黄褐色粘土
2 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5cmの大粒化物含む)
3 灰褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5cmの大粒化物含む)
4 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5cmの大粒化物含む)
5 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5cmの大粒化物含む)
6 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5~1cmの大粒の砾含む)
7 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5cmの大粒化物含む)
8 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5cmの大粒化物含む)
9 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5cmの大粒化物含む)
10 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5~1cmの大粒の砾含む)
11 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5~1cmの大粒の砾含む)
12 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5~1cmの大粒の砾含む)
13 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5~1cmの大粒の砾含む)
14 黄褐色粘土(1~2cmの大粒の砾、0.1cmの大粒化物含む。ローム)
15 黄褐色粘土(1~2cmの大粒の砾含む)
16 黄褐色粘土(1~2cmの大粒の砾含む。砂礫混入)
17 黄褐色粘土(砂礫混入)
18 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾を多く含む。植物苔生土)
19 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾を多く含む。植物苔生土)
20 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾を多く含む。植物苔生土)
21 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾を多く含む。植物苔生土)
22 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾を多く含む。植物苔生土)
23 黄褐色粘土(1~2cmの大粒の砾含む。植物苔生土)
24 黄褐色粘土(1~2cmの大粒の砾含む。0.1cmの大粒化物含む。植物苔生土)
25 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾を多く含む。植物苔生土)

第3トレンチ



- 1 黄褐色粘土
2 黄褐色粘土
3 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾を多く含む。植物苔生土)
4 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5cmの大粒化物含む)
5 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5cmの大粒化物含む)
6 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5cmの大粒化物含む)
7 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5cmの大粒化物含む)
8 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5cmの大粒化物含む)
9 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5cmの大粒化物含む)
10 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾を多く含む。よく崩っている)
11 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5cmの大粒化物含む)
12 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5cmの大粒化物含む)
13 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾、0.5cmの大粒化物含む)
14 黄褐色粘土(0.5~10cmの大粒の砾含む)

第4トレンチ

第42図 乙亥正大角遺跡 第3・第4トレンチ実測図

遺構あるいは段状遺構である可能性がある。トレンチ北側に広がる第14層上面でも土坑が検出されている。第21層・第22層は、2条の溝状遺構である。

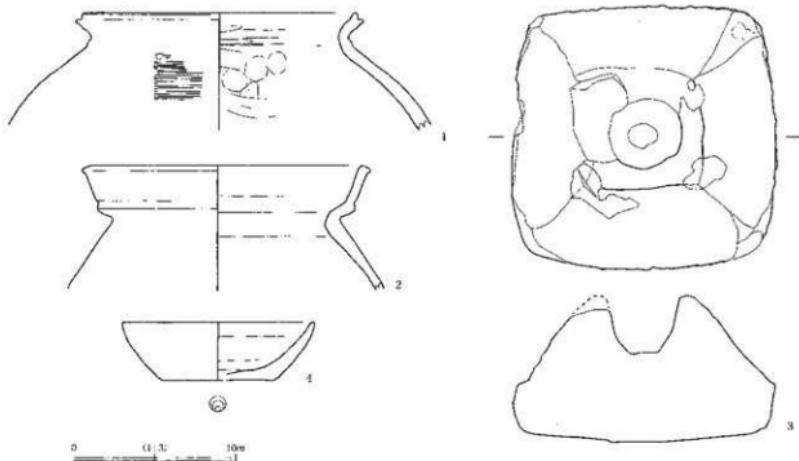
遺物は、コンテナ約2／3箱分出土している。集石及び土坑内から五輪塔の部位が出土している。遺物包含層から出土した遺物のはほとんどは古墳時代前期前半に属する上部器である。第43図1は、弥生時代中期後葉の壺である。2は、古墳時代前期前半の壺である。3は、集石中から出土した五輪塔火輪部である。梵字などは見られない。

第4トレンチ(Tr-4) [第39・42・43図 図版11]

第4トレンチは、第3トレンチ西側の一段下の平坦部にあたる。標高は約8.2m～9mを測る。トレンチの規模は東西7m×南北2mである。表土は厚さ10～20cmの耕作土で、第2層も厚さ10～20cmの耕作の影響を受けた土壌である。第3層は標高の高い東側では見られず、西側に行くにつれて厚く堆積している。第1層・第2層同様耕作の影響を受けている。第5層は黒褐色粘質土で、上面がピットの検出面であるが、各ピットの埋土は色調が異なり、時期差を持つ可能性がある。なお、トレンチ西壁に見られる第4層は地山である第7層に似る。時期は不明である。

遺物は、古墳時代前期前半の土師器、糸切り底の土師器が少量出土している。

第43図4は土師器壺で、底部に糸切り痕が残る。



第43図 乙亥正大角遺跡 第3・第4トレンチ出土遺物実測図

小結

今回の調査は、一般国道9号線(鳥取西道路)改修工事に伴って実施したもので、4本のトレンチを設置して行った。第1、第2トレンチからは遺構は検出されなかったが、第3トレンチでは五輪塔を含む集石遺構が検出され、下層では土坑や溝状遺構または段状遺構と考えられる遺構が検出された。遺物の多くは、古墳時代前期前半に属する上部器である。また、第4トレンチではピット群が検出された。遺物は、古墳時代前期前半や平安時代に属する土器が出土した。第3トレンチ、第4トレンチとともに数時期に亘る遺構が検出された。遺構の詳細な時期や性格は不明であるが、数時期に亘る複合遺跡であると考えられる。

第12節 山手古墳群

山手古墳群は鳥取市河原町山手に所在する。千代川中流域の右岸丘陵のうち、上山手集落から南西へ細長く入り組む狭小な谷の中で最も西側の谷筋に展開する。谷奥には溜池が營まれその下方には圃場整備された段状の水田が連続する。溜池の南東丘陵上には山手古墳群南支群として円墳6基が確認されており複数基で須恵器の出土が知られている。上山手集落の後背丘陵に展開する山手古墳群北支群では、盤龍鏡の出土が伝わる1号墳や径23.5mを測り変形神獣鏡が出土したとされる7号墳など河原町有数の重要な古墳が分布する。今回の調査は可燃物処理施設整備事業に伴い実施したもので、谷奥の溜池東の丘陵斜面、旧果樹園内標高74~84mの尾根筋にTr1、Tr2を、丘陵の尾根上にTr3、Tr4、Tr5を設定した。



第44図 山手古墳群 調査トレンチ位置図

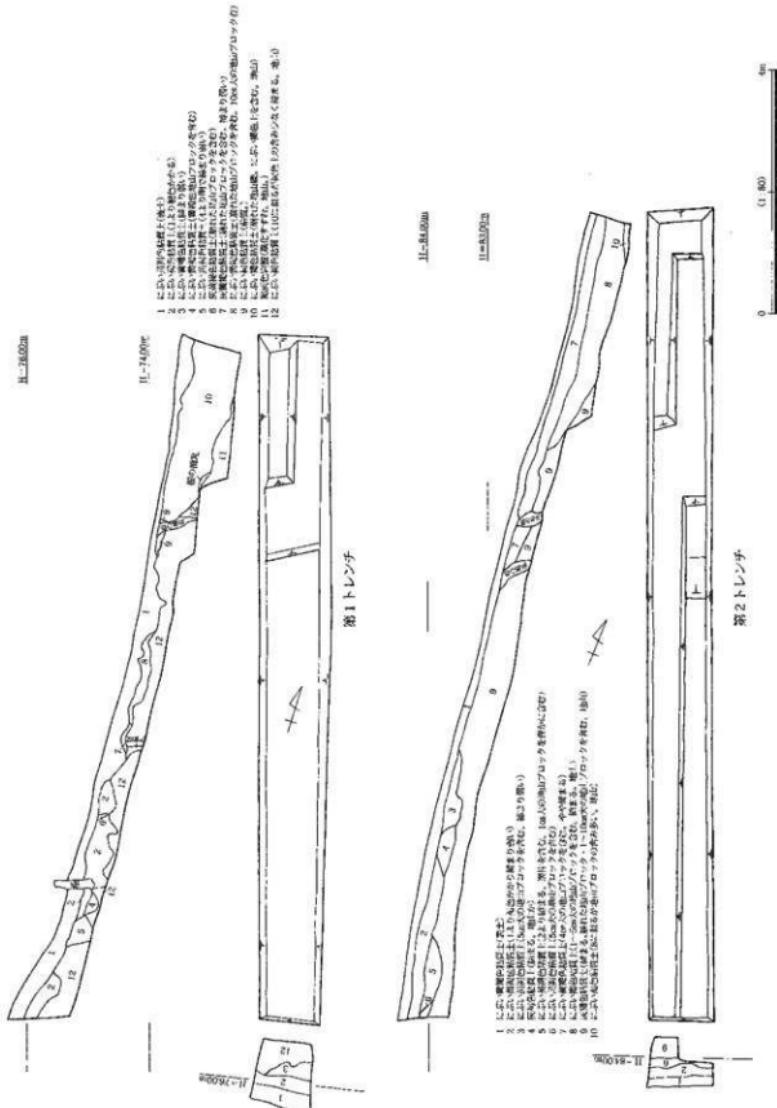
第1トレンチ(Tr-1) [第44・45図 図版11]

溜池東に広がる梨の果樹園内、北西方向へ延びる尾根筋に沿い、古墳の周溝検出を想定して設定した11.2×1.0mの規模をもつトレンチである。耕作土下6~40cm弱は、果樹園耕作に伴う搅乱穴が広がり、さらにその下位は風化のすすむにぶい褐色の地山、褐灰色岩盤となる。古墳周溝など遺構は検出されなかった。遺物は耕作土中より須恵器部片が1点出土している。

第2トレンチ(Tr-2) [第44・45図 図版11]

溜池東に広がる梨の果樹園内、北西方向へ延びる尾根筋に沿いに、古墳の周溝検出を想定して設定した13.3×1.0mの規模をもつトレンチである。Tr1の尾根上位に位置する。耕作土下8~20cmは搅乱状の穴や縫まりの弱いにぶい黄褐色粘質土層(第2、3層)が広がり、その下位はトレンチの上下で地山ブロックを含むにぶい黄褐色粘質土(第5~7層)が観察される。以下はそれぞれ風化のすすむにぶい褐色および灰褐色の地山となる。古墳周溝など遺構は検出されなかった。遺物は耕作土下より須恵器部片が1点出土している。

谷奥の溜池を見下ろす斜面尾根筋に設定したTr1、2は、果樹園の耕作により上部は擾乱を受けており耕作土中より須恵器片が出土した他、古墳の周溝などの遺構はみられなかった。



第45図 山手古墳群 第1・第2トレーンチ実測図

第3トレンチ(Tr-3) [第44・46図 図版11・12]

丘陵の西裾に拓かれた山樹園地の直上で、クヌギ等の雜木が生い茂る尾根の頂部に1.0m×8.0mの東西トレンチを設定した。

基本的な上層の層序は、第1層が層厚約5cmで黒褐色の表土である。第2層は、層厚22cmで周溝と思われる凹地に堆積したにぶい黄褐色土の埋土である。第3層は、層厚5cm～15cmで周溝と思われる凹地に堆積したにぶい黄褐色土の埋土で、土師器片が3点検出された。第4・5層は、築造後早い段階で周溝に堆積した褐色系の埋土である。第6層は、築造後早い段階で堆積した赤褐色の埋土である。検出した周溝は、地山を掘り込んだ幅1.5m、深さ0.2mを測る。第7層は、層厚7cm～15cmでにぶい赤褐色の墳丘盛り土であり、墓壙の検出面である。第8層～第11層は、埋葬主体部に堆積した褐色系の埋土である。

検出された墳丘は、トレンチ内での東西径が3.7mを測り、墳丘は主体部の封土が認められないほど流出しており、周溝面からの比交差は僅かであることから、後世に削平を受けたものと推定される。

埋葬主体部は、検出時の掘り込み面で東西幅1.15m、深さは0.5mを測り、地山を掘り込んだU字形を呈していた。主体部は、木棺直葬と推定されるが、トレンチ内での制約下であることから、明瞭な小口構造の検出には至らなかった。

また、検出された主体部の西側に周溝を検出したが、北方向に延びる周溝と前述の主体部との位置関係からトレンチの西に隣接する高まりを巡るものと推定される。これにより、トレンチの西側に墳丘が所在し、検出された前述の主体部は周溝外の埋葬施設であると思われるが、周溝内で検出した土師器片は細片であったことから、時期の特定には至らなかった。

第4トレンチ(Tr-4) [第44・47図 図版12]

丘陵尾根の頂部に1.0m×6.0mの東西トレンチを設定した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚約5cmでオリーブ黒色の表土である。第2層は、層厚5cm～10cmの灰黄褐色土である。第3層は、層厚10cm～15cmでトレンチ北東側の一部で見られる間層の、灰褐色土である。第4層は、層厚約10cm～15cmでトレンチ北東側の一部に見られる灰褐色の間層で、土坑の検出面である。第5層は、層厚約10cmでトレンチ北東側の一部に見られる灰黄褐色土である。第6層は、土坑(SK01)内に堆積した灰黄褐色で粘質の炭を含んだ埋土である。第7層は、褐灰色の地山である。

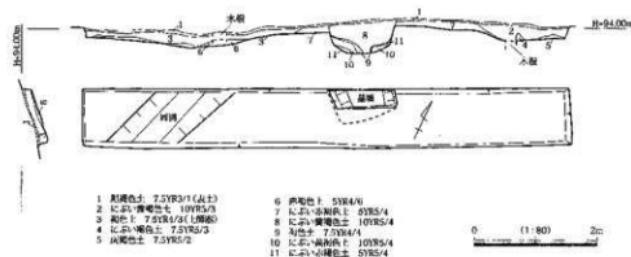
土坑(SK01)は、第7層の地山面を掘り込んだ痕跡が検出され、半截して形状等の確認を行った。平面形は、堀込み面が50cm×75cmの楕円で、深さは30cmで逆台形状を呈して比較的浅く、用途は不明であり、時期を特定する遺物等は検出されなかつた。

第5トレンチ(Tr-5) [第44・48図 図版12・13]

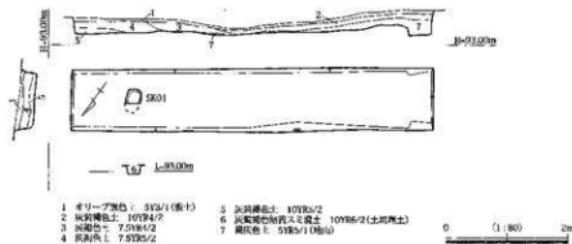
丘陵尾根が緩斜面となり、墳丘の高まりが際だつ裾部に1.0m×6.0mの南北トレンチを設定した。

基本的な上層の層序は、第1層が層厚約5cmで黄褐色の表土である。第2層は、トレンチ北側で検出された周溝に堆積した層厚25cm～10cmの褐灰色土である。第3層は、周溝の肩部に薄く堆積したにぶい赤褐色土である。第4層は、層厚約10cm程度の周溝内堆積土である。第5層は、トレンチ南側の一部に堆積し、須恵器片が1点検出された層厚8cmの灰褐色土である。第6層は、古墳築造後に周溝内へ堆積した層厚約5cmの灰褐色土である。第7層は、層厚約10cm程度で灰褐色の墳丘盛土と思われる。第8層は、層厚25cmで黄褐色の炭化物が混入する粘質土で、墳丘の盛土である。第9層は、層厚約15cmで墓域外に堆積する灰褐色土である。第10層は、層厚約10cmでにぶい赤褐色の墳丘堆積土である。第11層は、地山のにぶい赤褐色土である。第12層は、地山のにぶい赤褐色のブロック混土である。

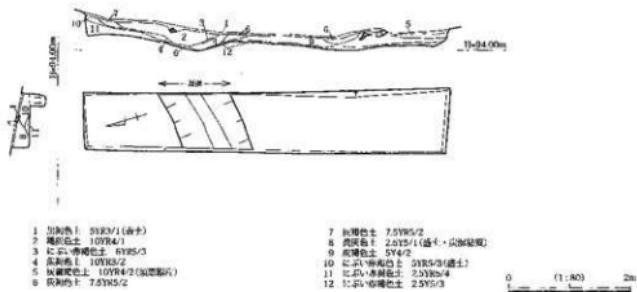
検出した周溝は、地山を掘り込んだ幅1.5m、深さ0.3mを測る。墓域内では遺物が検出されなかつたことから築造時期の特定には至らなかつた。



第46図 山手古墳群 第3トレンチ実測図



第47図 山手古墳群 第4トレンチ実測図



第48図 山手古墳群 第5トレンチ実測図

小結

山手古墳群の調査は、可燃物処理施設整備事業予定地の丘陵尾根上の2箇所のトレンチで墳墓を確認し、1箇所のトレンチで上坑を検出した。時期を特定する遺物を検出することができなかったが、確認された墳丘は、比較的地表上の高まりも低く、削平若しくは流出土が著しいことから、今回のトレンチ設定地以外に墳墓等の所在する可能性が高く、丘陵全体に注視すべきであろう。

第13節 福井所在遺跡

福井所在遺跡は、湖山池に注ぐ福井川に沿って細長く開けた田園地帯に所在し、毛無山から北に派生する東丘陵の尾根上に55基の古墳と10基の横穴墓で構成される岩本古墳群が展開している。

また、西丘陵でも39基の古墳が確認されていることから、溝沼周辺に展開することで知られている東郷池湖畔の古墳群等と類似点が多い。

今回の発掘調査は、一般国道鳥取西道路の新設工事に伴い実施した試掘調査で、道路建設に係る計画路線内に6箇所の試掘調査トレンチを設定し、垂直的に遺構、遺物の有無を確認した。



第49図 福井所在遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(T-1) [第49・50・56図 図版13]

西丘陵の裾で峡谷が段状に区画された水田に3.0m×8.0mの東西トレンチを設定し、地表下1.4mまで掘り下げたが、地表下約0.4mで河川の氾濫と堆積される大型の厚い砂礫層を確認した。

土層の基本的な層序は、上から第1層が幅厚10cm~15cmの暗オリーブ褐色の耕作土で、摩耗の著しい土師器片と須恵器片が散布している。第2層は、トレンチ東の一部に見られる灰色土で、無遺物ある。

第3層は、層厚15cm～50cmの灰色土で、土師器片と須恵器片、磁器片を検出したが、破断面に摩耗が見られ、上方からの二次堆積の様相を呈している。第4層は、砾石と思われる大型の自然石間に堆積した層厚約20cmの褐色灰色土で、小礫を多量に含んでいることから、濁流によって堆積したものと思われる。第5層は、層厚10cm～35cmの灰色土で、土師器片と須恵器片を検出したが、破断面に著しい摩耗が見られることから、二次堆積の様相を呈している。第6層は、大型の石を覆うように堆積した小礫層で、濁流によって堆積したものと思われる。第7層は、大型疊の後ろに堆積した褐色灰色の粒砂である。第8層は、疊層の下位を確認するためにトレンチ東側の一部を特に掘り下げたもので、層厚40cm～50cmの暗灰黄色の疊を含む粘質土である。第9層は、古灰色の砂疊土である。

遺構は検出されなかつたが、第3・5層で摩耗が著しい二次堆積と推定される上師器と須恵器の細片を数点検出したが、比較的浅い地表下で河床と思われる疊層に達した。7は第3層で検出された上師器の口縁で、外面ともにヨコナデを施す古墳時代前期と思われる。

第2トレンチ(TT-2)【第49・51・56図 図版13・14】

西丘陵からの支尾根が突出した先端部の水田で、段状に区画された水田を跨いで3.0m×6.0mの東西トレンチを設定し、地表下1.8mまで掘り下げて遺構、遺物の出土状況等の確認を行った。

土層の基本的な層序は、上から第1層が層厚約15cmのにぶい黄色の耕作土である。第2層は、上段の水田畦畔と下段の水田耕作土が一帯になった灰黄色土である。第3層は、層厚10cm～30cmの灰色土で、暗渠排水の埋土と同一層であることから、造成時のものと思われる。第4層は、層厚5cm～40cmで灰色の無遺物層で、暗渠排水溝の掘り下げ時に斬られている。第5層は、層厚5cm～30cmの灰色の粘質土で、土師器片と須恵器片を包含するが、土師器の破断面に摩耗が見られることから、上方からの二次堆積の様相を呈している。第6層は、層厚5cm～25cmの灰色粘質土で、土師器片と須恵器片を包含するが、土師器の破断面に摩耗が見られることから、上方からの二次堆積の様相を呈している。

第7層は、層厚約20cmの灰色粘質土で、土師器片と須恵器片を包含する。第8層は、層厚15cm～35cmの灰色粘質土で、土師器片と須恵器片を包含する。第9層は、トレンチの南東側の一部に見られる層厚10cm～20cmの灰色土で、土師器片を包含する。第10層は、トレンチ北西側の一部に見られる層厚約10cmで、灰色の粘質土中に土師器片、須恵器片を多く包含する。第11層は、層厚5cm～20cmで灰色の粘質土に小礫を含み、弥生時代の土器・石器を包含する。第12層は、トレンチの一部に見られる間層の灰色砂である。第13層は、トレンチ南東側に厚く堆積した灰色土で、拳大の河原石を含む無遺物層である。第14層は、トレンチの一部に見られる間層の灰色砂である。第15層は、枯れ葉等が薄く堆積した黒褐色で無遺物の植物遺体層である。第16層は、青灰色土の硬く締まった軟岩疊を含む地山である。

第5層～第10層で古墳時代中期～後期の上師器と須恵器を検出し、第11層で弥生時代後期の土器と石包丁が検出された。

遺構は検出されなかつたが、第5・6層で二次堆積と推定される包含層を検出した。第7層～第10層では、土師器と須恵器の包含層、第11層で弥生時代後期と思われる包含層を検出した。

第11層で検出された1は、肩部以下を欠く壺で、外傾する復元口径は18.4cmを測る。口縁端部は丸くおさめて、肩曲部の稜は下方へわずかに突出し、口縁外面に櫛描平行沈線を施す。肩部内面はヘラケズリ後右方向へヨコナデを施し、外面は貝殻腹縁による押し引き沈線、頸部内面から口縁端部へのヘラケズリ後ミガキを施す。口縁端部から肩部にかけての外面上に煤が厚く付着する。2は、体部下半以下を欠く壺で、外傾する復元口径は16.5cmを測る。口縁端部は丸くおさめて、肩曲部の稜は下方へわずかに突出し体部は肩が張る。口縁外面に櫛描平行沈線後ヘラミガキを施す。外面ともにヘラミガキを施し外面部頸部はヨコナデ、肩部は櫛描沈線後軽いナデを施す。口縁端部から体部にかけての外面上に煤が厚く付着する。3は、頸部以下を欠く壺で、外傾する復元口径は16.9cmを測る。口縁端部は丸くおさめて、肩曲部の稜は水平方向へわずかに突出する。口縁内外面ともにヨコナデ、頸部内面はナデを施し、胴部へ

至る肩曲部に右方向へのヘラケズリを施す。4は、壺の肩部で、頸部と体部が一部残る。内面はヘラケズリ後軽いナデを施し、外面は頸部にナデ、肩部に8条の平行沈を施した後連続刺突文を施し、更に5条の櫛描波状文を施す。体部は縦方向のハケメを施す。5は、頸部以下を欠く壺で、やや外傾し、復元口径は21.1cmを測る。口縁端部は丸くおさめて、肩曲部の稜は下方へわずかに突出する。内外面ともにヨコナデを施し内面頸部にナデ、外面頸部に煤が厚く付着する。6は、底部から一部の体部を残して上部を欠く円筒形の壺で、復元底径は11.9cmを測る。底部がややすばまりタガ状の貼り付け凸帯を持ち、上位に向けて開く。内面はナデ、外面は凸帯の貼り付け後ヨコナデを施し、底部端部は凹線後にヨコナデを施す。外部は煤又は黒斑が見られる。12は、外反しながら低く聞く脚で、脚端部の口径は4.95cmを測る。内面と脚柱部はヘラミガキが施され、台部はナデを施す。18は、大型の磨製の石包丁で約2/3強を遺存する。石材は、暗灰色の鉢状板状安山岩で全面に研磨が施され、背部も刃部も緩やかな弧形の曲線を描き、器体の形状は長楕円形を呈するものである。背側寄に紐通し2孔を両面穿孔し、穿孔部の紐すれば孔の背部に認められ、刃部を研磨により作り出している。これらは、第11層から検出した土器から弥生時代後期の所産と思われる。

第7層～第10層で検出されたもの10は、大型の複合口縁壺形土器である。口縁が大きく開き、復元口径27.0を測り、口唇部にヨコ崩毛目を残し、内外面ともにヨコナデを施す。8は、布留式の壺で口唇部内面を肥厚させるもので、復元口径17.6cmを測り、口縁内外面ともにヨコナデを施し、外面に煤が付着する。秋里遺跡十師器編年のⅢ期以降と思われる。9は高环形土器で赤褐色を呈する軟質の土器で、復元口径16.0cmを測り内面に放射状の暗文を施す。11は、口径8.5cmを測る須恵器の壺身で、口縁に立ち上がりを有し、内外面ともにヨコナデを施す。14は、球形状の胴部を持つ壺で、最大胴径は9.7cmを測り、内面にナデを施し、外面の肩部にヨコナデ、肩部の下位は左方向のヘラケズリを施す。肩部のやや下に1.5cmの円孔を外面から穿っている。これらは、古墳時代中期から後期のものと思われる。

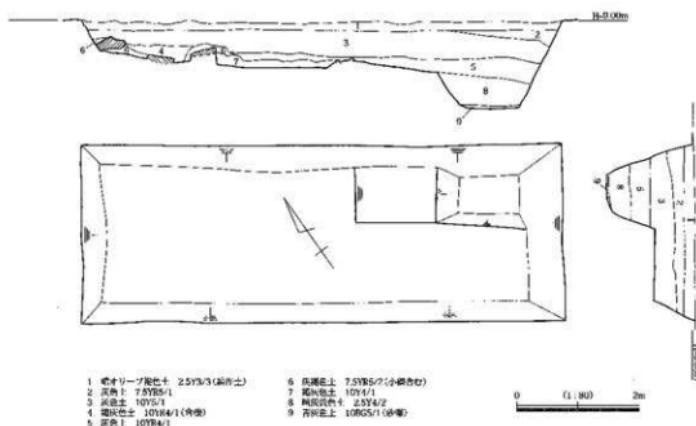
第5層で検出された瓦質鍋15は、口縁が外反して立ち上がり端部が内反し、口唇部が肥厚して口縁中央部が窪み内外面ともにナデが施されている。16は、底部糸切りの土師器皿で底径6.4cm、内外面ともにヨコナデによる成形を施す。いずれも鎌倉時代から室町時代の所産と思われる。

第3トレンチ(Tr-3) [第49・52・56図 図版14]

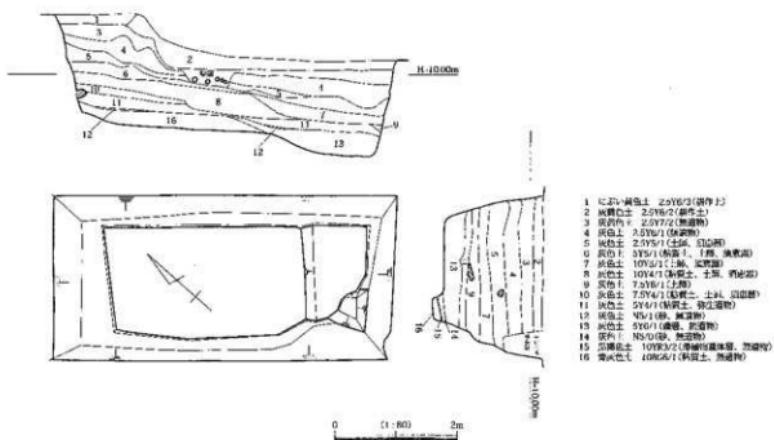
第1トレンチで摩耗の著しい土師器片、須恵器片を検出し、河床と思われる礫層が検出されたことから、谷地形が形成されている上方の水田に3.0m×7.0mの南北トレンチを設定し、地表下1.5mまで掘り下げて遺構、遺物の出土状況等の確認を行った。

土層の基本的な層序は、上から第1層が層厚約20cmで灰オリーブ色の耕作土である。第2層は、層厚5cm～10cmの浅黄色の客土で無遺物である。第3層は、トレンチの北側に施された黄灰色の客土である。第4層は、トレンチの北側に施された暗灰黄色の客土である。第5層は、トレンチのほぼ全面に施された灰色の客土で、ビニール袋が混入していた。第6層は、トレンチの東の一部に見られる層厚約25cmの黄灰色である。第7層は、層厚20cm～30cmの灰色土で、須恵器片1点を検出した。第8層は、トレンチの東の一部に見られる層厚約10cmで間層の灰色粘質土である。第9層は、トレンチの中程に見られる褐色の粒砂層である。第10層は、トレンチの西側に見られる層厚約10cmの黒褐色土である。第11層は、トレンチの東側に見られる層厚10cm～40cmの灰色粘質土である。第12層は、トレンチの西側の一部に見られるにぶい褐色の砂礫層である。第13層は、トレンチの東側の一部に見られる層厚10cm～35cmの灰色粘質土で、層中から須恵器片を1点検出した。第14層は、層厚約30cmの青灰色粘質土で下位は青灰色の軟岩層で覆われていた。

トレンチの下流域の第1トレンチで見られた河床状の堆積状況とは異なり、灰色系の粘質土が堆積しており、2点の須恵器を検出した。



第50図 福井所在遺跡 第1トレンチ実測図



第51図 福井所在遺跡 第2トレンチ実測図

遺構は検出されなかったが、第7・13層の灰色系の粘質土中で2点の須恵器片が検出された。13は、須恵器の皿で体部上部が欠損し、底径5.7cmを測る。底部断面が逆梯状を呈する台から大きく開いて立ち上がり、底面に回転糸切り痕が残る。平安時代のものと思われる。

第4トレンチ(Tr-4) [第49・53図 図版14]

岩本古墳群が展開する丘陵の西裾に開けた谷地形で、落差のある水田を跨いで4.0m×6.0mの南北トレンチを設定し、地表下1.5mまで掘り下げて遺構、遺物の出土状況等の確認を行った。

第1層は、層厚5cm～15cmで暗灰黄色の耕作土である。第2層は、層厚約20cmで黄褐色の客土である。第3層は、層厚15cm～30cmで黄灰色の客土である。第4層は、トレンチ南の一部に見られる灰黄色の客土である。第5層は、トレンチ南の一部に見られる層厚約5cmで、暗灰黄色の客土である。第6層は、トレンチ南の一部に見られる黄褐色の客土である。第7層は、トレンチ南の一部に見られる暗灰黄色の客土である。第8層は、トレンチ南の一部に見られる黄褐色の客土である。第9層は、トレンチ南の一部に見られる褐色の客土である。第10層は、トレンチ南の一部に見られる灰黄色の客土である。第11層は、トレンチ南の一部に見られる灰黄褐色の客土である。第12層は、トレンチ南の一部に見られるオリーブ褐色の客土である。第13層は、トレンチ南の一部に見られる黒褐色の客土である。第14層は、層厚15cm～30cmで灰色の砂を多く含む粘質土である。第15層は、層厚10cm～30cmで灰色の粘質土である。第16層は、トレンチ南の一部に見られる層厚約10cmの間層で、砂礫を含む灰色土である。第17層は、層厚10cm～40cmの灰色粘質土で、層中から2点の須恵器片を検出した。第18層は、層厚5cm～20cmの灰色砂礫土である。第19層は、層厚5cm～15cmで灰色の粘質土である。第20層は、層厚約25cmの砂粒を含む青灰色土で、この下位は青灰色の礫層であった。

上層は、厚い客土と灰色系の粘質土が堆積しており、2点の須恵器片を検出したが、当該トレンチの奥部には、過去に人の生活していた拠点が存在する可能性は低いと思われる。

第5トレンチ(Tr-5) [第49・54図 図版14]

道路建設に係る計画路線上の遺構、遺物の状況を詳細に把握するために福井川の左岸に接する水田に3.0m×7.0mの南北トレンチを設定し、地表下1.35mまで掘り下げ、更に一部を0.9m掘り下げて遺構、遺物の出土状況等の確認を行った。

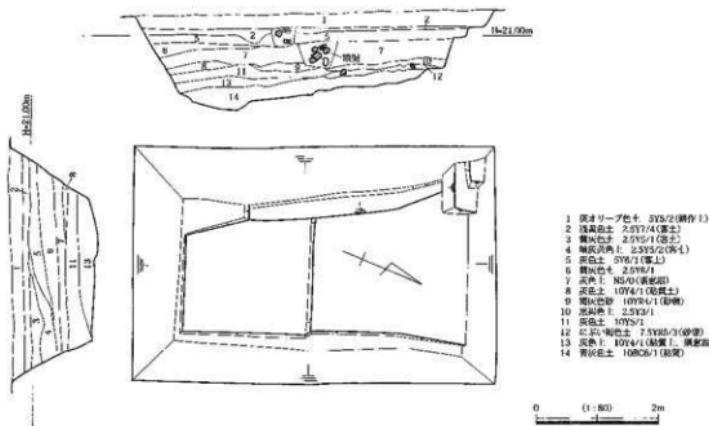
第1層は、層厚約15cmで灰黄褐色の耕作土である。第2層は、層厚75cm～90cmで圃場整備に伴い厚く施された灰色の客土である。第3層は、層厚15cm～25cmで山床土と推定される灰色土である。第4層は、トレンチ中央部に見られる間層で、層厚約5cmの灰オリーブ色砂である。第5層は、トレンチ南側の一部に所在する層厚約10cmの灰色の真砂土である。第6層は、トレンチ中央部に見られる間層で、層厚約5cmの灰色の粘質土である。第7層は、層厚5cm～15cmで小礫を含んだ灰色土である。第8層は、層厚5cm～15cmで灰オリーブ色の粘質土で、層中に水性植物遺体が多く混在している。第9層は、トレンチ南側の一部に所在する層厚5cm～15cmのオリーブ灰色の粒砂である。第10層は、層厚10cm～20cmで緑灰色の粘質土である。第11層は、層厚約10cmでオリーブ灰色の粘質土である。第12層は、層厚約20cmで小礫を含む緑灰色の砂層である。第13層は、層厚約20cmの灰色の粘質土である。

上層は、圃場整備による客土が厚く施されており、トレンチ内では遺構、遺物ともに検出されなかつたが、第8層に水性植物遺体を多く含むことで、第9層から下位が湿地であったと推定され、過去に人の生活する環境であった可能性は低いと思われる。

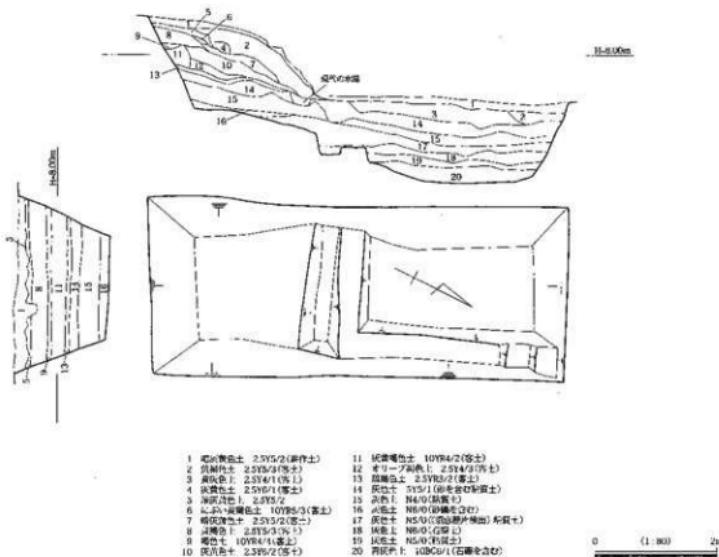
第6トレンチ(Tr-6) [第49・53・56図 図版14・15]

道路建設に係る計画路線上の遺構、遺物の状況を詳細に把握するために福井川の右岸に接する水田に3.0m×7.0mの南北トレンチを設定した。調査地は、第5トレンチで厚く施されていた客土が予測されたことから、上層の客土を重機によって除去した後、地表下1.2mまで掘り下げ、更に一部を0.9m掘り下げて遺構、遺物の出土状況等の確認を行った。

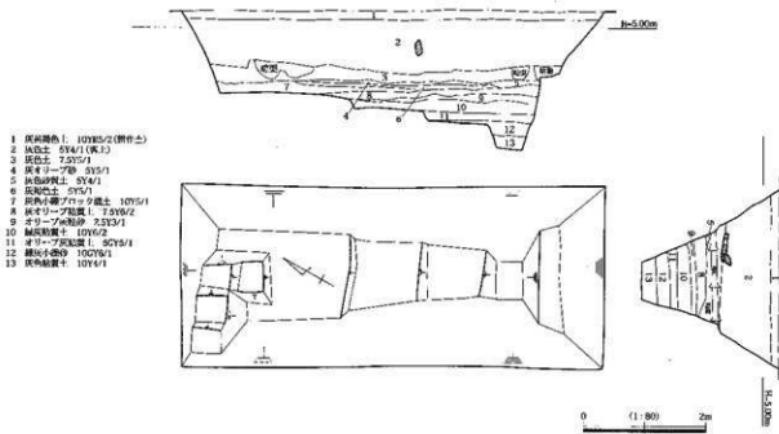
第1層は、層厚約15cmで黄灰色の耕作土である。第2層は、層厚40cm～50cmで圃場整備に伴い厚く施された灰色の客土である。第3層は、層厚8cm～20cmで圃場整備に伴い施された緑灰色の客土である。第4層は、層厚25cm～50cmで灰色の粘質土が厚く堆積しており、層中の底面から糸切り痕の残る土師器



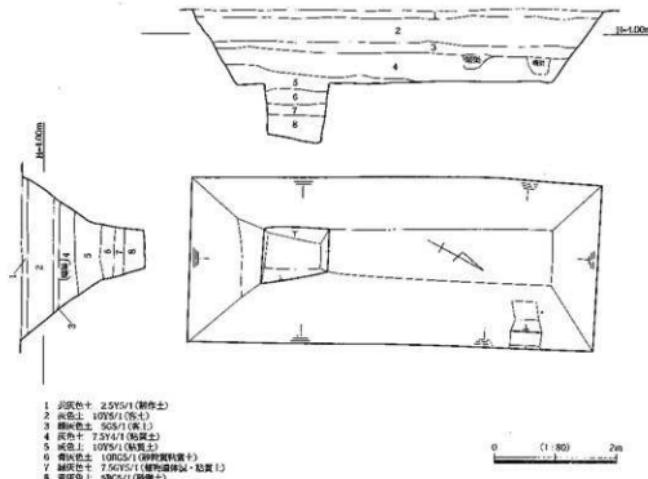
第52図 福井所在遺跡 第3トレンチ実測図



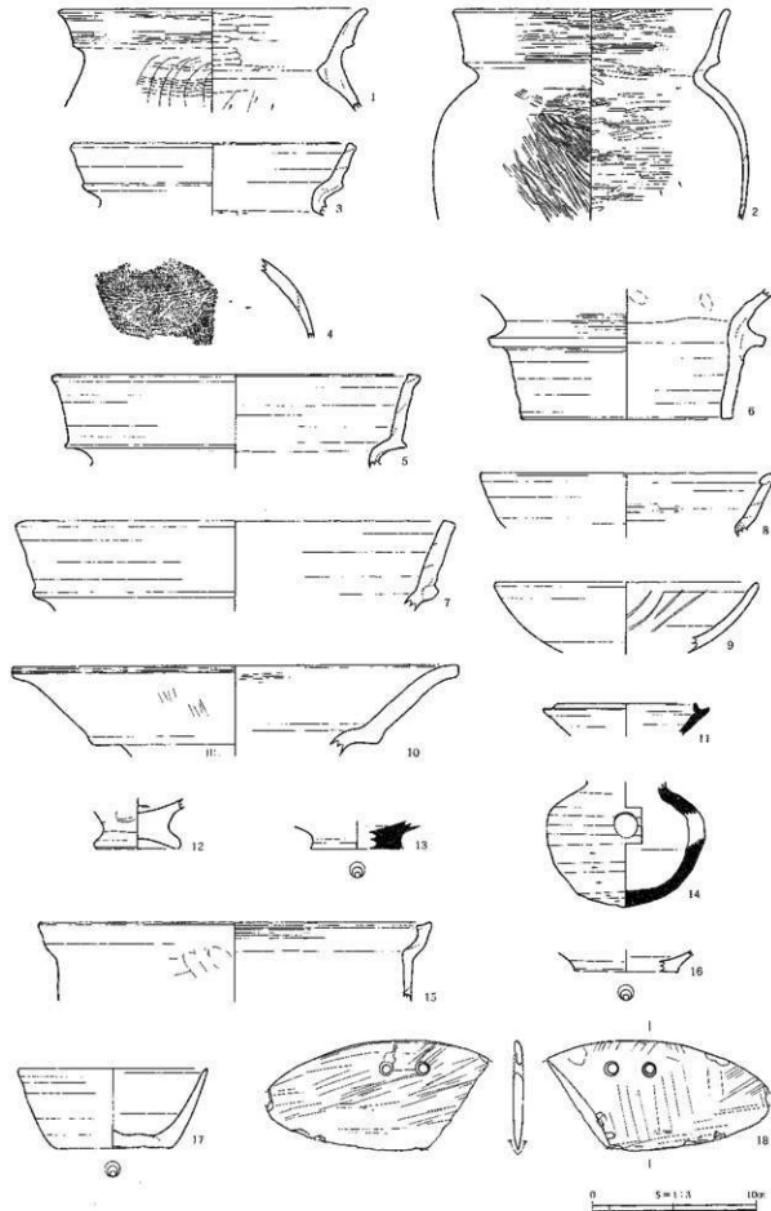
第53図 福井所在遺跡 第4トレンチ実測図



第54図 福井所在遺跡 第5トレンチ実測図



第55図 福井所在遺跡 第6トレンチ実測図



第56図 福井所在遺跡 出土遺物実測図

片1点が検出された。第5層は、層厚約30cmで灰色の粘質土である。第6層は、層厚約25cmで青灰色の砂粒を含む粘質土である。第7層は、層厚約20cmで水性植物遺体が混入する緑灰色粘質土である。第8層は、層厚約45cmで青灰色の砂礫混土である。

遺構は検出されなかつたが、第5層底面で糸切り泥の残る土器が検出された。17は、無高台の杯で、口径が比較的広く外面底部に回転糸切りが残り、内外面ともに回転ナデが施されている。口径11.60cm、底径7.20cm、器高4.95cmを測り、平安時代の所産と思われる。

小結

当福井所在遺跡の調査区では、第1トレンチで厚く堆積した砂礫が確認され、少量の遺物を検出したが、河床状の二次堆積を想定せるものであった。

第2トレンチでは、遺構の検出には至らなかつたが、舌状の丘陵先端部という立地で多くの遺物が検出されたことで、比較的近い場所に弥生時代以降の生活拠点が存在すると思われる。更に当該地形が北東に向けてやや傾斜していることから、トレンチの南側に開けた谷方向からの包含層が延びるものと考えられ、弥生時代から古墳時代のはば安定した堆積状況を示していた。

第3トレンチでは、第2トレンチの上流部であることから、河床状に堆積した砂礫層が想定されたが、粘質系のシルト層がほぼ安定した堆積を示しており、遺構、遺物とともに検出されなかつた。第4トレンチは、東丘陵の麓に所在する狭浅の谷部で、粘質系のシルト層がほぼ安定した堆積を示していたが、遺構、遺物とともに検出されなかつた。第5・6トレンチは、湿原若しくは湖沼に生育する水性植物層が確認された。

この道路建設計画路線上の調査結果から、舌状に突出した尾根の先端部で弥生時代～古墳時代の良好な遺物包含層が検出されたことから、詳細な調査が実施された場合は、遺構が確認される可能性も考えられる。

第14節 東柱見遺跡

東柱見遺跡は、鳥取市東柱見の森林公園「とっとり出会いの森」に隣接し、北東は、鳥取県立布勢運動公園に近接した狭い谷間に立地している。隣接する柱見遺跡では、平成5年から行われた道路改築工事に先行する発掘調査で、縄文時代前期から晩期に至る遺物が出土し、多量の土器等とともに国内最大級の長さを持つ縄文時代中期の丸木舟二艘が出土している。

今回の発掘調査は、PLB無線基地局設置工事に先行する発掘調査で、出会いの森に隣接する対象地の畠地に1カ所のトレンチを設定した。

【第1トレンチ(T-1)】(第57・58図 図版15)

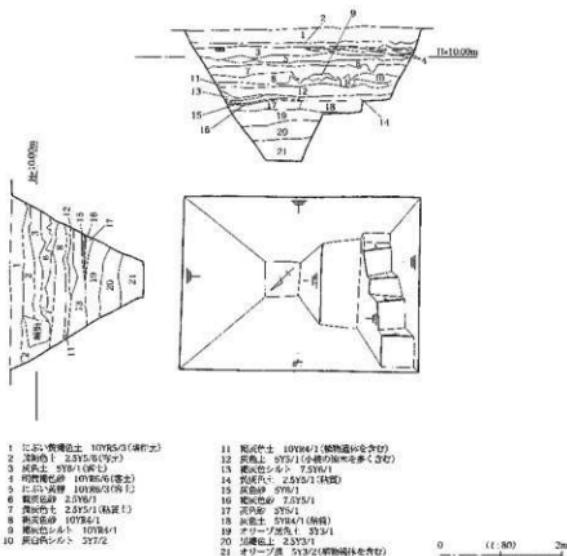
現況がとっとり出会いの森駐車場の北に隣接する畠地に設定した4.0m×3.0mの南北トレンチである。

基本的な層序は、上から第1層が層厚約20cmの耕作土である。第2層は、層厚5cm～15cmの黄褐色の砂を含んだ客土で暗渠排水溝の掘り込み面でもある。第3層は、層厚10cm～20cmの灰色の客土である。

第4層は、第3層の客土中に薄く施された客土である。第5層は、トレンチ東側の一部に施された層厚5cm～10cm程度のにぶい黄橙の客土で、層中にビニールの断片が見られたことから、第5層より上層は、圃場整備事業時の客土と思われる。第6層は、層厚5cm～10cmの黄灰色砂で、無遺物層である。第7層は、層厚10cm～20cm程度の黄灰色粘質土の無遺物層である。第8層は、トレンチ北側の一部で認められ、層厚5cm～20cmの褐灰色砂の無遺物層である。第9層は、層厚5cm程度の薄層でトレンチの東側の一部認められる褐灰色のシルトの無遺物層である。第10層は、層厚5cm～15cmでトレンチ東側の一部で認められる灰色シルトの無遺物層である。第11層は、層厚5cm程度で植物遺体を含む褐灰色層である。第12層は、層厚10cm～20cmでトレンチ東側に認められ、小枝の落木を含んだ灰色土である。第13層



第57図 東桂見遺跡 調査トレンチ位置図



第58図 東桂見遺跡 第1トレンチ実測図

は、トレンチ北側の一部に認められ、層厚10cm～20cmの褐色シルトで無遺物層である。第14層は、トレンチ南側の一部に認められ、層厚5cm～10cmの黄灰色粘質土層で、無遺物層である。第15層は、トレンチ北東側の一部に認められる層厚5cm程度の灰色砂で無遺物層である。第16層は、トレンチ北東側の一部に認められる薄厚の褐色砂で無遺物である。第17層は、トレンチ北東側の一部に認められ、層厚15cm程度の水が染み出る灰色砂で、無遺物層である。第18層は、トレンチ南側の一部に見られる層厚15cm程度の灰色粘質土で、層中に植物遺体等が多く混在していた。第19層は、層厚15cm～20cmのオリーブ黒色土で、無遺物層である。第20層は、層厚20cm～30cmの黒褐色土で無遺物層である。第21層は、35cm程度まで掘り下げたが、層中に多量の植物遺体を含んだオリーブ黒色土の無遺物層であった。

小結

今回の発掘調査は、PLB無線基地局設置工事に伴い実施したもので、工事施工計画区域内に1箇所の調査トレンチを設定し垂直的に埋蔵文化財の有無を確認した。単発的に設定したトレンチであったが、谷の上方から土砂が安定的に流入を繰り返しており、下流域での発掘調査例に反して遺構、遺物ともに検出はされなかった。

今回の発掘調査で、周辺の埋蔵文化財の状況を全て把握したものとはいえないが、両翼の丘陵が迫った谷のくびれに相当する当該地の結果であることから、上流では過去に人が生活していた拠点が存在する可能性は低いと思われる。

第15節 橋本古墳

橋本38号墳は、鳥取市橋本に所在し、鳥取市営サッカー場（バードスタジアム）の南東約300mで、橋本集落の後背地に位置する。当該集落の南背後は、標高64.7mの丘陵から派生する稜線上に54基の古墳が確認されている。

調査地は、丘陵の麓に位置し市内で唯一の家形石棺が掘えられ、古墳時代後期と推定されている橋本38号墳の隣接地で、当該石室の封土、天井石、側壁の上部は散逸しているが、下部の側壁が遺存しており、その配石位置と形状から玄室長3.95m、同幅2.2mで左片袖式の横穴式石室で、羨道部の規模は不明瞭であるが、玄室部に砂岩質の家形石棺が安置されている。

又、この家形石棺は蓋の一部に欠損部が見られるが、当時の市内で唯一の家形石棺であること、切石



第59図 橋本古墳 調査トレンチ位置図

敷床面等の特殊技術工法見られる等の理由から、昭和51年12月1日付けで市の史跡となっている。

今回の発掘調査は、鳥取県県上整備局による「橋本地区急傾斜地崩壊対策工事」に先行する発掘調査で、工事予定区域が橋本38号墳の施設に与える影響を確認するもので、旧畠地の荒廃地に1カ所のトレーンチを設定し、垂直的に調査を行った。

第1トレーンチ(打下) [第59・60図 図版15]

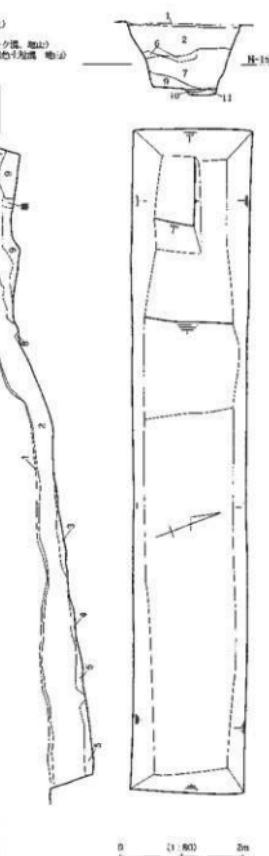
「橋本地区急傾斜地崩壊対策工事」による掘削予定地で橋本古墳の隣地に2.0m×11.0mの東西トレーンチを設定し、垂直的に調査を行った。

土層の基本的な層序は、上から第1層が層厚約4cmの表土である。第2層は、層厚30cm～60cmの厚く施された暗灰黄色の客土で、層中からビニール等の現代製品が確認された。第3層は、地山の一部の表面に施された層厚約10cmの灰オリーブ色の客土である。第4層は、地山上面の一部の表面に施された層厚約6cmのオリーブ黄色の客土である。第5層は、地山上面の一部の表面に施された層厚約10cmの暗灰黄色の客土である。第6層は、トレーンチ西側の一部に認められる層厚10cm～30cmのにぶい黄褐色の客土で、須恵器片が1点検出された。第7層は、トレーンチ西側の一部に認められる層厚20cm～80cmのにぶい黄橙色で粘質の無造物層である。

小結

今回の調査は、橋本地区急傾斜地崩壊対策工事に伴い実施したもので、工事施工予定地に1箇所の調査トレーンチを設定し垂直的に埋蔵文化財の有無を確認したが、客土が厚く施されていた。トレーンチ西側の一部で須恵器片が1点検出された。しかし、細部であることから時期の特定には至らなかった。単発的に設定したトレーンチではあったが、橋本38号墳に近接することから墓域を区画する造構の検出が想定されたものの、発掘調査トレーンチ内では大規模な削平と客土が施されており、造構等の所在は確認できなかつた。

- 1 当利色土 2.5Y3/1(表土)
- 2 脱炭灰土 2.5Y4/2(表土)
- 3 ピンクー色土 1.5Y3/1(表土)
- 4 ピンクー色土 1.5Y3/1(表土)
- 5 灰色土 2.5Y3/2(表土)
- 6 にぶい青灰土 1.0Y5/4(表土)
- 7 にぶい灰褐色土 1.0Y5/4(表土)
- 8 灰褐色土 7.5Y7/8(表土)
- 9 鮎青色土 1.0Y8/7(高含炭ブロック層、地山)
- 10 にぶい灰褐色土 1.0Y8/6/3(地化泥色土堆積 地山)
- 11 にぶい黄褐色土 1.0Y8/5/4(地山)



第60図 橋本古墳 第1トレーンチ実測図

第16節 埋田所在遺跡

曳田所在遺跡は、鳥取市河原町曳田地内で、鳥取県の三大河川のひとつである千代川左岸の段丘上の畠地内に所在し、市立河原中学校の北西約300mに位置している。

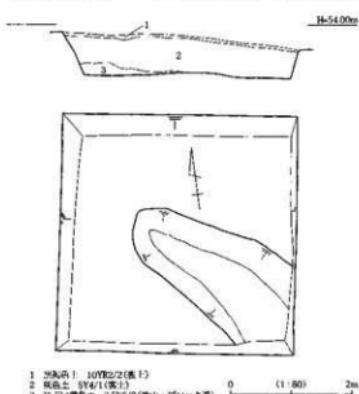
今回の調査は、中国電力(株)による高圧送電線の鉄塔移設設計による試掘調査であり、現況は開けた谷地形で、畠地と荒廃地に敷設される予定であり、鉄塔が建設される4脚の予定地の内、1箇所に調査トレンチを設定した。



第61図 埋田所在遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(T-1) [第61・62図 国版15・16]

鉄塔の移設地は、南東に開けた谷地形の畠地で、4脚のうち北側の1脚が建設される予定に地に4.0m × 4.0mの方形トレンチを設定し、地表下0.7mまで掘り下げた。



第62図 埋田所在遺跡 第1トレンチ実測図

土層の基本的な層序は、上から第1層が層厚約5cmの黒褐色の耕作土である。第2層は、層厚50cm～40cmの灰色を呈する層で、施された客土で、層中からPPバンドの断片、ナイロン系の布等の現代の生活用品が混入していた。第3層は、粒状の黄色ブロックを含むふじ黄色の地山であった。

小結

当該地は南丘陵の裾に位置することから、多量の堆積土が予想されたが、地表下約50cmで地山に達し、地山の上面は波状の起伏と鋭角的な掘削痕が認められ、地山の上層部は、客土が厚く施されており、遺構、遺物は検出されなかった。

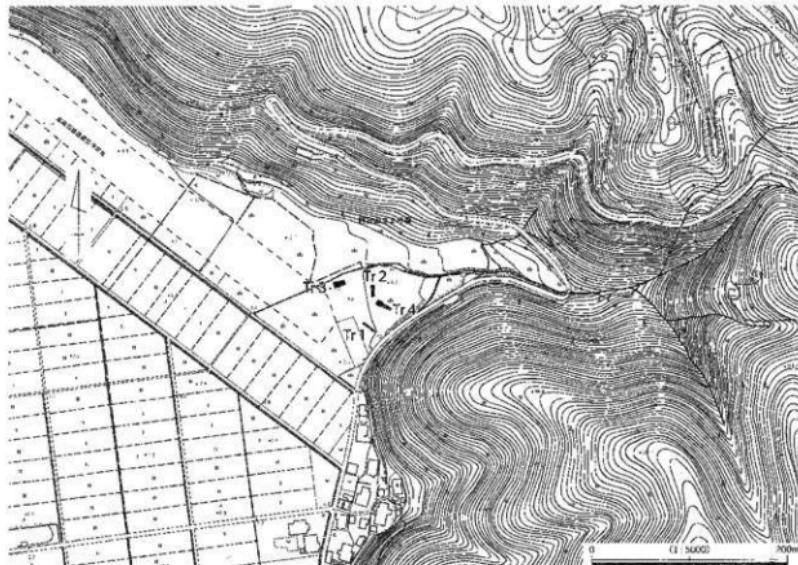
このことから当該地は、地山を削平して、大規模な盛り土の畠地造成が行われたものと思われる。

第17節 青谷横木遺跡

青谷横木遺跡は、一般国道青谷羽合道路の青谷インターの南東に広がり、鳥取市青谷町の東を日本海に注ぐ2級河川である日置川下流域の右岸に沿って所在している。また、青谷町の西側には2級河川である勝部川が流れ、両河川の合流付近には弥生時代中期を主体とし、弥生の博物館と称されるほど多様な出土品で知られ、国の史跡に指定されている「青谷上寺地遺跡」が所在している。

遺跡の南東端では、地元の人達によって「長尾の峰」と呼ばれる丘陵が鉤状に屈曲した谷地形となり、前面は小さな扇状地を形成し、一筋の小川が下流域の水田を潤している。また、この谷を登り詰めて気高町会下集落へ通ずる「市道奥崎会下線」の起点ともなっている。

今回の調査は、一般国道鳥取西道路新設工事に伴う道路建設の計画路線内で、過年度に実施している21箇所の試掘トレンチ調査に追加するものであり、青谷横木遺跡の南東端に4箇所のトレンチを追加し、垂直的に遺構・遺物包の有無を確認した。また、今回の試掘トレンチ調査では、過去の調査結果から遺跡の上面に礫を含む客土が厚く堆積していることが推定され、事前に各トレンチで重機による客土の掘削作業が行われていた。

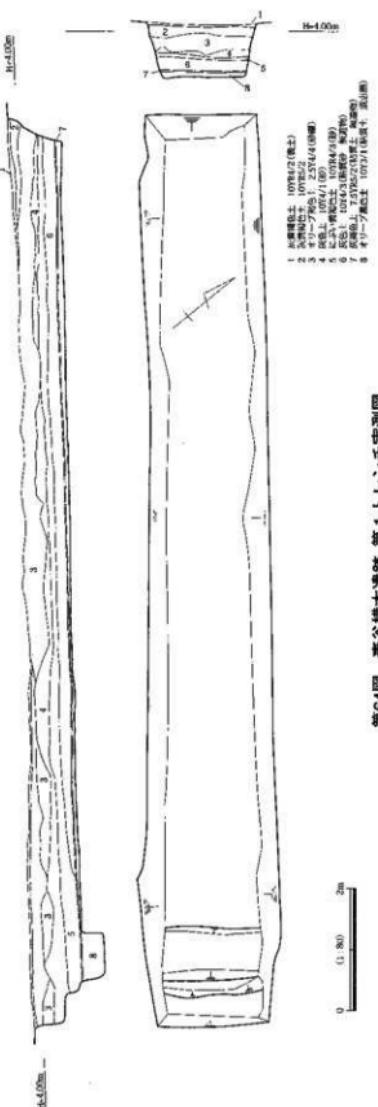


第63図 青谷横木遺跡 調査トレンチ位置図

第1トレンチ(Tr-1) [第63・64図 図版16]

第1トレンチは、市道奥崎会下線に隣接している畝に2.0m×15.0mの北西～南東に向けてトレンチを設定し、地表下1.2mまで掘り下げて、地表下約0.8mで河川の氾濫と推定される大型の長い砂礫層を確認した。

土層の基本的な層序は、上から第1層が層厚6cmの灰黄褐色の耕作土である。第2層は、トレンチの両端部に見られる層厚20cm～30cmの灰黄褐色を呈する客土で、無遺物である。第3層は、層厚20cm～30cmのオリーブ褐色の礫を多く含む客土で、無遺物である。第4層は、層厚6cm～35cmの灰色砂で、客土と思われる無遺物である。第5層は、層厚8cm～35cmのにびい灰褐色砂で、無遺物である。第6層は、層厚



第64図 青谷横木遺跡 第1トレンチ実測図

15cm～20cmの灰色粘質砂で、無遺物である。第7層は、層厚2cm程度の灰褐色土で、各トレンチにも帶状に見られる近世の粘質土である。第8層は、礫層の上面に見られる10cm程度の薄いオリーブ黒色を呈する粘質土で、中世の須恵器を包含している。

第2層から第4層が圃場整備によると思われる客土で、遺跡の南東端が丘陵裾にあたることから小高くなっていることもあり、比較的浅い地表下で遺物包含層に達するが、構造は検出されなかった。

調査トレンチ南東端で下位を確認するため一部を特に掘り下げたが礫層が厚く堆積していた。

■第2トレンチ(Tr-2)【第63・65・69図 図版16】

谷地形の中央寄りの畑に3.0m×12.0mの南北トレンチを設定し、地表下0.5mまで掘り下げたが、鋭角的な稜が残る礫層に阻まれた。そこで、更なる下位を確認するため、一部を重機による掘り下げを行い、地表下1.8mまで掘り下げて確認を行った。

土層の基本的な層序は、上から第1層が層厚約5cmの灰褐色の耕作土である。第2層は、層厚5cm～20cmの黒褐色の客土である。第3層は、層厚10cm～25cmの暗褐色を呈する客土で、ビニールの袋片が混在していた。第4層はトレンチの北側に所在し、多量の礫が混在する層厚約30cm黄灰色土中に須恵器片、土製支脚の断片を検出した。第5層は、層厚トレンチの中央部に見られる層厚約20cm程度の褐灰色土で小礫が多く含むが、無遺物層である。第6層は、丘陵の斜面向けて急傾斜して層厚80cm～120cmで、山礫を多量に含むオリーブ黒色土中に須恵器片を包含する。第7層は、層厚20cm～40cmの礫層で灰色の粘質土が礫の隙間に見られるが、遺物は検出されなかった。第8層は、層厚40cm以上の黒色粘質土で、植物遺体を包含する無遺物層である。

多量の礫に混在して須恵器等の遺物が確認されたが、何れも二次的に包含されているものと考えられ、近隣の上流から流入したものと推定される。8・9は、土製支脚の突起部である。同一個体のものであるかどうかは定かでないが、山陰を中心に広く中国地方に分布するコップを伏せたような円筒台形の体部から、二股に分かれる大型の突起が上部に付くと思われる。突起に残る体部の内面は中空の痕跡が残り、ヘラケズリ後にナデを施し、指頭痕が随所に見られ、使用後の痕跡として突起の付け根の

上面は煤が多量に付着している。

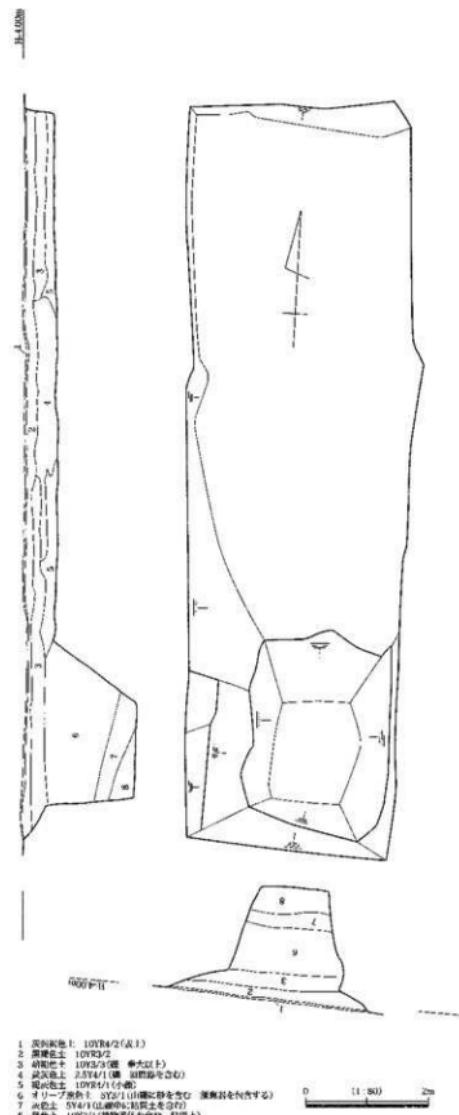
出土上器から平安時代の所産と思われる。

第3トレンチ(T-3) [第63・66・67・69]

図版17・18)

市道奥崎会下線に架かる滝尻橋の下流に沿って、西側6.5m・東側4.5m×東西12.0mの不正形トレンチを重機で設定し、地表下1.5mまで掘り下げて遺構、遺物の出土状況等の確認を行った。

土層の基本的な層序は、上から第1層が層厚約5cm~30cmで北側に広く堆積する黒褐色の耕作土である。第2層は、層厚5cm~30cmの黒褐色の客土で圃場整備時のものと思われる。第3層は、層厚25cm~80cmで西側に広く施された黄灰色の客土で圃場整備時のものと思われる。第4層は、層厚約20cmの砂粒を含む暗オリーブ褐色の間層で無遺物である。第5層は、層厚約10cmの砂粒を含む暗灰黄色の間層で、無遺物である。第6層は、トレンチの中程から東方に堆積する層厚5cm~25cmの黒褐色シルトで、層中から近世の簪が検出された。第7層は、乱石積基壇の検出面で、東の基壇上面に堆積する層厚15cm~20cmの砂を含む灰褐色で無遺物である。第8層は、基壇の西側に堆積し、層厚10cm~30cmで砂粒を含んだ灰黄褐色土である。第9層は、基壇西側の背後で、層厚20cm程度の筆先状に堆積していることから、基壇上の堆積土が流失時に基壇石に巻き込まれ、二次的に堆積したものと思われる暗灰黄砂土である。第10層は、層厚5cm~25cmの基壇の西側に見られる層厚約10cmの黒褐色土で、須恵器片を包含する。第11層は、トレンチ西側の一部に見られる無遺物で、層厚10cm~20cmの灰色シルトである。第12層は、基壇の西側の一部に見られる無遺物で層厚5cmの灰色粘質土層である。第13層は、各トレンチで検出されている薄い帶状に堆積する灰赤粘質土で、基壇西の層中からシロ皮で縫われた縄の断片が検出された。第14層は、トレンチ南側の基壇下部の西側で、層厚約30



第65図 青谷横木遺跡 第2トレンチ実測図

cmの筆先状に堆積する砂礫を含む暗灰黄色粘質土で無遺物である。第15層は、基壇内部に地業が施された盛土の一部と推定される層厚約20cmで、須恵器片を包含する黄灰色の礫混土である。第16層は、基壇の下部から西に延び、須恵器片を包含する層厚5cm～20cmの灰色の粘質土である。第17層は、基壇内部に地業が施された盛土の一部と推定され、早く締まった層厚5cm～20cmのぶい赤褐色土で無遺物である。第18層は、直徑約20cmの柱根3本の検出面で、基壇内部の地業が施された盛土中に須恵器片を包含し、拳大の礫を多量に含み堅く締まった層厚約20cm～40cmの暗灰黄色土で、層下位の礫の多くは層上位の礫に比して摩耗が著しい。第19層は、基壇の西側に広がる厚い礫の層で、扁平のものが多く、灰色の粘質土混入している。第20層は、トレンチ南側の基壇下部を中心に深く掘り下げて、下位の状況を確認したもので、層厚約15cmの砂礫を含む灰色粘質土で無遺物である。第21層は、層厚約15cmの砂礫を含む灰色粘質土で、弥生時代前期の土器が検出された遺物包含層である。第22層は、層厚35cm以上の灰色シルトで、弥生土器の遺物包含層である。

1・2は、第22層から出土した弥生土器で、同一個体の可能性もあるが、如意形の口縁部を呈する甕で、復元口径は29.2cmを測る。口縁端部に一定間隔の刻み目を施し、口縁下に3条のヘラ描沈線が巡る。外面は綻ないし斜め方向にハケ目を施した後にヘラによる3条の沈線文を施している。口縁端部には粘土貼り付け痕が残り、ヨコナデを施している。内面は口縁部にヨコナデを施し、ナデの指頭痕が見られる。3は、断面形が卵形の粘土紐を貼り付けて口縁部を形成するもので、口縁端部に刻み穴帯を施し内外面ともにヨコナデを施す。

出土土器から弥生時代前期の所産と思われる。

10は、第13層から出土した繩の断片である。材はシユロ皮で、手捲りによる径0.5cm程度に纏われている。

共伴する遺物から、平安期の所産と思われる。

基壇

第7層で検出された基壇は、基壇化粧として自然石を積み上げた乱石積基壇と呼ばれるもので、基壇の西側端部の一部を検出した。全体の規模を確認したものではないが、トレンチ中央部に僅容誇ったであろう基壇は、重機による客土の除去作業で掘削され、トレンチの壁面で確認できる程度の遺存状態であった。従って、トレンチの両端部で確認できる範囲の調査となつた。この条件下で事実確認を列举するとのとおりとなる。

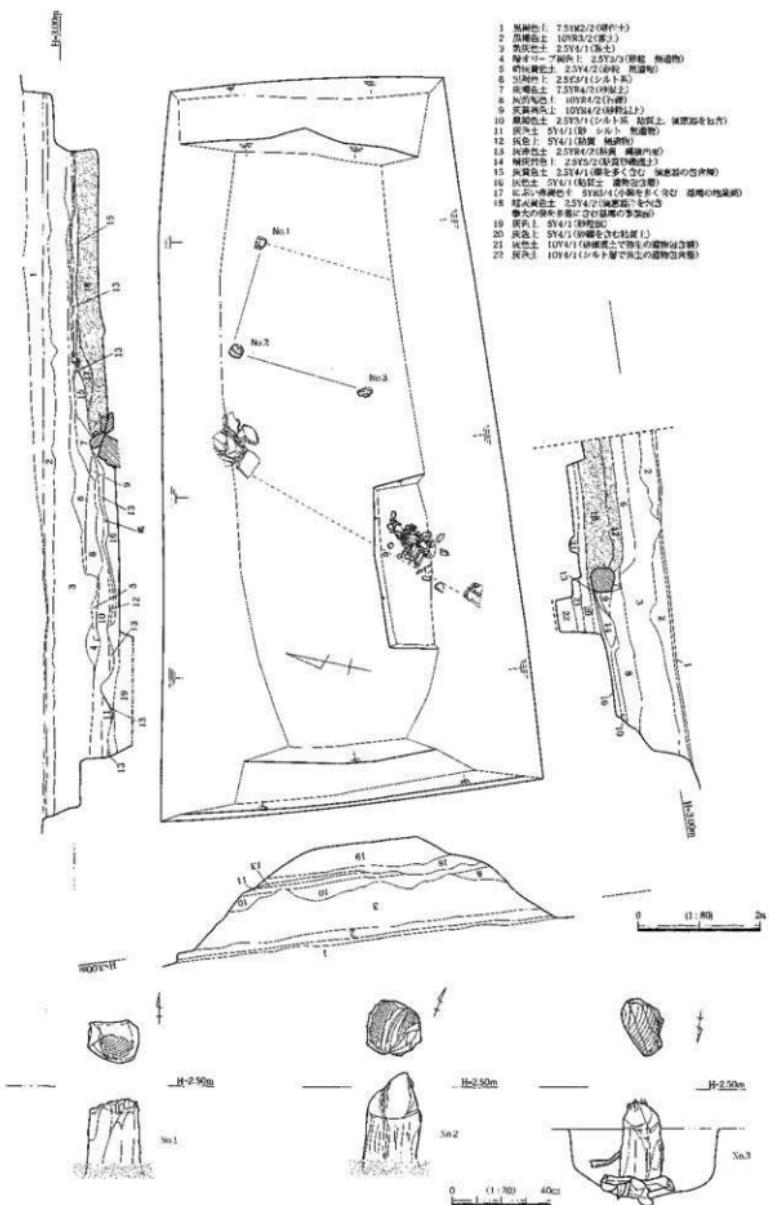
トレンチ内で検出された基壇端部は、0.8m程度で残存する双方の端部を結ぶと、N-18.5°-Eをとる。基壇を構築する基礎工事の痕跡は確認できない。基壇内部は、礫砂が混在する粘質土を敷き詰めた地業が施されている。基壇上面には、柱等を据えた礎石等は検出していない。基壇上面及びその周辺で、瓦が検出されていないことから、建物が仮に所在していたとしても瓦葺ではない。基壇外側に建物の屋根から雨落溝は確認できない。

以上のことから基壇上に建物が存在していた痕跡は確認できなかった。

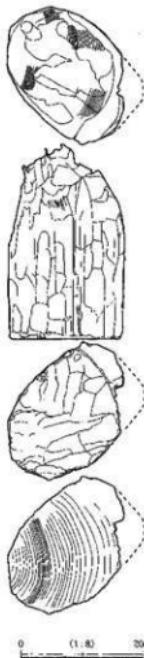
柱根

柱根は、基壇内部に施された地業面の第18層中で、直交する掘立柱建物と推定される3本の柱根を検出した。桁行きが何れの方向に延びるかは確定できないが、規模を示す柱間は、柱(№1)と柱(№2)の柱間は芯々で1.90mを測り、柱(№2)と柱(№3)の柱間は芯々で2.35mを測る。柱(№2)と柱(№3)の柱間が長いことから桁行き方向とすると、建物の軸は、N-3.5°-Eをとる。

柱根樹種は、何れも杉材で、年輪観察から大木を四分割に製材した木取りが行われており、無数の成形鑿痕が残る。成形は粗雑で不定形あるが、大きく9面体に面取りが施され、残存する頂部は脆弱状態に劣っている。柱根(№1)は、17cm～20cmの梢円形で残存長25cmを確認している。柱根(№2)は、約24cmのほぼ円形で残存長36cmを確認している。柱根(№3)は唯一完掘して取り上げを行つたもので、礫層



第66図 青谷横木遺跡 第3トレンチ実測図



第67図 青谷横木遺跡 第3トレンチ検出柱根(No.3)実測図
による接合痕が残る。5は、端部を貼り付け、端部をつまみ出しておらず、底径5.4cmを測る。底部外面に回転糸切痕を残し、内面ともにヨコナデを施す。7は、須恵器の坏身で底部から上部が欠損しており、底径の復元口径は、8.6cmを測る。「ハ」の字形に開く高台を中心より貼り付けるもので、底面のヘラ切り後内外面ともにナデ調整が施されている。出土上器から奈良から平安時代の所産と思われる。

小結

今回の「青谷横木遺跡」の発掘調査では、市道奥崎会下線に隣接するトレンチで角礫を多量に含んだ褐色系の層から、奈良・平安時代の土師器片と須恵器片を検出したが、遺構等を作ったものではなく、二次的に堆積したものと思われた。

谷地形を下って水田部に達する直前の第3トレンチでは、共伴する土器から平安期のものと思われる乱石積基壇1基とその基壇内面の下位で直交する掘立柱建物の柱根3本を検出したが、トレンチ壁断面に柱根方が認められない。基壇内部の地業上面から柱根底部までの高差が著しく、基壇を掘り下げて掘立柱を据えるには深すぎること。基壇面の方位と柱根の方位は、双方共にほぼ南北方向に推移しているが、僅かながら差違が見られる等のことから、基壇の築造と掘立柱建物は若干の時期差もって地業が施されていた可能性があると思われる。従って、掘立柱建物が何らかの理由により放棄された後に、同じ場所に基壇がほぼ同じ方位をもって築造されたものと思われ、同じ場所でなければならなかった建物

を掘り込んだ柱根方は直径約60cmの隅丸方形を呈し、小礫が混入する青灰色の埋土が施されており、深さ27cmの鉢状を呈している。壙方の底面は、拳大の角礫を十数個詰め込んだ栗石上に柱が据えられていた。柱根は17cm~24cmの楕円形で残存長31cmを測り、底面には切断時の鋭利な駆逐痕が無数に認められる。

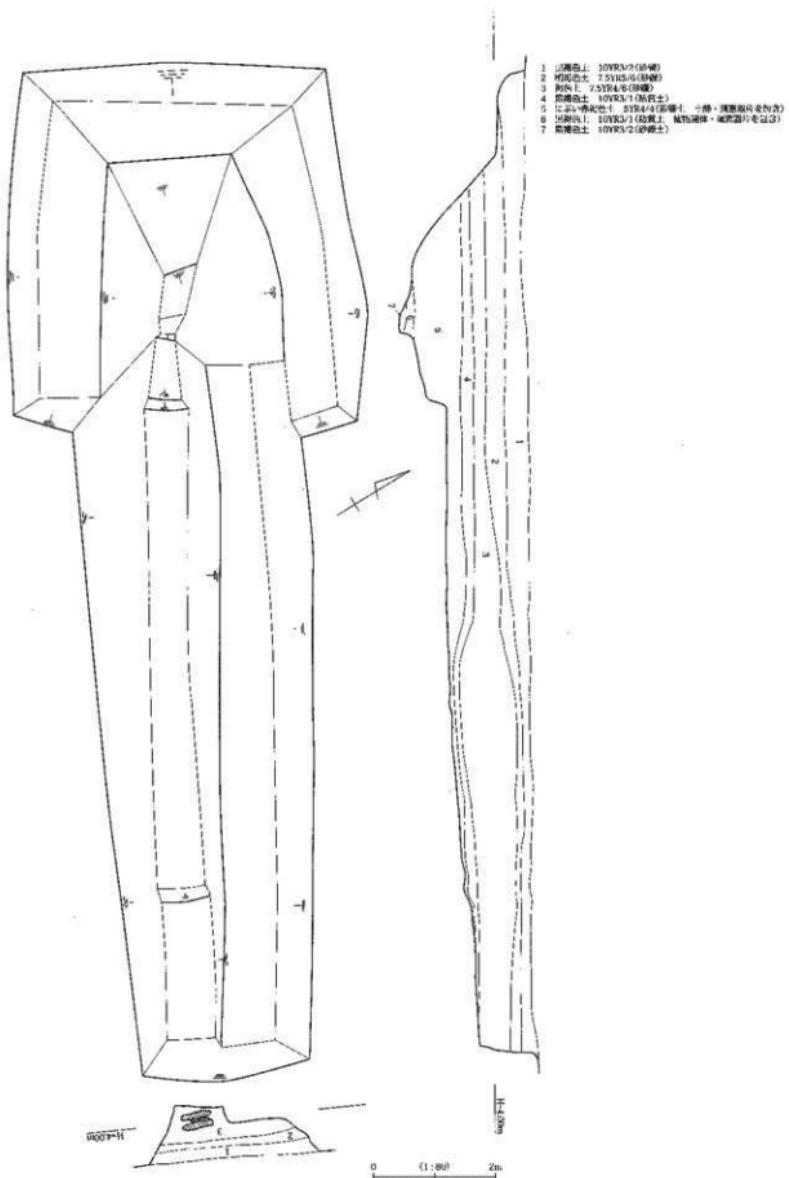
客土の下位は、ほぼ安定した層中に基壇、掘立柱建物の柱根を検出し、最下層部で弥生時代前期の遺物包含層を検出した。

第4トレンチ(1丁-4) [第63・68・69図 図版18]

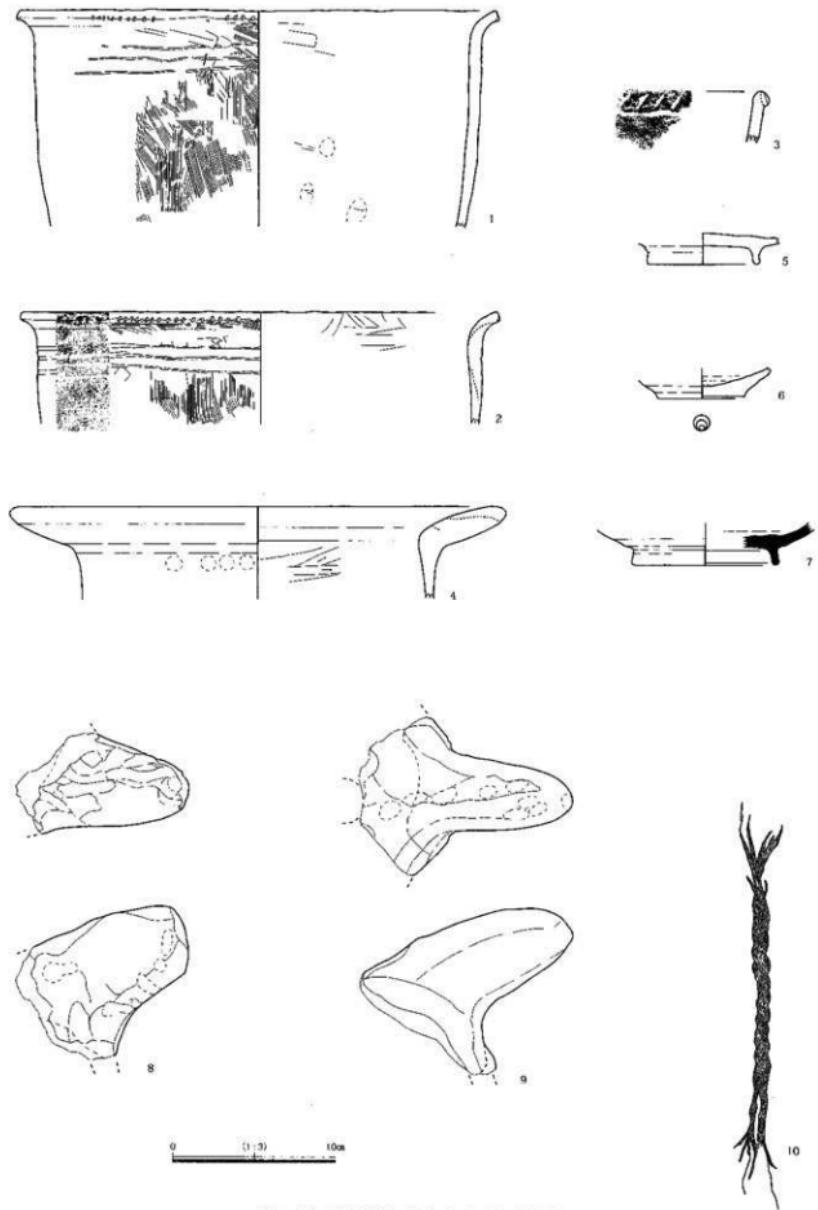
第4トレンチは、市道奥崎会下線に隣接している畑で、第1トレンチを設定した畑地のから更に高所畑地に3.5m×18.0mの東西トレンチを設定し、地表下約1.0mで河川の氾濫と推定される大型の厚い砂礫層を確認し、更に地表下2.0mまで掘り下げて遺構、遺物確認調査を行った。

土層の基本的な層序は、上から第1層が層厚25cm~40cmの砂礫を含む黒褐色の耕作土である。第2層は、層厚10cm~35cmの砂礫を含む明褐色土である。第3層は、層厚20cm~40cmの砂礫を含む褐色土である。第4層は、層厚10cm~20cmの薄い黒褐色の粘質土で、層中に土師器片、須恵器片を含む。第5層は、層厚約80cmの礫を含むに赤褐色土である。第6層は、層厚約15cmの黒褐色の粘質土で、植物遺体を含む層中に須恵器片を含む。第7層は層厚15cm以上で砂礫を含む黒褐色土の無遺物層である。

多量の礫に混在して須恵器等の遺物が確認されたが、何れも二次的に包含されているものと考えられ、近隣の上流から流入したものと推定される。4は、復元口径は28.8cmを測る大型の土師器の甌である。肥厚した口縁部は大きく開き、外側は指頭痕の残るナデが施され、内側は体部がヘラ状工具によるナデ、「口縁部はヨコナデを施す。」口縁端部は粘土紐で土師器の皿である。全体的に摩耗が見られるが肥厚した底面に粘土の高台部を貼り付け、端部をつまみ出しておらず、底径6.8cmを測る。6は、土師器の体部が欠損している壊の底部で底径5.4cmを測る。底部外側に回転糸切痕を残し内外面ともにヨコナデを施す。7は、須恵器の壊身で底部から上部が欠損しており、底径の復元口径は、8.6cmを測る。「ハ」の字形に開く高台を中心より貼り付けるもので、底面のヘラ切り後内外面ともにナデ調整が施されている。出土上器から奈良から平安時代の所産と思われる。



第68図 青谷横木遺跡 第4トレンチ実測図



第69図 青谷横木遺跡 出土遺物実測図

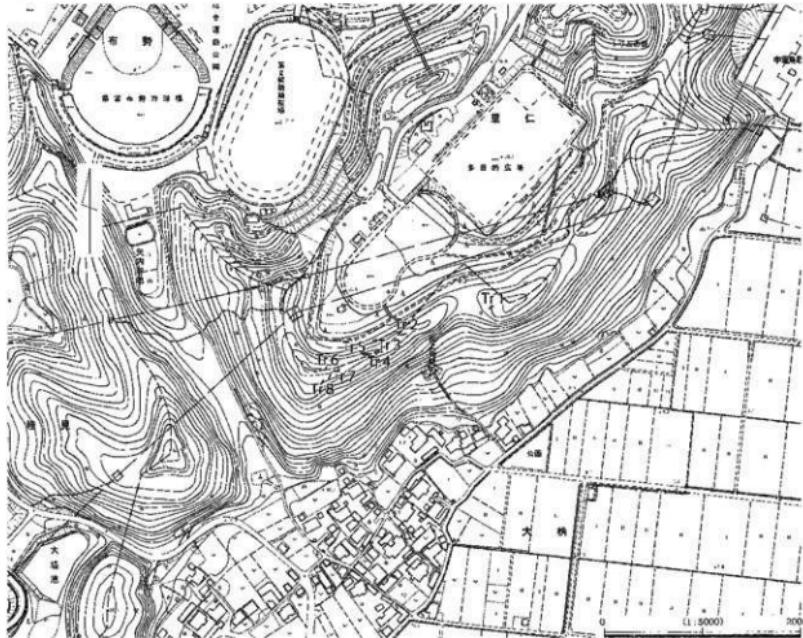
であった可能性もある。また、柱根径が比較的細いことから簡易な建物であり、主となる建物が近隣に所在する可能性もある。

この遺構面に広がる厚い疊層の下位に更なる遺構は検出されなかったが、弥生代前期の遺物包含層を確認し、土器片の割断面に摩耗痕が見られないことから、周辺に当該期の遺構面が所在することを暗示させていた。

第18節 里仁古墳群

里仁古墳群は、鳥取市大湧と同布勢との境を接する南北丘陵の尾根に展開し、全長81mの里仁29号墳をはじめ、54基の古墳と3地区の横穴群により構成されている。この古墳群では、昭和59年に隣接する西丘陵の尾根上で、布勢総合運動公園第2期整備計画に伴い、古墳時代中期前半と推定される4基の古墳の発掘調査が行われている。その結果、対象となった古墳は一辺が14~18m程度の方墳で、埋葬施設に組合せ箱式石棺、組合せ箱式木棺、鱗付き埴輪の上に複合口縁の壺が結合する特異な棺、埴輪で墓壇を覆うもの等を確認し、土器、円筒埴輪、鉄器、堅櫛、玉類等の遺物を検出し、当時の埋葬形態をしるうえで貴重な資料を提供している。また、字が異なるとから柄間古墳群に分類されている柄間1号墳は、同一稟線上に所在する前方後円墳で県東部最大となる全長92mを測る。古墳群が所在する丘陵の北西は、鳥取県営布勢総合運動公園として各種の運動施設が整備されており、建設にあたっては、布勢遺跡等縄文時代以降の多くの遺跡が発掘調査の後記録保存となっている。丘陵の南東は、大湧遺跡、船遺跡が抜がっている。

今回の発掘調査は、一般国道鳥取西道路新設工事に伴い実施した試掘調査であり、起状に富んだ丘陵



第70図 里仁古墳群 調査トレンチ位置図

に自生するクヌギ、スダジイ等の雜木の隙間から北西に布勢運動公園、南東に大柄遺跡等が所在する山地帯を眺望することができる。トレンチは、道路工事計画路線内に所在する古墳の有無とその規模を確認するため、8箇所のトレンチを設定し確認調査を行った。

第1トレンチ(1) [第70・71図 図版19]

第1トレンチは、里仁古墳群が帶状に長く連なる丘陵上で、道路建設予定範囲の北端部が、小高く盛り上りを見せる稜線の裾部に1.0m×6.0mの東西トレンチを設定した。

基本的な土層の層序は、上から第1層が層厚5cm程度の落葉等が堆積した黒褐色の表土である。第2層は、層厚3cm～8cmで東の小高い盛り上がりの後線から流入した薄い黒褐色土である。第3層は、周溝の検出面で、トレンチ中央部から西の周溝内に堆積した層厚5cm～20cmの黄褐色で、東側から流入した真砂土である。第4層は、周溝上面に堆積した灰褐色土である。第5層は、周溝南側の一部に堆積した黄褐色の真砂土である。第6層は、層厚約30cmで周溝内に広く堆積したにぶい褐色の真砂土である。第7層は、層厚約20cmで周溝南側の一部に堆積した暗灰黄色の真砂土である。第8層は、層厚5cm～20cmで周溝内に堆積した灰黃褐色の真砂土である。第9層は、層厚10cm程度のにぶい橙色土で、古墳築造後に周溝へ最初に堆積した真砂土である。第10層は、硬く締まった真砂土である。

検出された周溝は、地山を掘り込んだ深さ50cm程度と推定されるが、両肩の検出に至っていないことから、その幅は2.5m以上となる。更に、周溝底面が当初古墳と仮定していたトレンチ東側の小高い盛り上がりとは逆方向に回り込むこと、周溝が小高い盛り上がりの裾部からの隔たりが大きいことから、トレンチの西側に削平された墳丘の所在が考えられるが、古墳の時期を特定する遺物等は検出されなかったことから不明である。

第2トレンチ(1) [第70・72図 図版19]

第2トレンチは、道路建設予定地の中心部にほど近く、墳丘状の起伏が連続しており、東側の高まりを持つ裾部に1.0m×7.0mの東西トレンチを設定した。また、このトレンチの南側で稜線肩あたりに、現代のものと思われる2.0m×5.0m程度、深さ約1.0m程度で、目的不明の縦穴が2箇所掘られており、その1箇所から今回のトレンチを貫通する形で凹状の痕跡が北方向へ延びている。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚10cm程度でにぶい褐色を呈し、前述の溝を堀上げた時の客土である。第2層は、層厚3cm～6cm黒褐色表土である。第3層は、にぶい褐色を呈する客土で、厚い所で層厚10cm程度の溝を堀上げた時の客土である。第4層は、前述の溝が堀上げられる前に堆積していた旧の表土で、薄い黒褐色土である。第5層は、木根が朽ちた腐蝕土である。第6層は、にぶい褐色を呈する客土で、厚い所で層厚15cm程度の溝を堀上げた時の客土である。第7層は、層厚5cm～10cmのトレンチ東側に堆積する褐色土である。第8層は、層厚約20cmで周溝内に広く堆積したにぶい黄褐色土である。第9層は、現代に掘られた凹状の溝に堆積したオリーブ褐色土である。第10層は、層厚5cm～10cmのトレンチ西側に堆積する褐色土で、第7層と同層かと思われるが、とりあえず区別しておく。第11層は、周溝内部に広く堆積した黄褐色土である。第12層は、周溝の検出面で、墳丘の封土が流入したもので、層厚5cm～15cmのにぶい黄褐色土を呈し、第11層と同じものと思われるが、現代に掘られた凹状の溝で分断している。第13層は、層厚10cm～20cmのにぶい黄褐色で周溝内に流入した堆積土である。第14層は、にぶい黄褐色土で周溝内に広く流入した堆積土である。第15層は、古墳の築造後に堆積した流入土で、トレンチ東側で検出した幕墳の封土もある。

検出した周溝は、地山を掘り込んだ幅3.0m、深さ0.5mを測り、トレンチの東側と西側に所在する古墳の周溝であると推定されるが、遺物等は検出されなかつことから築造時期の特定には至らなかつた。

第3トレンチ(1) [第70・73・77図 図版19・20]

第3トレンチは、第2トレンチの西側に連続する起伏の高まりの間に1.0m×5.0mの東西トレンチを

設定した。基本的な土層の層序は、第1層が層厚5cm～10cmで黒色の表土である。第2層は、層厚5cm～15cmのにぶい褐色土である。第3層は、トレンチ東に所在する墳丘の封土で、周溝へ流入した層厚10cm～15cmの明褐色土である。第4層は、周溝内に部分的に堆積した層厚15cm程度の褐色土である。第5層は、周溝内に部分的に堆積した層厚10cm程度のにぶい黄褐色土である。第6層は、周溝内に部分的に堆積した層厚10cm程度の明黃褐色土である。第7層は、地山を掘り込んだ周溝検出面で、周溝内に部分的に堆積した層厚10cm～15cmの暗灰黃色土である。第8層は、周溝内に部分的に堆積した層厚15cm～20cmの赤黒色土である。第9層は、暗灰黃色でトレンチ東側の墳丘からの流入土である。第10層は、トレンチ東側の古墳築造後に最初に堆積した層厚15cm程度の明黃褐色土である。第11層は、トレンチ西側の墳丘からの流入土であり、墳丘から転落したと思われる土師器の壺3の検出面で、層厚約10cmの明黃褐色土である。第12層は、トレンチ西側の墳丘からの流入土である。第13層は、層厚約10cmでトレンチ西側の墳丘からの流入土である。第14層は、トレンチ西側の古墳築造後に最初に堆積した層厚5cm～15cmの明黃褐色土で墳丘から転落したと思われる土師器の高坏2が張り付いていた。第15層は、にぶい黄橙色土で、トレンチ東側の墳丘の一部を構成する地山である。

検出された周溝は、地山を掘り込んだ幅2.5m、深さ0.7mを測り、周溝の東側に所在する古墳の周溝として埋上を切り込んでいることから、第11～14層が堆積後に周溝の押土を掘り込んで、東側の古墳を築造し第4層～10層が堆積したものと思われる。従って、周溝の西側の墳丘が築造後に東側の墳丘が造られたものと推定される。

出土遺物2は、周溝床面に堆積する第14層で検出された土師器の高坏片で坏部に相当する。複合口縁の浅い皿状の杯部で、脚部を欠損している。復元口径は23.4cmを測り、内面体部はヘラミガキを施し、口縁端部から外面は器壁が著しく摩耗しており不明ある。3は、第14層に張り付いていた壺の複合口縁部で、口縁が外反し、扁曲部の外面に凸帯の粘土縁を貼り付けて下方へつまみ出している。内外面ともに横方向のヘラミガキを施す。残存率は1/4程度で、復元口径33.5cmを測り、頭部から下位が欠損、体部は倒卵形か球形が推測される。

古墳の時期は、周溝の西側からの転落土器で周溝西側の古墳は古墳時代前期と推定されるが、周溝東側の古墳では、遺物等が検出されなかったことから築造時期の特定には至らなかった。

第4トレンチ(Tr-4)〔第70・74図 図版20〕

第4トレンチは、起状態の高まりが狭く墳丘であるか否かを確認する為、頂部に1.0m×4.0mの南北トレンチを設定した。

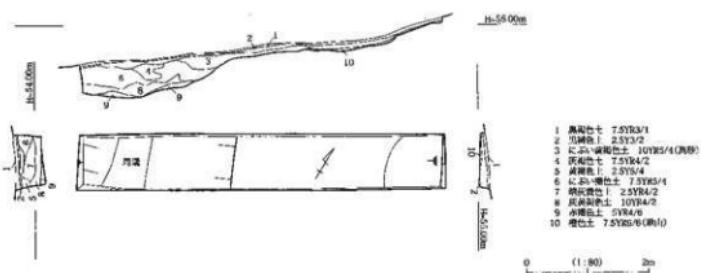
基本的な土層の層序は、第1層が層厚5cm程度で黒褐色の表土である。第2層は、薄い灰黃褐色の堆積土である。第3層は、層厚5cm～10cmの明黃褐色の真砂土である。

古墳の時期を特定する遺物等は検出されなかったが、第3層の底面で暗黃褐色の主体部と思われる小口を検出したことから、更なる掘り下げは行わず、次への詳細調査に委ねることとした。

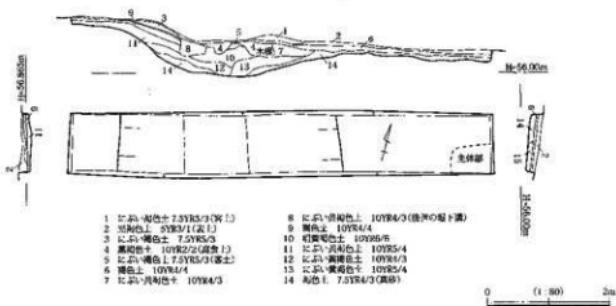
第5トレンチ(Tr-5)〔第70・75・77図 図版20・21〕

第4トレンチの東側で、起伏幅の狭い高まりと最も広い高まりの間に1.0m×9.0mの東西トレンチを設定した。

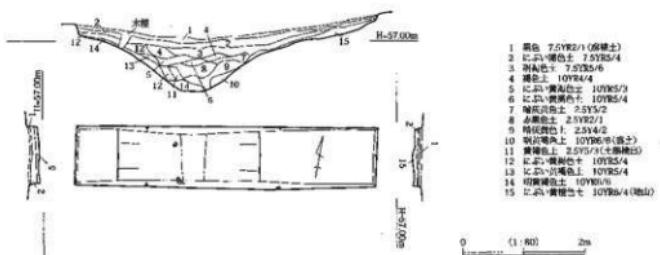
基本的な土層の層序は、第1層が層厚約5cm程度の薄い黒褐色の表土である。第2層は、層厚5cm程度～15cmの灰黃褐色の真砂土である。第3層は、トレンチ西側の墳丘肩部に施された葺石上部の検出面であり、トレンチ東側の墳丘からの流入土と共に転落したと思われる土師器上部の検出面で、層厚5cm～35cmの明黃褐色を呈する真砂土である。第4層は、トレンチ西の墳丘から流入し、中央部に堆積した層厚20cm程度のにぶい黄褐色土である。第5層は、周溝の検出面で、周溝西の墳丘から流入した層厚10cm～20cmの灰黃褐色の真砂土である。第6層は、周溝の西側の墳丘から流入した層厚20cm程度で灰黃褐色の真砂土である。第7層は、周溝西側の古墳が造られて周溝内に最初に堆積した層厚5cm～20cmでに



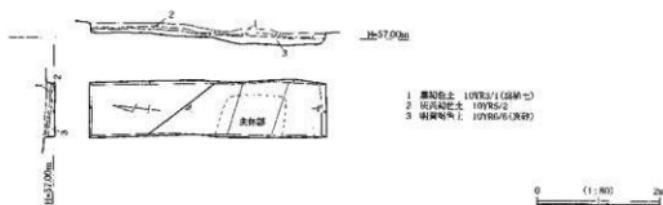
第71図 里仁古墳群 第1トレンチ実測図



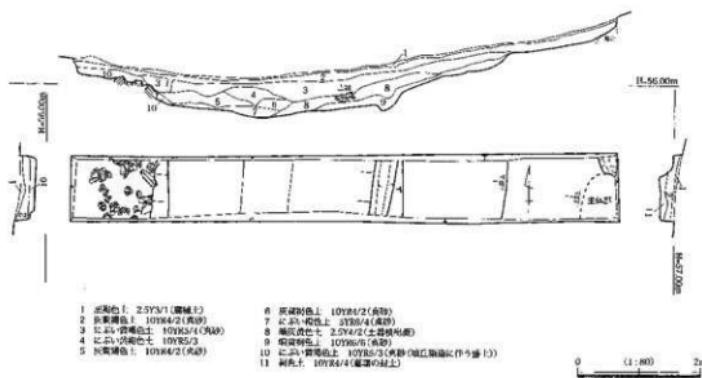
第72図 里仁古墳群 第2トレンチ実測図



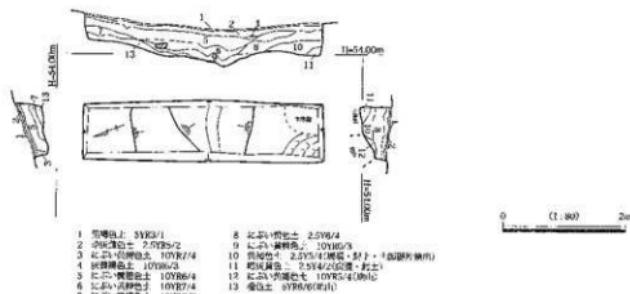
第73図 里仁古墳群 第3トレンチ実測図



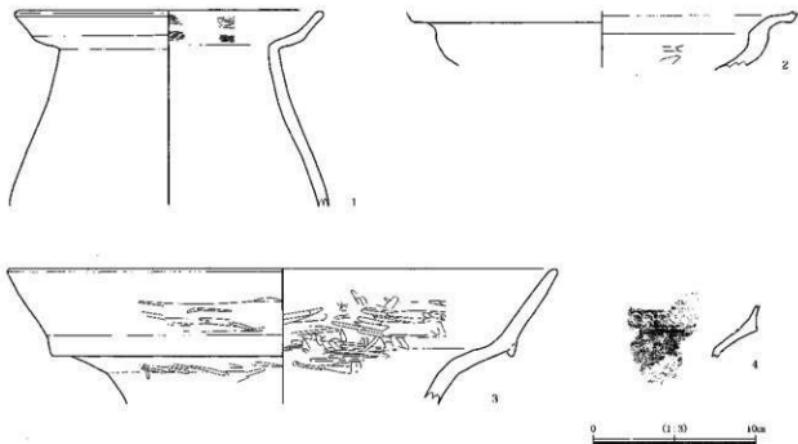
第74図 里仁古墳群 第4トレンチ実測図



第75図 里仁古墳群 第5トレンチ実測図



第76図 里仁古墳群 第6トレンチ実測図



第77図 里仁古墳群 出土遺物実測図

ぶい橙色の真砂土である。第8層は、周溝東側の墳丘から土師器と共に流入した層厚約20cmで暗灰黄色の真砂土である。第9層は、周溝東側の古墳が造られて周溝内に最初に堆積した層厚5cm～20cmで明黄褐色の真砂土である。第10層は、周溝西側の墳丘築土で層厚約15cmのにぶい黄褐色の真砂土で、墳丘の肩部に葺石を施した後に封土として盛られたものと思われる。第11層は、周溝東側の墳丘主体部に施された褐色の封土である。

検出した周溝は、地山を掘り込んだ深さ0.5mを測り、周溝の東側に所在する古墳の周溝として堆土を切り込んでいることから、第層8～9層が堆積後に周溝の堆土を掘り込んで、東側の古墳を築造し第4層～7層が堆積したものと思われる。従って、周溝の西側の墳丘が築造後に東側の墳丘が造られたものと推定される。また、周溝の東側に所在する墳丘の肩部が窪み、トレンチ中央よりに周溝の底面と思われる凹みが認められることから、古墳築造後の比較的早い段階で、墳丘の一部が崩壊した可能性が高い。

周溝西側墳丘肩部施された葺石は、墳丘の全面を覆う様なものではなく、不規則で肩部のみ見られることから、肩部の崩壊防止を意識したものと思われ、凝灰岩の山石を手の平大からやや大きめ程度に割って地山面に貼り付けた後、石の隙間に詰めるように石材の頂部まで盛上を施すことで、葺石としたものと思われる。

古墳の時期は、周溝内への転落土器から、周溝東側の古墳は古墳時代前期後半と推定されるが、周溝西側の古墳では、遺物等が検出されなかったことから築造時期の特定には至らなかった。

1は、第5トレンチ第8層で検出された壺で頸部の下半が欠損し、口縁内面にハケ目調整後ヨコナデ、外面はヨコナデを施す。口径は19.0cmを測り、頸部が「く」字形に彫曲した後緩やかに立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる複合口縁を呈するもので、体部最大径が下半近くまで極端に開かないで下がる。体部は、倒卵形と思われるが、近隣では見られない類の器形であることから、在地若しくは、遠隔地からの搬入品である可能性が高い。

検出された遺物2・3は、第3トレンチ西側の墳丘からの転落土器で、遺物1は、第5トレンチ東側の墳丘からの転落土器で、であることから、同一の古墳への供獻土器と思われ、出土土器から古墳時代前期の所蔵と思われる。

第6トレンチ(Tr-6) [第70・76図 国版21]

第6トレンチは、第5トレンチの西側で確認された墳丘を更に西側下った緩斜面で、墳丘状の高まりが認められることから、その裾部をかけて1.0m×4.0mの南北トレンチを設定した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚約3cm程度の薄い黒褐色の表土である。第2層は、層厚5cm～10cmで暗灰黄色の堆積土である。第3層は、トレンチ北側の一部に見られるにぶい黄橙色土である。第4層は、トレンチの中央よりに流土が部分的に堆積した灰黄褐色土である。第5層は、周溝上面に堆積した層厚10cm～20cmのにぶい黄橙色土で、南東に隣接する墳丘からの転落と思われる土師器片が数点検出された。第6層は、周溝上面に堆積する層厚10cm～15cmのにぶい黄橙色土で、南東に隣接する墳丘からの転落と思われる土師器片が数点と、層中の底面で手の平大の川原石を検出した。第7層は、トレンチ北側の一部に見られる層厚約10cmのにぶい黄橙色である。第8層は、周溝の検出面で、トレンチ南側に所在する墳丘から流入した層厚10cm～15cmのにぶい黄色土である。第9層は、トレンチ南の古墳が造られて最初に堆積した堆土で、層厚約10cmのにぶい黄橙色土である。第10層は、土師器片、炭化物が混在する黄褐色の墳丘盛土である。第11層は、炭化物が混在する暗灰黄色で墓壙の封土と思われる。第12層は、にぶい黄褐色の地山である。第13層は、トレンチ北川に見られる橙色の地山である。

検出された周溝は、地山の一部を掘り込んだ幅2.5m、深さ0.45mを測り、周溝の南側に所在する古墳のものと推定されるが、周辺の地形形状から東側にも墳墓の存在が考えられる。また、古墳の時期を特定できる遺物が検出されなかったことから、築造時期の特定には至らなかった。

第7トレンチ(Tr-7) [第70・77・78図 国版21]

第7トレンチは、第6トレンチを設定した丘陵尾根から南側にやや下った緩斜面上に1.0m×6.0mの南北トレンチを設定した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚5cm程度の薄い黒褐色の表土である。第2層は、トレンチの南に木根が腐蝕した黒褐色土である。第3層は、トレンチ南の一部に堆積した浅黄色土である。第4層は、山肌を流水が浅く浸食した窪地に堆積したオリーブ褐色土である。第5層は、層厚10cm～25cmのにぶい黄色土である。第6層は、第5トレンチの西側に確認した墳丘裾からの流入土で、層厚15cm～20cmの褐色土である。第7層はトレンチ南端部に見られる層厚約30cmで黄褐色土の遺物包含層である。層中に土師器の細片が含まれるが、割断面が著しく摩耗していることから、丘陵の尾根方向から流入したものと思われる。第8層は、緩斜面が更に緩い斜面となって堆積した層厚は約30cmで、にぶい黄色土の遺物包含層である。層中には、細片となった土師器片が混在しており、割断面が著しく摩耗していることから、丘陵の尾根方向から流入したものと思われる。第9層は、トレンチ北側に堆積する層厚5cm～20cmの黒褐色土である。第10層は、トレンチ北側に薄く堆積する明黄褐色土である。第11層は、トレンチ南側で起伏の凹凸を見せるにぶい黄橙の地山である。

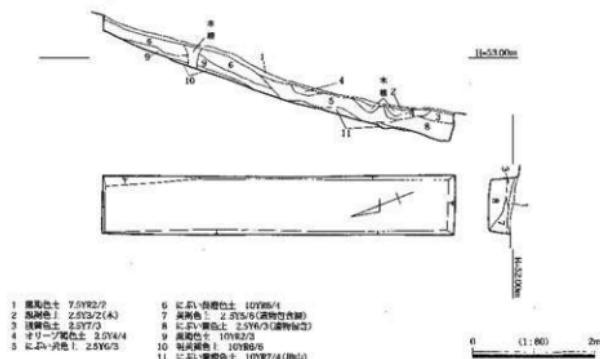
遺構は検出されなかつたが、第7・8層で尾根に所在する墳丘からの転落遺物と推定される土師器の細片を検出した。

出土遺物4は、第8層で検出された壺の口縁から頸部で、口縁部に竹管による連続スタンプ文を施し下位に2条の凹線が巡る。トレンチ北側の墳丘からの転落土器の可能性があり出土土器から古墳時代前期の所産と思われる。

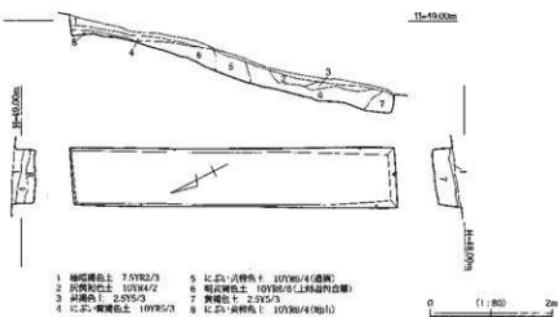
第8トレンチ(Tr-8) [第70・79図 国版22]

第8トレンチは、第7トレンチから更に尾根を下った緩斜面に舟状に張り出した高まりの裾部に1.0m×6.0mの東西トレンチを設定した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚5cm～10cm極暗褐色の表土である。第2層は、トレンチ南寄りの一部に見られる層厚約10cmの灰黄褐色土である。第3層は、トレンチ南寄りの一部に見られる層厚5cm～10cmの黄褐色土である。第4層は層厚約5cmのにぶい黄褐色土である。第5層は、トレンチ中央部



第78図 里仁古墳群 第7トレンチ実測図



第79図 里仁古墳群 第8トレンチ実測図

に見られる層厚約30cmにぶい黄褐色土である。第6層厚トレンチ中央部に堆積する層厚約30cm黄褐色で摩耗した土器の細片を包含している。第7層は、トレンチ南側に堆積した層厚約30cmの黄褐色土である。第8層は、トレンチ北側に見られるにぶい黄褐色の地山である。

第6層の包含層を第5層が切り込んでおり、その形状から古墳の周溝と断定できないが、人為的な掘込み面であると思われる。また、第6層で検出された上部器の細片は、何れも摩耗が著しいことから、時期の特定には至らなかった。

小結

里仁古墳群の調査では、道路建設計画予定路線の丘陵尾根上に設定したトレンチの全てで墳墓の周溝を確認し、丘陵尾根から南側にやや下った緩斜面上の2箇所のトレンチで遺構面と二次堆積と推定される遺物包含層を検出された。

検出した遺物が少なかったことから、全ての墳墓での築造時期を特定することは出来なかったが、内1基が古墳時代前期後半と推定され、丘陵上に近接して連続する墳丘であることから、ほぼ同時期に古墳が築造されている可能性も考えられ。

また、当該丘陵上で確認された墳墓は、高まりを持つもののみではなく、自然丘陵と思われる地下に

墳墓の所在する可能性があることから、次に予定される調査では丘陵全体に注視すべきであり、綿密な調査に委ねることとする。

第19節 鍋山城跡

鍋山城跡は、鳥取市大柄と同布勢との境を接する南北丘陵の頂部に所在し、周辺は布勢運動公園へ至る切り通しの農道を隔てて北東丘陵に54基の古墳が連なり、3地区の横穴群によって構成されている里仁古墳群が展開している。また、切り通しの市道宮谷布勢線を隔てる南西丘陵には全長81mの里仁29号墳が所在している。丘陵の北西は、鳥取県営布勢総合運動公園として各種の運動施設が整備されており、建設にあたっては、布勢遺跡等縄文時代以降の多くの遺跡が発掘調査の後記録保存となっている。丘陵の北東は、大柄遺跡、島遺跡が拡がっている。

今回の発掘調査は、一般国道鳥取西道路新設工事に伴い実施した試掘調査であり、布勢の天神山城の支城として往古より知られている鍋山城跡を確認するもので、鍋山城跡の中心部とされる丘陵の頂部は、不正形であるが300m程度の平地が形成されている。

発掘調査は、城の中心部とされる丘陵の頂部と同丘陵で堀切状の起状地、丘陵の北西裾部で緩斜面となっている竹林の3箇所にトレーンチを設定し確認調査を行った。



第80図 鍋山城跡 調査トレーンチ位置図

第1トレーンチ(Tr-1) [第80・82図 図版22]

第1トレーンチは、鍋山城跡の中心部とされる平地の頂部から丘陵が馬蹄形に回り込んだ南西尾根に位置し、狭小であるが堀切状の窪地を中心として1.0m×7.0mの南北トレーンチを設定した。

基本的な土層の層序は、上から第1層がトレーンチ北側の木根腐植土で地中深く陷入していた。第2層は層厚5cm程度で落葉等の腐植土が堀切の窪地からトレーンチの南に堆積した黒褐色の表土である。第3層は、窪地の上面に堆積した層厚10cm～20cmにぶい黄色の粘質土である。第4層は、南の肩部からの流入土で、堀切の検出面に厚く堆積したぶい黄橙色土である。第5層は、北側の肩部から流入した堆土で、層厚10cm～30cmのぶい黄色の粘質土である。第6層は、堀切内に堆積した層厚15cm程度でぶい黄橙色のやや粗い真砂土である。7層は、南側の肩部から流入した層厚10cm程度の微砂土である。第

8層は、堀切の平底底面に最初に流入した層厚5cm～20cmの堆土である。第9層は、堀切の南北両肩部に見られ、堀切底面に見られる地山土とブロックが混在することから、堀切底面の地山を掘り下げた際に堀上に盛り土である。第10層は、指頭でかるく圧痕が付くほどに柔らかで、層厚約20cmのにぶい黄色土であることから盛土と思われる。第11層は、北側の堀切の傾斜を増すために肩部に盛られたと思われるにぶい黄橙色土である。第12層は、堀切の両肩部に見られ、堀切の傾斜を増すために肩部に盛られたと思われるにぶい黄橙色土である。第13層は、層厚5cm～20cmのにぶい黄橙色の盛土で、丘陵の稜線が狭小に削平されていることから、この堆土上への可能性もある。第14層は、層厚5cm～10cmのにぶい黄橙色の盛土である。第15層は、層厚5cm～15cmで帯状に薄く堆積し、暗灰黄色の腐植土と思われるところから旧表土と思われる。第16層は、地山の上面に薄く堆積する層厚5cm～10cmの明褐色の粘質土である。第17層は、地山の上面に堆積する層厚5cm～10cmの橙色の粘質土である。第18層は、にぶい褐色の白色ブロックを含む地山である。

堀切は、地山を掘り込んで箱形の底面を造りだし、高く盛土を施したもので、肩幅2.3m、高さ1.2mを測り、箱形の底面幅は1.0mを測る。堀切の時期を特定する遺物等は検出されなかったことから不明である。

第2トレンチ[T-2] [第80・83図 図版22]

第2トレンチは、道路建設予定地の中心部で、鍋山城跡の中心部とされる丘陵頂部の平地に1.0m×7.0mの東西トレンチを設定した。

基本的な土層の層序は、第1層が層厚5cm程度の薄い暗赤褐色の表土である。第2層は、トレンチ北西の一部に見られるにぶい橙色粘質土である。第3層は、層厚10cm～25cmにぶい赤褐色の粘質土である。第4層は、トレンチの北西から中程にかけて地山面の上に堆積するにぶい橙色の粘質土である。第5層は、軟岩質でにぶい褐色の地山である。

層位的には、ほぼ安定した層序を示しており、人為的な造成の痕跡も無く、遺物等も検出されなかった。

第3トレンチ[T-3] [第80・81図 図版23]

第3トレンチは、鍋山城跡の中心部とされる丘陵の西裾で、市道宮谷布勢線と接する竹林内の緩傾斜地に1.5m×6.0mの東西トレンチを設定し、地表下1.4mまで掘り下げて遺構、遺物の有無を確認したが、調査中途で道路新設工事の一部変更により簡素な調査となつた。



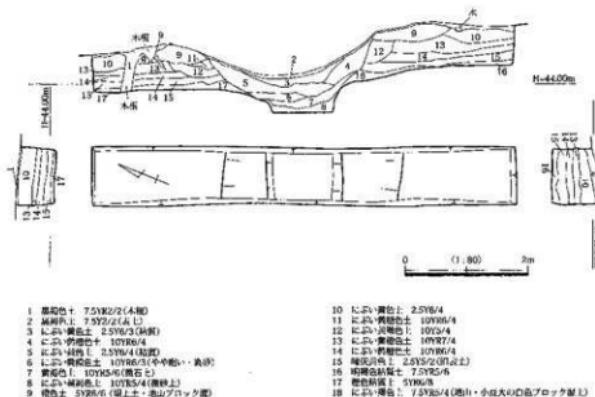
トレンチの詳細な観察と実測はできなかつたが、掘り下げた1.4mの範囲で黄褐色系の6層からなる層序を確認したが、ほぼ安定した堆積を見せ、最下層で土器片と石鏃1点を検出したが、その部位から時期の特定には至らなかつた。

第81図 鍋山城跡 出土遺物実測図

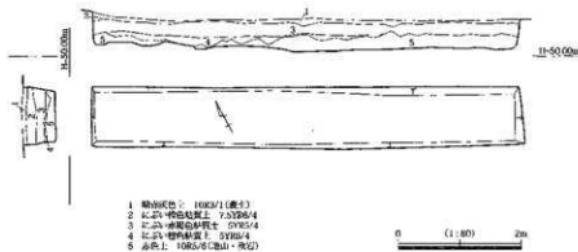
1は、サヌカイトを材とする石鏃である。ほぼ形態は整っており、細かく調整が施されており、基部に深い抉入、側縁部は直線状を呈し、脚部は丸みを帯び、凹基無茎鏃に分類される。

小結

中世城館として周知され、鍋山城跡の中心部とされている、丘陵頂部のトレンチでは、特に人為的な掘削等の痕跡は認められなかつたが、丘陵頂部から馬蹄形状に屈曲する尾根に造られた堀切で、底面を箱形に成形し、堀上上で肩部に盛土を施して堀切内部を高くする工法が見られた。今回堀切の調査例が少ないとから、極平凡な工法なのか、地域性を伴うものかは分からぬが、一定の成果を得ることができ、今後の堀切調査の基礎資料になるものと思われる。



第82図 銅山城跡 第1トレンチ実測図



第83図 銅山城跡 第2トレンチ実測図

第20節 大柄所在遺跡

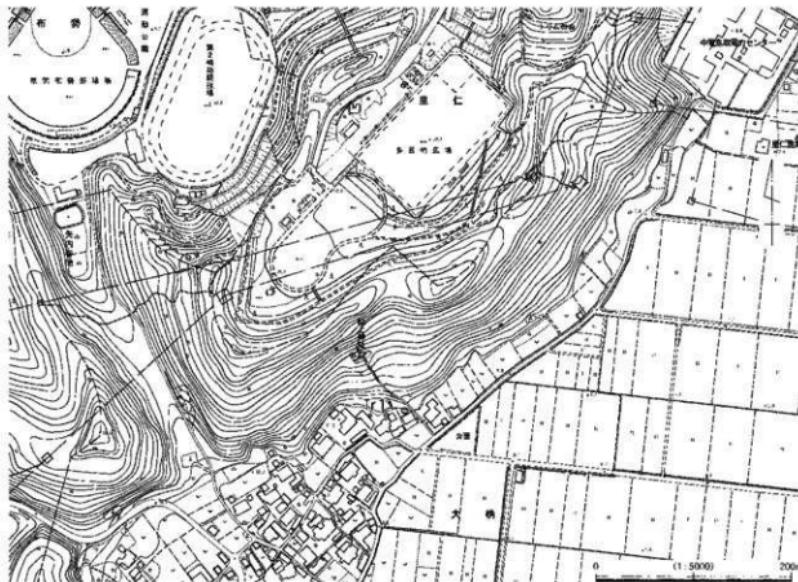
大柄所在遺跡は、野坂川左岸に沿った平野部の鳥取市大柄地内に所在し、鳥取県布勢運動公園の南東に近接しており、周辺では绳文時代から中世の複合遺跡である「大柄遺跡」、集落跡が確認されている「里仁遺跡」、丘陵部では「柄間古墳群」、「里仁古墳群」、「宮谷古墳群」、「本高古墳群」、「古海古墳群」、「徳尾古墳群」等が展開している。

今回の発掘調査は、一般国道鳥取西道路の新設工事に伴い実施した試掘調査で、道路建設に係る計画路線内に1箇所の試掘調査トレンチを設定し、垂直的に造構、遺物包含層の有無を確認した。

第1トレンチ(Tc-1)【第84・85図 図版33】

大柄集落の後背後には守護神である「松上神社」が後背地に鎮座しており、その参道隣地の竹林内に2.0m×6.0mの南北トレンチを設定した。

土層の基本的な層序は、1:から第1層が層厚約5cmの黒褐色の耕作土である。第2層は、層厚50cm～40cmの灰色を呈する厚く施された客土で、層中からPPバンドの断片、ナイロン系の布等の現代の生活用品が混入していた。第3層は、粒状の黄色ブロックを含むにじみ黄色の地山であった。

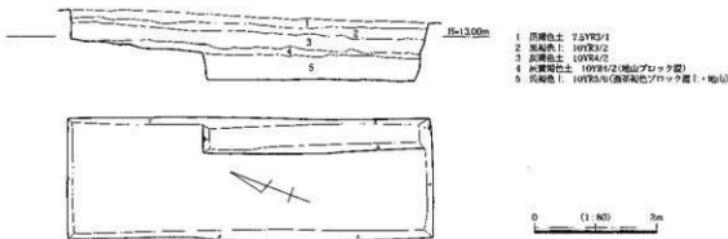


第84図 大柄所在遺跡 調査トレンチ位置図

小結

当該地は南丘陵の裾に位置することから、多量の堆積土が予想されたが、地表下約50cmで地山に達し、地山の上面は波状の起伏と鋭角的な掘削痕が認められ、地山の上層部に至るまでは、客土が厚く施されており、遺構、遺物は検出されなかった。

このことから当該地は、西の丘陵斜面に掘削断面が路頭している地山が推移しているものと考えられ、大規模な掘削と盛り土による畠地造成が行われたものと思われるが、現代遺物の内容から比較的新しい時期に耕作放棄されたものと思われる。

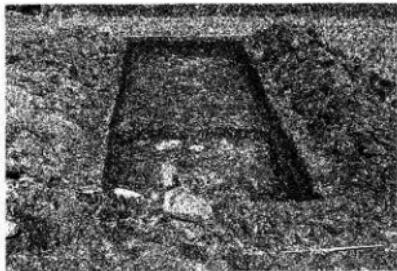


第85図 大柄所在遺跡 第1トレンチ実測図

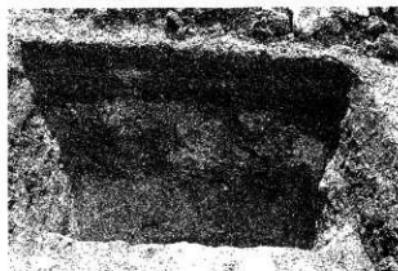
写真図版



大井所在遺跡 調査地遠景（北東から）



大井所在遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況（南から）



大井所在遺跡 第1トレンチ南壁断面（北から）



山手所在遺跡 調査地遠景（北から）



山手所在遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況（南東から）



山手所在遺跡 第1トレンチ旧地表下掘り下げ状況（北東から）

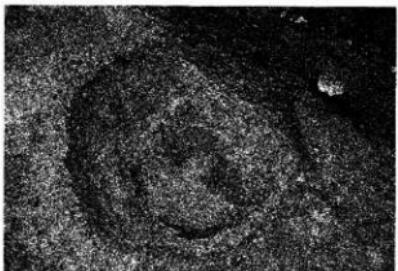


山手所在遺跡 第1トレンチ北西壁断面（南東から）

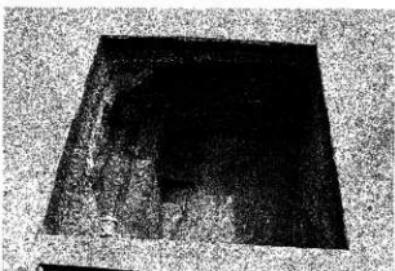


東町所在遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況（南から）

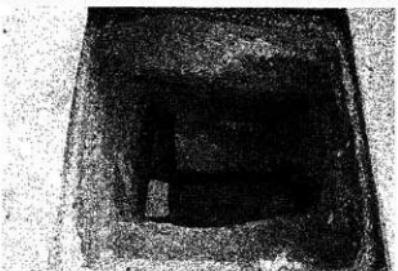
図版 2



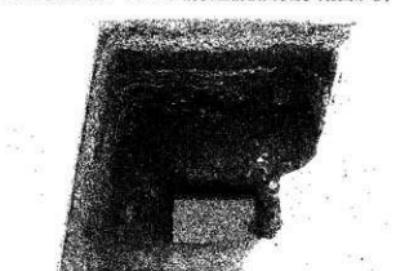
東町所在遺跡 第1トレンチSK-01検出状況（南西から）



天神山遺跡 第1トレンチ溝状遺構検出状況（北西から）



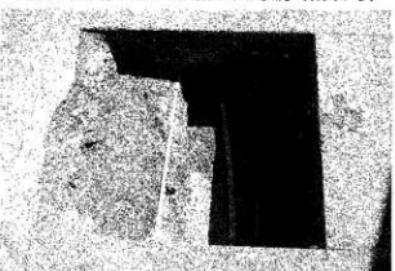
天神山遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況（北東から）



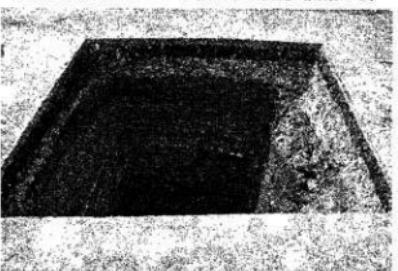
天神山遺跡 第2トレンチ掘り下げ状況（北西から）



天神山遺跡 第3トレンチ掘り下げ状況（南東から）



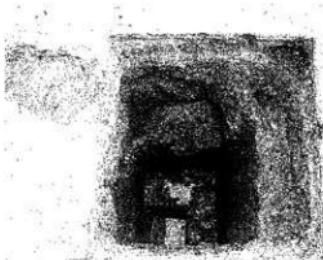
天神山遺跡 第4トレンチ掘り下げ状況（北西から）



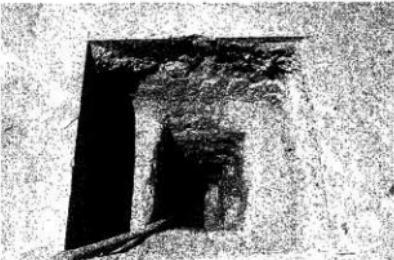
天神山遺跡 第5トレンチ掘り下げ状況（南東から）



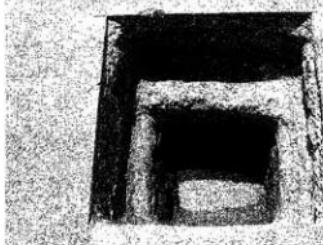
天神山遺跡 第6トレンチ掘り下げ状況（東から）



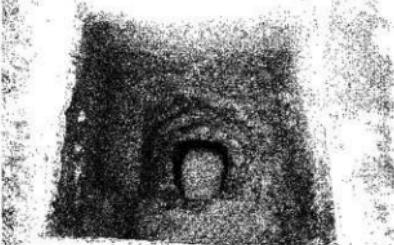
天神山遺跡 第7トレンチ掘り下げ状況（北から）



天神山遺跡 第8トレンチ掘り下げ状況（東から）



天神山遺跡 第9トレンチ掘り下げ状況（北から）



桂見所在遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況（南西から）



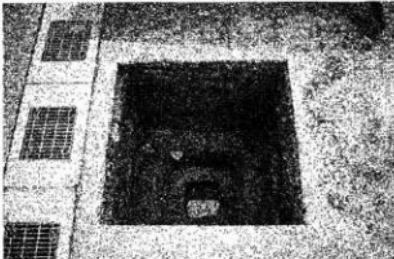
桂見所在遺跡 第2トレンチ掘り下げ状況（北西から）



桂見所在遺跡 第3トレンチ掘り下げ状況（北西から）



桂見所在遺跡 第3トレンチ集石検出状況（北西から）



桂見所在遺跡 第4トレンチ掘り下げ状況（北西から）

図版 4



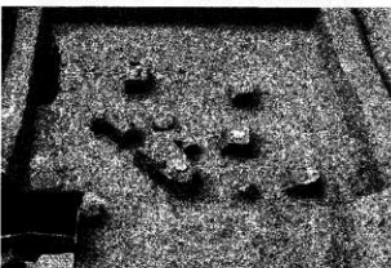
桂見所在遺跡 第5トレンチ掘り下げ状況（北西から）



岩吉遺跡 第1トレンチ調査地近景（北東から）



岩吉遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況（北から）



岩吉遺跡 第1トレンチ遺物出土状況（北から）



岩吉遺跡 第1トレンチ南壁断面（北から）



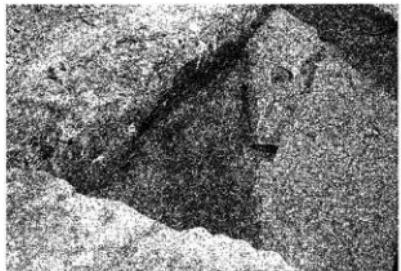
岩吉遺跡 第2トレンチ遺構検出状況（東から）



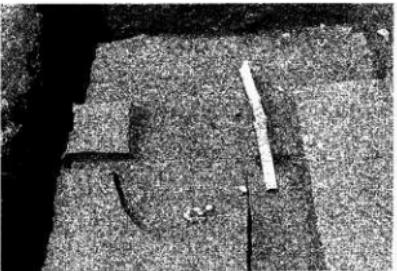
岩吉遺跡 第2トレンチSD-01検出状況（南西から）



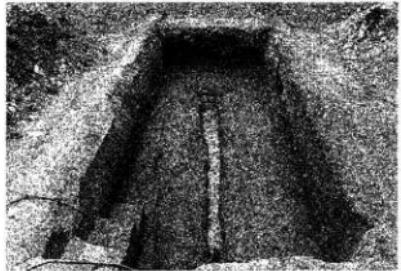
岩吉遺跡 第2トレンチSD-02遺物出土状況（南から）



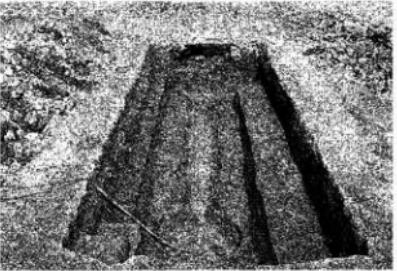
岩吉遺跡 第2トレンチSD-02検出状況（南西から）



岩吉遺跡 第2トレンチSK-01検出状況（東から）



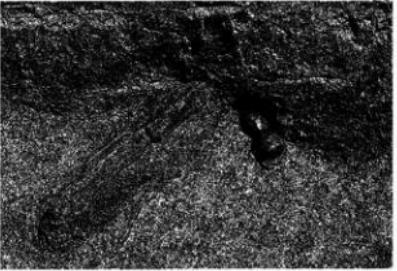
岩吉遺跡 第2トレンチ掘り下げ状況（東から）



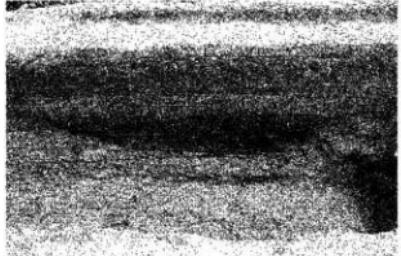
岩吉遺跡 第3トレンチ掘り下げ状況（西から）



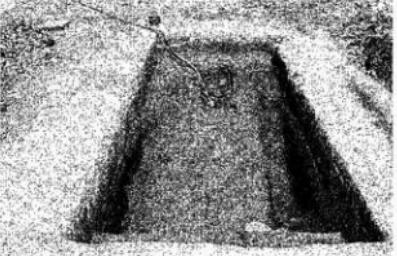
岩吉遺跡 第4トレンチ木器溜り検出状況（北から）



岩吉遺跡 第4トレンチ木製品出土状況（北から）

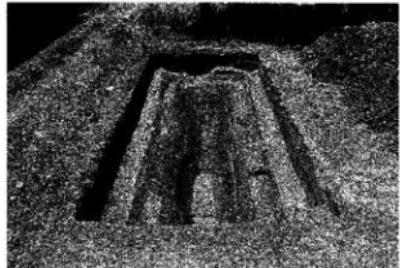


岩吉遺跡 第4トレンチ木器溜り北壁断面（南から）

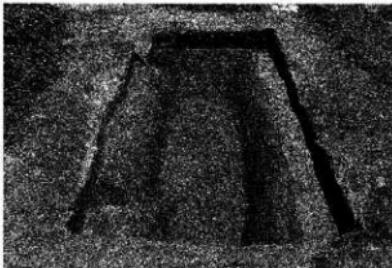


岩吉遺跡 第4トレンチ掘り下げ状況（西から）

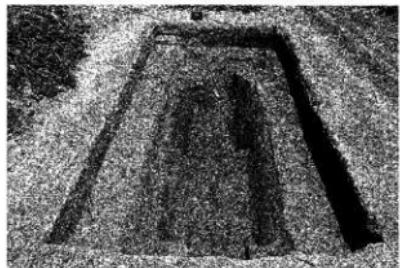
図版 6



岩吉遺跡 第5トレンチ掘り下げ状況（東から）



岩吉遺跡 第6トレンチ掘り下げ状況（西から）



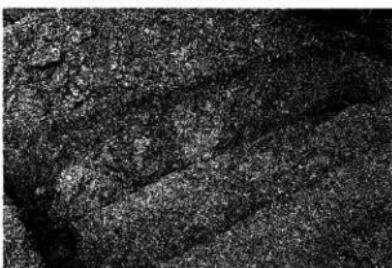
岩吉遺跡 第7トレンチ掘り下げ状況（西から）



内海中所在遺跡 調査地遠景（西から）



内海中所在遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況（北西から）



内海中所在遺跡 第1トレンチ北東壁断面（西から）



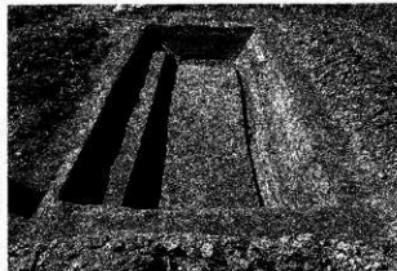
内海中所在遺跡 第2トレンチ掘り下げ状況（北東から）



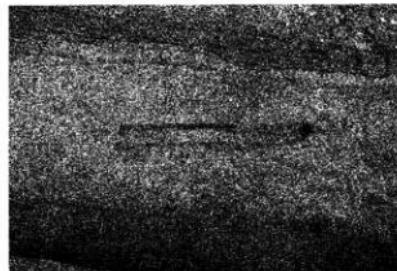
内海中所在遺跡 第2トレンチ南東壁断面（北から）



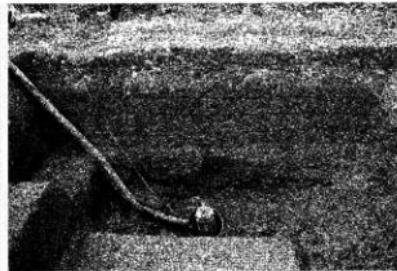
下坂本清合遺跡 調査地遠景（北東から）



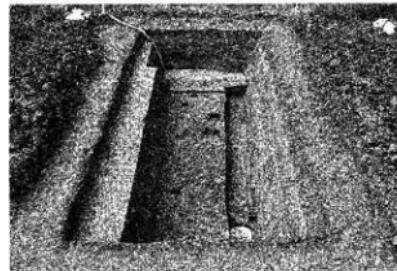
下坂本清合遺跡 第11トレンチ掘り下げ状況（東から）



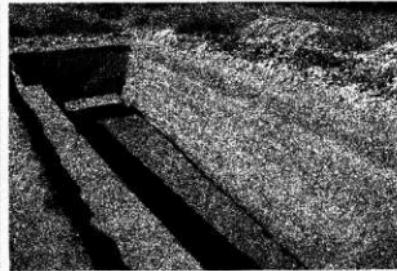
下坂本清合遺跡 第11トレンチ畔状遺構検出状況（南から）



下坂本清合遺跡 第11トレンチ西壁断面（東から）



下坂本清合遺跡 第12トレンチ掘り下げ状況（東から）



下坂本清合遺跡 第12トレンチ北壁断面（南東から）

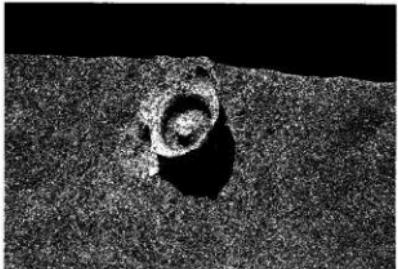


下坂本清合遺跡 第13トレンチ掘り下げ状況（北西から）



下坂本清合遺跡 第13トレンチ南西壁断面（東から）

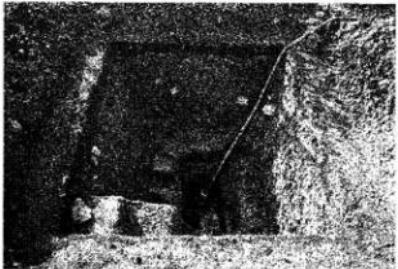
図版 8



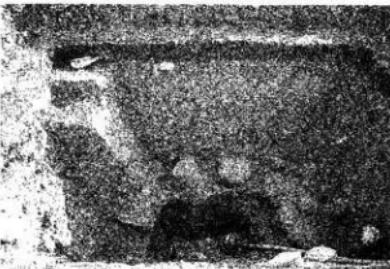
下坂本清合遺跡 第13トレンチ土器出土状況（北から）



会下・郡家遺跡 調査地遠景（北東から）



会下・郡家遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況（東から）



会下・郡家遺跡 第1トレンチ南壁断面（北から）



乙亥正所在遺跡 調査地遠景（北東から）



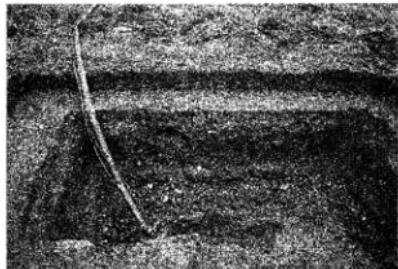
乙亥正所在遺跡 第1トレンチ掘り下げ状況（東から）



乙亥正所在遺跡 第1トレンチ西壁断面（東から）



乙亥正所在遺跡 第2トレンチ掘り下げ状況（東から）



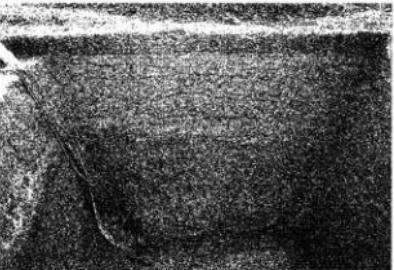
乙亥正所在遺跡 第2トレンチ西壁断面（東から）



乙亥正所在遺跡 第2トレンチ北壁断面（南西から）



乙亥正所在遺跡 第3トレンチ掘り下げ状況（東から）



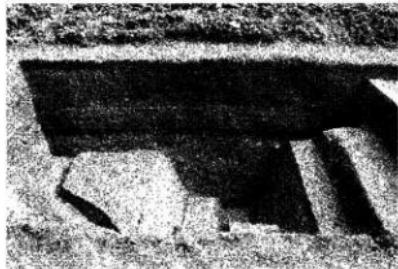
乙亥正所在遺跡 第3トレンチ西壁断面（東から）



乙亥正所在遺跡 第3トレンチ北壁断面（南西から）



乙亥正所在遺跡 第4トレンチ掘り下げ状況（西から）



乙亥正所在遺跡 第4トレンチ南壁断面（北から）



乙亥正大角遺跡 調査地遠景（西から）